

申筈に候。且兩組頭之儀者、是又諸頭之目當与相成申儀に候間、其身之愼は不及申、常々組中之儀心頭に懸け可罷在候。扱又組之人々撰擧之節、自分之好惡、又は他之申成を致信用候様に有之候而者、畢竟其弊不輕事に至り候。暨右風俗に付而者、品重き密事をも相洩し候者共も有之躰に相聞候。ヶ様之儀は士には不似合事に候。是等之趣急度相心得候様、兩組頭廣間書院に呼寄、直きに爲申聞置候。且又當時勝手向逼迫之儀は、各存之通に候。依之近年格別之趣を以、出納符合之詮議申付候事に候。就中財用之儀は、政事中に而も尤重く相預る品に候條、いつ迄も財用致不足、勝手向不取直而者、政務方にも自ら相障り、其上借知も申付置、誠に寢食不安事に候間、何分萬事加節儉、近年之内に者是非勝手向取直り、借知も相返し候所迄至り不申而者不相成事に候。就中近年諸頭を初、組・支配等之儀に付願方多、中に者當時をも辨へ兼候哉、一概に組・支配之事而已心付、強たる願も有之躰に候。尤組・支配之儀を一途に存候儀は當然之事に候へ共、右等之風俗は夫とは品も違候條、右之意味能々致辨別、是以後一統其所に存付、願方等急度心得も可有之候間、此趣頭・支配人等に可被申聞候。其上にも願出候節、願方右之趣意に致相違候族は、各等より急度了簡之趣申入、幾重にも致會得候様可被申聞候。將又右出納符合之會議就申付候、省略仕法其向々に寄格別に遂會議、仕法書等差出候分も有之候へ共、いまだ會議不行届役所も有之に付、寺社奉行を始め夫々別紙之通

於次爲申聞候。且又家中之人々他國詰之節等借用銀返上等之儀、去年相定め候通彌嚴重に可有之候。右等之趣爲心得有増申出候。右申出候内勝手方に拘り候儀者、甲斐守譯而承知有之、織江にも可有演述候、以上。

八月

八月廿二日。諸士の鳥構を行ふもの、松山を荒廢せしむるを禁ず。

〔政隣記〕

別紙御郡奉行紙面之寫相越之候條、被得其意、組・支配に嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配にも相違候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。右之趣可被得其意候、以上。

八月廿二日

横山 山城

水越八郎左衛門殿

石川・河北郡松山、近年以之外木薄く相成申候。就中御家中初鳥構場之邊松木に障不申様、暨松木之株に火を焚候儀不相成趣、是迄度々一統被仰渡も有之、御郡方にも嚴重申渡置候得共、近年猥に相成、其上御家中家來末々夜之内より山へ參り、出來松を勝手次第伐取火に燒候族も有之、鳥構木に眞を付に罷越候節は松木之枝を下し、是迄無御座處を伐ならし構場之

批取はへぎ
とりと訓む

様に拵置、或は埋名与名付松木之根本へ名札を入置、後日に至り申分出來、甚紛敷新場共多有之躰、委曲山廻り共及斷、構場之札も批取指出申候。其上近年構場之儀に付、不筋之族も有之躰粗相聞え申候。且又鳥構人家來末々、百姓持山之内に拵置候芝にうを無斷取荒し、又は持はへのはりの木を伐取、構木之眞等に相用候族も毎度有之、百姓共迷惑仕候段申聞候。畢竟御郡方之者稼人等見習、賊木等毎度有之、御縮方行届不申候。依而今般百姓共之内嚴重僉議仕置候儀も御座候。元來山廻共等閑に相心得候故、右等之族も出來候儀与此度嚴重に申付候。依而構場等山廻り共繁々爲相廻、不埒之儀見受候者差懸り見咎、名前爲承札申管に御座候。勿論先年より相願不申構場にても、年久敷定構場之様に成來候分者、不筋之譯無御座候得者先見逃置候得共、たとへ定構場たり共松木に障、出來松に札を揚、都而新場之分者無構札批取指出候様申渡、尤山番人共にも其段嚴重申付置候。右等之趣御家中一統家來末々迄、嚴重に仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

子八月八日

杉山 新平

宮崎久兵衛

横山 山城様

是月は大盡
なり

八月晦日。能登の質業者にその定書を示す。

能登口郡に
ても同日同
様の申渡あ
り

〔郡方御觸〕

覺

一、六枚	中居組	一、二枚	鶴川組
一、十枚	鹿野組	一、十三枚	稻舟組
一、一枚	大澤組	一、八枚	走出元組
一、七枚	馬場組	一、十一枚	宗玄組
一、十三枚	飯田組	一、四枚	折戸組

右は先達而質商賣承届候者共、今度詮議之上改而質定ヶ條書相渡候。且ヶ條書之内にも有之通、質請人に見合札早速相渡候様、質屋共見可申渡候。元來奥郡之儀は、是迄質物三十ヶ月或は二十ヶ月を限与在之候得共、此度改而十五ヶ月限相定候條、其餘待札仕間敷、尤無左而は畢竟御郡方爲にも不宜儀与遂詮議候間、此段可申渡候。

一、是以後新に質商賣相願候者は、是迄之通願書付出候得ば、役所より右定書可相渡候。
一、質屋相仕舞候者は、右札取上急速可指出候。

右之趣夫々可得其意候。勿論質定ヶ條之趣、無違失嚴重可相守旨、不相洩様夫々可申渡候、

以上。

子八月晦日

高田彌左衛門
菅野兵左衛門

能州奥郡十村中

追而右札先々順達有之候而相廻可申候。且質屋共手前よりケ條書之趣得其意候旨請書、面々手前迄取立置可申、此段爲心得申渡候、以上。

質定

- 一、質物十五ヶ月、其餘待札仕間敷、并口請合仕間敷事。
 - 一、利足は百目に付一ヶ月一步五之事。
 - 一、俵物は十ヶ月切、尤利足右同斷之事。
 - 一、質屋尻請人無之分質取申間敷、尤質請人見合札可相渡置事。
 - 一、質物取扱夕七つ時限り之事。
- 右質定ケ條之儀嚴重可相守也。

八月。前田齊廣、頭分等をして政事を議せしむべからざること老臣に告ぐ。

各とは老臣
を指す

〔御家老方御密用之覺〕

頭分等之内寄合候而、人々我意を相立、當時政事方之様子を及批判、色々申觸し、暨儒者杯之内にも右に加り申者も有之躰。不及申事に候へ共、政事之儀は大臣而已與り申處に而、右等之趣は誠以不輕儀、言語道斷之事に候。尤相顯候上は、急度可加嚴令存念に候。ケ様之儀は、不圖不存寄所より害も致出來ものに候條、各に茂被承置候得者心得も可有之事故、内々申遣候、以上。

八月

九月二日。金澤城の土橋御門を修營するを以て通行を禁止す。

〔政隣記〕

八月廿七日左之通御城代又兵衛被仰聞候旨等、御横目より例文之廻狀を以到來之由、御用番水越氏より廻狀之事。
付札、御横目迄

土橋御門御普請就被仰付候、來月二日より右御門往來指留候條、二御丸御廣式へ罷出候人々、河北御門通り可致往來候。右御廣式に罷出候女分は、七十間御長屋御門玉泉院様丸通り、御數奇屋屋敷唐御門往來之筈に候條、此段一統不相洩様可被申談候事。

八月廿六日

四〇〇

九月二日。能登奥郡の十村等に民間に蔵する鐵炮の員數を調査せしむ。

〔筒井舊記〕

於組々、先年より相渡置候猪・鹿威鐵炮員數、且又其方中并百姓等、惣而前々より無斷持來り候鐵炮有之候はゞ、右所持人名前書記、委曲急速可及斷候。右者御内々御尋之趣有之、申渡候條、無急度相しらべ在之、備可書出候、以上。

子九月二日

菅野兵左衛門
高田彌左衛門

奥郡十村・新田裁許中

山廻・無役御扶持人中

九月六日。前田齊廣、治脩と共に金澤城下に行歩を行ふ。

〔金龍公記史料〕

九月六日公與太公散步街路。

九月六日。前田重教の女穎姫の生母慧照院金澤に着す。

惠照院は慧
照院

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

九月六日穎姫様御産婦の方惠照院、江戸表より金澤へ御呼戻し、二之御丸御廣式之内に居住被仰付、九月二十四日着。御宛行是迄之通江戸御格に而被下候段、同年十月五日被仰出有之なり。

九月十三日。前田齊廣の世嗣利命宮參を行ふ。

〔御觸留〕

御横目

當九月十三日、卯辰觀音院に裕次郎様御宮參之節、御城表年寄中始御歩並迄、服紗小袖・布上下着用之事。

一、御廣式に罷出候面々、鬘斗目・布上下着用、御歩並服紗小袖・布上下着用之事。以上。

御横目

裕次郎様御宮參之節、觀音院近邊居宅有之人々、坂中より見通候家者、御社參之時分戸障子等建置可申候事。

右之通彼邊に居宅有之面々に可被申談候事。

八月十七日

〔政隣記〕

加賀藩史料 第十一編 文化元年

四〇一

九日の記は略す

九月十三日快天。今朝五時御供揃に而裕次郎様御宮參、夫より奥村義十郎宅に御立寄御作法等、且御歸後御供人の拜領物等、都而教千代様安永八年御宮參御同趣に候事。

但、觀音院より義十郎宅に被爲入候御道筋違候儀は、九日記に有之通に候事。

一、安永八年之記に、御歩小頭等に拜領物記無之に付左に記之。

金三百疋 御目錄

御歩小頭 藤田新左衛門

右楡垣之御間於二之御間御宮參爲御祝儀被下候段、左京殿御申演、御目錄は於其席御用人渡之、指引は御横目。但頭誘引等無之。御呼出之儀は、前日頭迄左京殿より以御紙面被仰談候事。

一、於御同間御供之御歩横目・御歩中に被下候御目錄、御用番水越に左京殿御渡、則於御城夫々申渡。

銀一枚宛 御歩横目兩人

金貳百疋宛 御歩九人

九月十六日。前田治脩近習の士に帶佩を行はしむ。

〔政隣記〕

九月十六日、八時過より御近邊之人々をたいはい被仰付候に付、各見物被仰付候條、金谷御殿に可相揃旨、昨日同役連名之廻狀石野主殿助より到來。然處自分儀痢合惡敷難罷出段、主

殿助に紙面申達候事。

九月十七日。儒者木下槌五郎、學校の助教を免ぜらる。

〔金龍公記史料〕

九月十七日罷儒者木下槌五郎助教。處逼塞。以横議時政也。寺田九之丞亦以副旨。處遠慮。

十月。盜賊改方奉行その所管に係る犯罪の種類等を上申す。

〔於加州改方各申付候罪輕重并賊物取捌方等留〕

於盜賊改方各申付候罪輕重ケ條書

覺

一、火付・人殺・盜賊之者。

但、本文疑中之者入牢申付候。

一、出奔人。

一、謀書等を以金銀等或は品物謀取候者。

一、破戒之僧

一、贖銀等仕候者。

一、町家百姓家等に而押乞不法之者。

- 一、町家等に而刀等を拔、又は道具等打毀し、狼藉仕候者。
 - 一、捨子・捨馬仕候者。
 - 一、博奕仕候者。
 - 一、主人等手前より金銀杯謀、且引負仕候者。
 - 一、不孝之者。
 - 一、賈虛無僧仕候者。
 - 一、役人を賈、金銀等取請候者。
 - 一、十村并村役人等役權を以、押たる調達不筋之取立物杯仕候者。
- 但、十村之儀は、近年御様子御座候に付呼出不申様被仰出、呼出不申候。
- 一、變死之者押隠、病死之躰に仕成候者。
 - 一、女を勾引他國・他領へ遣候者。
 - 一、於御留場鳥殺生仕候者。
 - 一、難船之品拾揚不及斷者。
 - 一、醫行不存者在方等徘徊僞藥用候者。
 - 一、人を不法に打擲仕候者。

但、疵付其所において檢使に相成候者は指構不申候。

- 一、賊荷擔之者。
 - 一、不届有之預等申付候中徘徊仕候者。
- 但、右勤番之者本人同様に申付、又は依時宜預等に申付候者。
- 一、御制禁之品無届他國へ洩し候者。
 - 一、人非平人交之者。
 - 一、博奕參會之場へ不法に踏込、いすりを申懸、鳥目等ねだり取候者。
- 右は禁牢申付候罪之者共に御座候。此外御制禁を相省、又非常之不届にて牢舎申付候者數多可有御座、尤改方に而は火付・人殺・大賊等、不輕不届に而大躰死刑にも可相成程之者は、公事場へ引渡申候。
- 一、女出會宿仕候者。
 - 一、酒商賣人方に而不法に高聲旬等之者。
 - 一、諸商賣人共賣買方格相違之者。
 - 一、役人依怙最負不筋之者。
 - 一、賭之諸勝負仕候者。

人非とは穢
多等をいふ
いすりはゆ
すり

- 一、他國・他領之者無斷使置候者。
- 但、使居候他國者は御關外へ送出申候。尤不届有之者は各申付、宥之上送出申候。
- 一、伎藝・遊興相催、人集仕候者。
- 一、魚物等定之口錢相洩し候者。
- 一、在方博勞いたし、牛馬賣買に付不届有之者。
- 一、無願諸勸進仕候者。
- 一、於御郡方主人より給銀前借仕不致奉公、或逃去外主人取仕候者。
- 一、婚禮之内石打仕候者。
- 一、身分不相應之致着服、銀筭相用、并奢侈之振廻等仕候者。
- 右は主人預・町預・村預等に申付候者共に御座候。尤此ヶ條之中、時宜之様子により追込にも申付、又は軽く相答候儀も可有御座儀与奉存候。
- 一、他國・他領之富突札買受候者。
- 但、金銀取當り候者は、以來懲め之ため取當り候金銀取揚候事。
- 一、隱質取請候者。
- 但、質物取揚、品主共双方損失に申付候。

一、不行狀者。

但、若年者等行跡不宜、親共等より異見願候はゞ、様子により親預等にも申付、又は當座に叱り返候儀も御座候。

- 一、花火を揚候者。
 - 一、出買仕候者。
 - 一、百姓共御收納不相濟内は、十村より拂米之指紙無之米買請候者、暨賣拂候者。
 - 一、百姓持山に有之候七木隠伐仕候者。
 - 一、町方亭主番夜廻り不番之者。
 - 一、途中に而拾物不及斷者。
 - 一、質屋并古手・古金等商賣人等へ、賊物似寄觸相廻候上、品似寄候共不及斷者。
- 右徘徊留申付候者共に御座候。此各之者共も不埒之厚薄により、追込・預等に申付候者も可有御座候。

右改方に而各申付候品々荒増如斯御座候。改方之儀者、先達而奉申上候通り、公事場与は各之様子違候儀、振合に相成居申候。博奕仕候者、先一旦は主人預・町預又は親兄へ指預、尤宿仕候者は手鎖縮を以預に申付候。其上にも不愼時は入牢等申付候故、禁牢之ヶ條へ加へ置

申候。預等に申付候時者、賭之勝負与唱申候。右之條々は前々より之舊例を以取捌申候。罪之輕重により臨時各等申付候、以上。

文化元年十月

右御用部屋本多勘解由を以帳面に認差上候事。

奉行 宮崎藏人記す

十一月七日。前田齊廣石川郡粟ヶ崎に放鷹す。

〔政隣記〕

十一月七日

一、今七日九時御供揃に而粟ヶ崎口に御放鷹。御拳に而小鴨二、御脇鷹に而雁一被爲獲、御拳之鳥は從御途中相公様へ被上之、御表小將駒井清六郎早乘御使被仰付。

十一月十五日。前田利命着袴の儀を行ふ。

〔政隣記〕

今月十五日裕次郎様御着袴に付、從中將様御使御家老前田織江を以御大小被進之、右取唄御歩高橋鐵之助に申渡、勤之。

十一月晦日。石川・河北兩郡に於ける諸士の鳥構場に關して令す。

今月は十一月

是月は大盡なり

〔御觸留〕
御家中鳥構場仕法、今般段々遂詮議、夫々御達申上候處、御聞届被成、各様は者私共より直々可及演説旨、御用番左京殿被仰聞に付、則帳面一冊相添指進申候。御組等夫々御申談、御同役・御同席御傳達被成、御順達留より可被返下候、以上。

十一月晦日

宮崎久兵衛

杉山新平

上山は石川郡、下山は河北郡

上山・下山・中通り共、是迄願等を以數年定構場に致し、年々眞揚構來り候本場之分、今般不殘相改、委く帳面に記置候。

但、伏場も同斷。併近く所々伏場之様に致來り、是迄無之伏場に而、外之構場指障りとも至り候分者不及貪着、札批取候事。

一、是迄構場に而も無之所々、松木に名札まで揚置、構者不致共、都而其分者一圓不及貪着、札取揚候事。

一、只今迄伏場に致置候處に、改而眞揚候趣に候者、其段御郡所へ可申出候。尤借用場之分は、只今迄之通夫々名札揚置可申事。

一、相對を以外へ構場送遣候者、其段本主暨貫請候者より御郡所へ申出、其上に而名札相改

揚置可申事。

一、本場・伏場共四・五年も打捨置候分者、無構古札有之共取揚、不及貪着候。尤捨置候場たり共、外之面々より其所へ札入候儀、一圓不相成候。

但、追而改相願候儀者格別之事。

一、本場・伏場共、當時松木茂り構難相成躰之處者、其段御郡所に夫々及届候上、山廻り等指遣し得ず見分之上、無據族に候得者格別承届、枝下し可申付事。

一、新に相願構場に致度所有之、外之場等に障不申所に候者、其段何村領等小名相調、願紙面指出候上、是又見分申渡候上承届、松木二十本枝下し可申付候事。

但、伏場に致度所者、是又願紙面別段可指出候。願紙面案文御郡所承合可申候。

一、與力并御歩並之分者、尤前々之通り構場願等承届不申候事。

但、借用場之分者格別之事。

右之通詮議相極、尤新に相願候構場所に寄り、指支等之山々も有之候間、容易に者承届申間敷、願人より御郡所承合可申候。近年松山薄く相成候間、是迄多く構場致所持候もの者、心得も可有之事に候。其上新場願數多に相成、一同に者難承届、見計ひ追々切立可申事。

子十一月

十一月。省略に付御作事所内の役所を減ず。

〔御勝手方諸事覺書〕

御作事奉行に

今般萬端御省略に付、舊例古格不拘、萬事事輕に而御入用減方等僉議有之候様申渡置候處、各心付之趣帳面被指出候に付、則入御覽候處、各僉議之通可申渡旨被仰出候。依而御作事内役所數被相減、内作事奉行・外作事奉行・木藏裁許・鐵荒物裁許并御歩横目當分被指止、暨圖り所役所茂指止候。内作事方御用は各可被相勤候。外作事方御用は地・遠共、寺社方修理方裁許與力より相兼候様申渡候條、被得其意、御材木・鐵・荒物茂共手合々々に直に買上可申候。尤御省略之儀諸事無油斷、綿密遂詮議候様可被申談候事。

子十一月

十二月十四日。前田齊廣、家中諸士が町會所より銀子を借用する手續等に就いて質す。

〔御親翰留其外密事暨内廻狀留〕

家中之者共勝手難澁之内、近年金銀才覺出來兼、別而難澁之躰に付、其方共組之面々勝手向

厚薄相糺、格別困窮之者へ、町奉行申談銀子貸渡爲取續可申旨示談治定に付、右之趣年寄共
 の申出、表向申渡有之候様致度旨等、先達而得内聽候に付、承届夫々申出候而、當時右仕法
 取懸居申鉢に相聞候。就夫共方共組にも不限、右銀子借用之人々も多有之、甚繁雜に相成候
 鉢粗及承候。左候へば夫々より申出し候通りに貸渡申儀も、町奉行手前に而も出來兼候へ
 ば、都而人氣之障に相成、若不服之者も致出來候而は、其方共心付候仕法不全候へば、畢
 竟組之面々勝手成立之爲にも可相成哉無覺束存事に候。尤油斷は無之筈に候へ共、元來不得
 止事其方共申談、得内聽取懸申仕法に候條、自然指當り申防而已に相成候而は、右仕法相立
 候詮も無之事に候間、何れにも最初其方共示合置候通り、組々之内極難澁之者共、行々勝手
 向取續申趣、彌無油斷入念可相心得候。且又右銀子借用方、平士は貸付方重々敷、頭分は一
 通り申込、町奉行相對を以致借用様にも及承候。尤町奉行手前に而は潔白にも可有之哉に候
 へ共、彌借用方に差別有之候而は、最負之取捌も有之様に相聞、不可然事に候。箇様之儀も
 委細承度、旁此段申遣候、以上。

十二月十四日

馬廻頭中

御親翰被成下、謹而奉拜戴候。御家中之者共勝手難澁之内、近年才覺出來兼、別而難澁之鉢

に付、私共組々面々勝手に厚薄相糺、格別困窮之者へ、町奉行申談銀子貸渡爲取續可申旨、示
 談治定仕候に付、右之趣年寄中の被仰出、表向申渡有之候様仕度旨等、先達而奉得御内聽候
 に付、御聞届夫々被仰出候而、當時右仕法取懸居申鉢に被爲聞召候。就夫私共組にも不限、
 右銀子借用之人も多有之、甚繁雜に相成候鉢粗被爲聞召候。左候へば夫々より申出候通に貸
 渡申儀も、町奉行手前に而も出來兼候へば、却而人氣にも障に相成候。若不服之者も致出
 來候而は、私共心付候仕法不全候へば、畢竟組々面々勝手に勝手成立之爲にも可相成哉、無覺束被
 爲思召候。尤油斷は無之筈に候へ共、元來不得止事私共申談、奉得御内聽取懸申仕法に候
 條、自然指當り申事防而已に相成候而は、右仕法相立候詮も無之事に候間、何れにも最初私共
 示合置候通、組之内極難澁之者共行々勝手に勝手向取續申様、彌無油斷可相心得候。且又右銀子借
 用方、平士は貸付方重々敷、頭分は一通申込、町奉行相對を以致借用様にも被爲聞召候。尤
 町奉行手前に而は潔白にも可有之哉に候得共、彌借用方に差別有之候而は、最負之取捌も有之
 様に相聞え、不可然事に候。箇様之儀も委細被爲聞召度、旁此段被仰出候旨奉畏候。右之趣、
 先達而奉得御内聽候通、尤當時極難澁之人々入念相撰、行々成立之儀重々穿鑿仕、勝手圖帳
 取立、御勝手方年寄中の相達、右帳面町奉行へ相渡候上、銀子追々請取、夫々貸渡申候。右
 之外下地之勝手振極難澁申程にも無御座候得共、當暮調達必至与指支、指當如何共可仕手

段無之旨申出候人々も、其儘に指置候而は、極難同様取治方無之に付、是又行々取圖り之様子承糺、帳面頭々取立、誠に當暮より來夏へ懸取續之入用而已貸渡申候。右糺方行届候上は、町奉行手前に而貸渡銀多き方に相成候共、格別之趣を以、表向年寄中より申聞も有之、相立候仕法之儀に御座候得ば、銀高之處を以町奉行彼是申聞候譯も在之間敷哉に奉存候。猶更此度被仰出も御座候間、最初奉申上候趣意相違不仕様可奉心得与奉存候。外組々之儀は、最初段々私共より申談置候通、無油斷取しらべ申に而可在御座与奉存候。委敷穿鑿仕候故、其所に相泥、仕法相立候人々も彼是与申立、一旦不信服之儀も可有御座、況や頭々申聞候而も不承届人々は、猶以氣請不宜儀可在御座与奉存候。右仕法急度相立、一兩年も過候はゞ、人々爲にも相成候儀會得仕候はゞ、彼是評議も相止可申与奉存候。且又平士の銀子貸渡方重々敷、頭分は一通り申込、町奉行相對を以借用仕様にも被聞召候段被仰出候。此儀は、平士之分は頭々に而嚴重に相糺貸渡申候。頭分之儀は、最初は借用方何れに而僉議与申儀も相定り不申に付、是迄之振を以町奉行の申入相辨じ來候得共、當時之所に而は、頭分も極難濫之者は、夫々以後之仕法相立、帳面に記、年寄中の相違、聞届之上町奉行の申入借用仕等に御座候。依而借用方に差別は無御座候間、彼是之取沙汰も有御座間敷与奉存候。右御請奉上之申候。

一、御筆之物并御封印御指札奉返上之候、以上。

十二月十四日

中村九兵衛 判
高島五郎兵衛 判
水野次郎太夫 判
岡田助右衛門 判
團 多太夫 判
長瀬五郎右衛門 判
富永右近右衛門 判
杉野善三郎 判
人見吉左衛門 判

十二月十九日。郡方に明年西本願寺前門主七回忌の爲上洛することを禁ぜしむ。

〔筒井舊記〕

來年三月西本願寺先御門主七回忌相當之様子に候處、宗意安心一件取捌之趣有之時節に付、西方諸寺庵右年忌に付上京之儀指留候趣、寺社御奉行中より申談有之。依之御郡方之者共、

右時節伊勢參宮暨商方等に事寄、京都に罷越候儀も可有之候間、其方中急度遂吟味可願出候。右之趣に付而は、今度御用番より段々被仰渡之趣も有之、若し本山志之者有之、伊勢參宮杯与名付罷越候而は、被仰渡之御趣意とも致相違、不輕儀に候條、得与承知有之、無油斷遂吟味候儀肝要に候。尤新田裁許中は茂一統可得其意候、以上。

子十二月十九日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門 不在合

能州

十村中・無役御扶持人中

新田裁許中・山廻り中

是歲。十村より百姓に衣食住の制限に關して告ぐ。

〔上田舊記〕

- 一、節儉方被仰渡、十村僉議之上御郡中へ申渡候品々左に記。
- 一、男女着衣并羽織布木綿。
- 一、火事裝束村役之外着用仕間敷、平百姓以下之者胸當迄地合木綿。
- 一、女子織物帶無用、鼈甲櫛・こうがい等相用間敷。

石踏は雪踏なるべし

- 一、蛇之目傘・日傘無用。
- 一、男女共石踏引すり、表打はき物、絹類くけ緒、塗木履無用。
- 一、替女・座頭之外淨瑠璃三味線無用。
- 一、家作之儀作方に付、間廣成儀者格別、美麗成儀仕間敷。
- 一、先祖年回法事・婚禮、身近き親類打寄食品軽く可仕候。
- 一、佳節或祭禮・野休等之節、一門共呼合來候儀、以後指止可申候。音信・贈答無用之事。
- 一、於寺庵佛會、社家神事執行之節、往來筋札建候儀は、寺社境内之外は爲建申間敷候。
- 一、在方に而綿打、太物・小間物商仕間敷候。
- 一、酒造無之村酒小賣場、御郡奉行聞届無之村には小賣爲仕間敷候。
- 一、市日之節煮賣仕間敷候。
- 一、宿所之者在方へ小間物振賣仕間敷候。
- 一、御郡方醫者着衣、百姓同様に相心得、惣髮・剃髮之者外脇刺帶間敷候。
- 一、合羽襟羅紗・天羅兜を用申間敷、帷子裾裏縮緬杯仕申間敷、髮道具縮緬くゝり紐等相用間敷候。

右者今般被仰出之趣品重儀に付、ヶ條書を以十村より御郡御奉行へ相達候上申渡候儀に候

間、一統末々迄申渡、若右ヶ條に似寄品致見聞候はゞ、組々村役人之内陰聞立置候に付見咎可申旨、文化元年十村共より組々村役人宛所に書取を以申渡候事。

是歲。能登浦々にて船舶舟人より徴する口錢等の録上を命じ、その額を減ぜしむ。

〔上田舊記〕

一、奥郡浦方着船之所々、商内物等口錢懸り物取請候品々、或は御算用場より押を以取請候口錢取立方書上可申旨、文化元年御算用場より御觸付に付書上候品々左に記。

一、奥郡浦方諸商物、着船之所々賣買之品共、代錢十貫文に付二百文宛問屋宿口錢、船手より右様二歩之口錢取請申候。

但、小木・宇出津・乙ヶ崎此三ヶ所、米とくり綿・鐵物類之分は、十貫文に付百文宛、一步之口錢に而請取候。

一、宇出津・小木・飯田・蛸島此四ヶ所、商内物賣買共、前條宿口錢二歩之外、一貫文に付二文宛宮口錢取請申候。

一、波並・甲・鵜川此三ヶ所、錢一貫文に付三文宛宮口錢取請申候。

但、此波並等三ヶ所宮口錢、是迄三文宛取請來候得共、文化元年以來一貫文に付二文宛請

取可申候。

一、比良村着船之分、年中一度舟一艘より二十文宛宮口錢取請申候。

但、此比良村宮口錢一艘より二十文宛取請來候得共、文化元年より商内物錢高一貫文に付二文宛請取申候。

右浦々宮口錢之儀、淵所拵候普請方入用引足、淵所無之浦方は氏神修覆方に仕、先年より御入紙面与申も無之、村方流例を以何時頃より取請來候哉、年限等も相知不申候。

一、中居村に而諸廻船潤入之節、舟一艘に付二十四文宛、切手錢与名付、潤改人方へ前々流例を以請取申候。

但、此中居村切手錢外浦に振合も無之に付、文化元年より取立方指止申候。

一、宇出津浦に而渡海船新艘造立候節、百石積に付銀三匁宛、潤拵入用与して前々流例を以請取申候。

一、同所舟材木積越濱揚賣買仕候節、銀一貫目に付五匁宛相對を以取請、潤拵入用に仕候。

一、小木村淵之内沈瀬印竹建申に付、明記錢与名付、年中一度諸廻船乗人一人に付十文宛取請申候。尤舟手より頼合に付、右印竹建置申候。

一、飯田組浦方より買請指出候灰一俵に付十文宛問屋宿口錢、前々流例を以取請申候。
 但、此飯田組浦方灰口錢之儀、灰持運方人足賃も相籠り十文宛請取來候得共、文化元年以來灰一俵に付三文宛爲請取可申、仍而灰持運方人足賃者、舟手人足相對を以爲請取可申候。

一、輪嶋浦塗物類等送り荷物運賃十貫文に付一貫文宛、舟手より問屋に肩錢与して前々流例を以取請申候。

此輪嶋浦肩錢一貫文之分、文化元年より運賃十貫文に付八百文宛爲取請可申候。

一、同所に而船手より積廻陸揚荷物、加州・越中邊に指送り候分、問屋庭口錢くり綿一本に付銀子二分五厘、前々より流例を以取請申候。其外之品は見圖りを以、何品に而も問屋庭口錢請取申候。

一、名舟村澗入舟、年中一度澗懸り鼻くり錢与名付、舟一艘に付百文宛前々流例を以取請申候。

但、此名舟村鼻くり錢、文化元年以來舟人一人に付二十文宛爲請取可申候。

一、輪嶋崎村澗入舟之方、瀬印澗拵鼻くり錢与して、乗組一人に付錢十八文宛請取振、懸り澗所へ入不申舟者一人に付八文宛、前々より流例を以請取申候。右之外諸廻船見當燈明相立

申に付、寶曆十一年御願申上御算用場へ御達、御郡所入紙面を以年中澗入初一度、舟人一人に付二分宛請取申候。

一、大澤村澗入舟、年中一度鼻くり錢与名付、舟人一人に三十文宛取請、鵜入浦者澗入舟、舟人一人に付二十五文宛、光浦は澗入舟舟人一人に付十二文宛、前々流例を以取請、懸り澗普請入用に仕候。

但、右鼻くり錢文化元年より大澤村・鵜入村は、以來舟人一人に付二十文宛爲請取可申、

光浦村は是迄之通舟人一人より十二文宛爲請取可申候。

一、五十洲村澗入之廻船、年中一度鼻くり錢与名付、舟人一人より二十五文宛、前々流例を以取請申候。

但、此五十洲村文化元年より舟人一人に付二十文宛、以來取請可申候。

一、組々浦方より炭・牧木・板・材木類積出候節、問屋宿口錢見圖りを以取請、尤所々に而口錢少々宛増減御座候。

一、小木浦等取請候燈明錢之儀、公儀御城米并に爲御登米積舟よりは、右燈明錢取請不申候。

右奥郡浦方着船より、商内物等口錢并諸懸り物取請來候分、前々流例に候分、并御算用場よ

り押に而も有之取請候分、委細相糺可申上旨、公事場より被仰渡候由に而、文化元年御郡所より被仰渡候に付、是迄流例を以澗入舟口錢等取請來候内、右被仰渡に付減方仕、以來取請方之様子前段之通、同年組々裁許・十村より御郡所へ書上、以來右之通り相極置、不届之口錢等請取不申様可申談旨、同年御郡所より被仰渡候事。

是歲。石動山と山麓諸村との境界問題落着す。

〔能州郡方舊記〕

石動山七口

二宮口 貝咳口 角間口 越中口

平澤口 高澤口 七尾口

麓山境申分村々

鹿嶋郡武部組二宮村・蟻ヶ原村・多根村。

射水郡加納組角間村・大窪村・長澤村・平澤村・平村。

外に御預所熊淵村、山境論所之内へ入込居候得共、山論無之候。

一、慶安四年蟻ヶ原村新村立被仰付候節、新開願之儀二宮村より石動山入有之、二宮村より返答書等指上候事。

本文末尾に
文化元年の
比とあるを
以てこれを
採録す
貝咳本の儘

一、承應年中にも出入出来、境内御縮方被仰渡候事。

一、寛文十一年十月能州御郡御奉行田伏源右衛門殿・越中御郡御奉行郡勘三郎殿、并口郡相神村彌六・堀松村喜兵衛・武部村太郎左衛門・野崎村孫右衛門・射水郡開發村源内・下條村小右衛門・加納村與兵衛・石動山衆徒、麓村論所村々役人相見、論所御見分繪圖等被仰付候事。

一、延寶二年論山之内、石動山より木を伐、山方御奉行は二宮村より御斷申上、重而双方入込申間敷旨、御算用場より被仰渡候事。

一、同三年三月六日岡崎市郎兵衛殿・奥村因幡殿・津田玄蕃殿御判之堅紙御入を以、論山へ入込間敷旨、二宮村は一通、石動山は一通御渡有之候。

一、元祿十年論山御縮方御郡所より被仰渡。

一、同十一年石動山与山境御尋に付、十村より書上る。

一、同十四年石動山觸頭金澤波着寺より書付上申に付、論山縮方被仰渡。

一、同十六年二宮村より入込申旨、石動山より御斷申上、御縮方被仰渡。

一、寶永二年寺社御奉行所へ石動山より書付上申に付、寺社所より御内意を以御郡所より被仰越趣有之候事。

多根村より論所へ猥に入込申旨之出入に而、事入組六ヶ敷様子。

一、同七年論山之内槻くさり折御断申上候所、石動山与木名目に間違有之、十村・山廻り役・僧立會見分有之、折木其儘に相成居候事。

一、享保三年論山御縮方、中古二宮村論所之内島地等有之儀に付、他郡御扶持人等見分、猶更論所御縮方被仰渡、公事場において決着被仰付候事。

但、此決着之節御公事場御出席之人々、公事場奉行奥村源左衛門殿・富田治郎左衛門殿、寺社御奉行前田左京殿・伊藤内膳殿・菊池大學殿、御横目熊谷忠左衛門殿、御算用場御奉行横山中務殿・野村勘兵衛殿、御郡御奉行澤田十郎兵衛殿、御改作御奉行今村源太夫殿・中村四兵衛殿、御扶持人田井村次郎吉・村井村與三右衛門・三階村源右衛門、石動山衆徒惣代五智院・性眞坊・阿彌陀院被召出、決着被仰渡候事。

一、寶曆七年射水郡御郡御奉行より論所下苅之儀被仰上、段々御詮議之上埒明不申事。

一、明和二年三月二宮村より論所之内山火事有之、右町間改之儀山廻り中立會、見分仕儀難相成旨に而、御詮議之上裁許之十村・石動山役僧・村役人立會見分之上、町間相改御断申上、言上に相成候事。

一、寛政年中蟻々原村百姓薙野島之作物を、石動山衆徒より相荒し、二宮村・蟻々原村より御断申上、公事場御詮議之上作物相荒し候衆徒、一山追出被仰渡候事。

一、享和度より右論山段々御詮議、文化初年之比公事場御裁判有之、石動山与麓村境筋相立、公事場與力小嶋石之助殿・板坂雍左衛門殿、本江村惣助・武部村四郎太夫・酒井村一樂・加納村兵衛等、石動山衆徒立會堀切等出來、論地落着に相成候事。

文化 二 年

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて元旦の禮を行ふ。

〔政隣記〕

元日雪降、寒穩也。今朝六半時揃に而、於檜垣之御間諸大夫衆等より若年寄中迄年頭御禮被爲請。夫より鶴庖丁御覽。畢而於柳之御間、人持頭分獨禮被爲請、一先被爲入。重而御出、御小將中・御射手・御異風・新番・御醫師・御儒者座付之一統御禮被爲請、惣様九時頃相濟候事。

正月廿七日。前田齊廣越中井波瑞泉寺の寶物を觀る。

〔金龍公記史料〕

正月廿七日。觀井波瑞泉寺所藏聖德太子傳。高德・瑞龍二公書。豐太閤書。太子傳書金岡書宇多天皇。以公家襲封。一觀之爲例也。

正月廿八日。村々の算用を嚴に監督せしむべきを告ぐ。

〔郡方御觸之抄〕

村々算用之儀、年切綿密遂勘定、每春裁許之十村見届、百姓人別申分無之趣算用帳に相記、印章茂見届置可申儀、古來より之格に而、此儀等閑に致置候得者、村役人不埒無之とも、人々疑を以人氣不穩、第一取治に指障不輕儀に付、前々より嚴重申渡置、勿論決算相濟申趣、夫々届にも及可申候得共、實者村々役人之心得に而粗密之儀有之躰。組々において十村共急度穿鑿可仕處、不行届所々も有之、何等申事等出來仕所々有之躰に候。組之内右躰之儀出來仕候儀を、如何相心得罷在候哉。尤一村々々役人有之事に候得者、不行届村々者役人跟前嚴重遂詮議、不行届役人之儀者夫々申斷急度可致裁判、其儀等閑に致置候故にも相聞、沙汰之限に候。別而加州向混雜之躰にも粗相聞候條、不行届所々者早速相改候様、各手前より急度可被申渡候。若以後右躰之儀於承に者、村役人者不及申、十村之儀も品により無用捨急度申付候條、此段譯而嚴重に可被申渡候、以上。

丑正月二十八日

御算用場

改作御奉行中

正月廿八日。前田齊廣、年寄及び家老に限り明年増借知を命ぜんとの意

を告ぐ。

〔御家老方御密用之覺〕

丑正月二十八日

一、表方において年寄中・御家老中、勘解由・善左衛門・中務を以、左之通被仰出。各存之通連年御勝手向御逼迫至極に被爲在、御入國以後格別御省略被仰付、少々減方も付候へ共、中々御符合之所に者至り不申事に候。去々年於江戸表御借金方御仕法も被仰付、彼是不心服に有之候得共、大半申談候通相整、去年御歸國之上甲斐守・左京等委曲存知罷在候通、御算用場奉行より段々申聞候趣も有之候付、大坂御借金方御仕法被仰付候に付、林彌四郎被遣候而段々金主共の申解候得者、御藏許共御請も仕、是又段々相整候躰にも被思召候。然處御地盤方段々御しらべ被仰付候處、一ヶ年六百貫目之御不足に相成、以之外御運方御指支候儀に候。依之色々打返被爲遂御思慮候得共、此上如何とも思召當り無之候。併來年より此上格別之御省畧可被仰出思召に候。就夫御身分を初、御次廻格別之御省畧被仰付候思召に而、御膳所并奥御納戸等御入用悉御減少被仰付置候へ共、幾重に御艱難に被爲在候而も、何茂御國家之爲、其儀は聊御貪着不被遊候付、此上御省畧之儀段々御直に被及御指圖、二之御丸御廣式御入用金も八百兩之所、以來六百兩を以相辨候様是又御僉議被仰付候。暨御鷹等も

被減、且御武用之儀格別之儀に候得共、御馬數も無理に被減候趣、夫々被及御下知候。或者表向萬端諸頭を初、來年中御指押、諸頭・諸役人も此御時節誠に存込、御省畧之儀和順に申談、是以後風俗も相移候様、追々可被及御下知思召に候。右に付御家中半知にも可被仰付思召に候得共、甚以不容易、其儀も難被成候。各難澁之程被思召付候而、先以御心外至極、被仰出候も御斟酌被思召候得共、來寅年一作各より百石に十五石宛増御借知被仰付、御家老よりは萬石以上十石充、其外之御家老は五石充御借知可被仰付候。尤右之趣不輕儀、中々御前御一存を以御決斷之儀は難被爲成儀に付、相公様にも御内意被仰上候處、御心外至極に被思召候儀は御同意に候得共、此上者御僉議次第与被思召候旨被仰進候。依之御心外ながら右之通被仰付候條、萬端幕方等心得仕、成丈遂儉約、來年より右増御借知指上候様有之度思召候。各儀難澁与申内、勝手厚薄も可有之候條、一兩年も打續指上候而も、さのみ勝手向相廻り申に而も無之面々は、一兩年續候而指上候得ば、第一御勝手御運方にも相成申儀、別而一段之事に思召候。尤右之趣に付、各にも格別萬端可遂省畧候條、行粧相減、并衣服等見苦數儀は不及御貪着。此等之趣私共より申達候様御意に候。

別段各より増御借知被仰付候儀者、全御不足償之爲に被仰付候儀迄に而も無之候條、各より御借知被仰付候儀承り、御家中之人々志次第指上度旨申出候面々有之候而も、一圓御許

容無之思召に候條、各にも其心得に而、自然申出候人々も有之候而も、承届不申様可相心得候。

〔政隣記〕

正月廿八日

一、今般御省略被仰出候趣共左之通。

御馬五疋御減少。

御廣式女中同斷。

當御參勤御供人同斷。

但、御近習頭津田權五郎其外都合五・六人御減少。

御鷹不殘御減止。

但、不殘鷹屋新左衛門等被下之、越前等賣遣候筈之由。併去年御拜領之大鷹二据は被指殘。

正月廿九日。前田齊廣、老臣等を召して儉約の勵行に關する意見を徴す。

〔御勝手方諸事覺書〕

正月廿九日

加賀藩史料 第十一編 文化二年

一、甲斐守等三人御前に被召、昨日一統に被仰出候御趣意之趣等段々御意有之。猶何茂存付候儀有之候はゞ、御身分之儀を初無泥可申上候。先指當り申上候儀存付無之哉之旨御意有之。何茂奉畏候。是迄段々御省略之節被仰出候儀故、油斷も不仕儀に御座候得共、私共不才中々行届不申、先指當相心付可申上品無御座候。猶又此度被仰出候趣に付、御算用場奉行等とくと申談、重々遂詮議可奉申上旨等御請申上候處、左之御親翰拜戴被仰付、御覺書之通猶更思慮いたし、何分會得有之候様夫々可申談旨等御意有之。夫々拜見及御請。且又今般被仰出候御省略御趣意之儀は、兼而内分御算用場奉行へ申談候はゞ、何か心得にも可相成儀奉存候に付奉伺候處、其通与御意有之。應而及御退去。

御親翰寫

- 一、借知之儀は先來年与申渡候へ共、省略之儀は只今より可申渡哉之事。
- 一、今般之所は、各三人共打寄格別に申談、且算用場奉行等も相招、誠に和順に底意も承り、省畧等之儀永久相整候様有之度事。
- 一、今度年寄共借知申付候儀、全く不足價之事迄に而は無之、格別之省略申付候事に候得ば、一統心服之儀も第一に候。依之身分之儀も、成丈省略申付候事。
- 一、省略方之儀何れ茂示合之上、夫々々條書に而もいたし追々申聞候はゞ、可及指圖候事。

一、地廻等之儀、表向に而は不相知事候故、尤去頃以來直に及指圖候事。

正月。金澤町に於ける料理屋の増加を許し、その仕法を定む。

〔料理方定書〕

料理屋之儀、寛政元年御詮議有之、町支配并寺社門前地共八ヶ所に被仰付候所、魚屋共之内密に料理屋に似寄候者有之。且法外奢侈之料理取扱、近來被仰出にも相背候に付、都而料理屋指止之儀、御用番年寄中より被仰渡置候。然處御家中吉事等、或は於町方無據寄合候砌、輕き賄等自宅において調候而は、却而失墜之筋も有之、且右料理屋共家業に放及難儀候に付、以前一人前二匁迄を銀高に直し料理取扱家業致度旨、裁許肝煎共願紙面指出、委曲御達申候處、願之趣御聞届に候。然處御家中吉事等之節、八軒に而は十軒之用事難辨、又は紛敷料理屋等出來すべく候に付、今般八軒相増、都合十六軒に相極、以來料理獻立御縮方等嚴重可申渡旨、重而御達申候處、是又御聞届に候事。

一、元來料理獻立之儀は、古來御定も有之候處、近年段々奢侈に移り、膳部之外酒肴之趣に名付、羹物等前廉品々不出而は振舞方籠略之趣に茂相當、自然与増長に至り、世風に分限取失候族も出來致し易く、畢竟人々身之爲に不宜敷事に候。依而以後改之、獻立直段付左之通り。

一人前 二匁 汁繪に而も鯖漆之内一品
鱈物に而も小焼物

右二匁限り、是より以上之料理令停止候。以下之分は大抵准之可調事。

一、酒之肴小蓋一面に付七分限り。

一、御家中等吉事之砌出料理、一汁二菜、膳中輕き吸物、其代料二匁を限、是より下直之分勝手次第之事。

一、町方家賣買納得寄合等、身分大抵宜敷者たりとも、町中一統申渡置候儀も有之候條准之、好候共吸物は三分限り、高料之品取扱申問敷事。

一、獻立之外、或は到來物持參之品等に而、直段之外別に調出候様、何方より頼來候共堅く無用之事。

一、料理屋宅指支、外座敷借出料理持運、或は料理方被雇他に罷越相調候共、御定之外法外之獻立堅令停止候事。但、若歷々方或は他國添客等、格別之獻立被頼候は、其段相斷可請指圖事。

一、巡見等上使并他國御使者等、格別之料理方之儀町料理人に申渡候得者、獻立書可調出、其筋指圖次第に可相心得。勿論諸色成限り遂勘辨、不成高直様可相働事。

一、右料理方仕法相改候儀は、御家中吉事或は町かた納得之節、輕き賄等、自宅において家

具等之儀まで却而失墜之筋も可有之者、易簡之趣を以而重而商賣被仰付候得共、其所致會得、奢侈之儀至而可相止与、今般仕法申渡本義に候。永々無違失可相守候。若心得違之者共有之、法外之獻立取扱候者、其時々役人相廻し、因其輕重急度各可申付候者也。

文化二年乙丑正月

町會所

二月三日。前田齊廣、御馬廻頭・御小將頭に對し藩の省略方針を達成せしむべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

御馬廻頭・御小將頭に被仰出之趣、二月三日於御次本多勘解由・横濱善左衛門より右組頭中に演述之覺。

各存之通、連年御勝手向御逼迫至極に付、御入國以後格別之御省略被仰付、少々減方も付候哉に被思召候得共、中々容易に御符合之所に者至り不申事に候。去々年於江戸表御借金方御仕法も被仰付、且又去年御歸國之上段々御詮議有之、大坂表御借金方も御仕法被仰付候趣に付、林彌四郎被遣候。右に付御地盤方段々御しらべ被仰付候處、年中御入用方過分之御不足に相成、以之外御運方御指支之儀に候。連年右之趣に而者、容易御勝手御取直し、御借知杯被返下候場は者不被爲至、左候得ば彌増御家中之人々及難儀申儀、御寢食不安被思召候。依

之色々打返御思慮も被爲成候得共、此上如何共思召當りも無之候。併來年より尙又格外之御省略可被仰付思召に候。夫に付御身分を初、御次廻格別之御省略被仰付度思召に付、御膳所并奥御納戸等御入用悉く御減少被仰付置候得共、幾重に御艱難に被成御座候而も、何も御國家之御爲、其儀者聊御貧着不被遊儀に付、此上御省略之儀段々奉行等御直々被及御指圖、二之御丸御廣式御入用金も御減少被仰付、暨御鷹等も被減、御武用之儀格別とは申ながら御馬數も被減候趣、夫々被及御下知に、いつ迄も御省略と申に而も有之間敷、不遠内に者是非御勝手向御運も宜敷被爲成、假令不全とも御借知も被返下、御家中之人々も相應勝手取直し、又は年柄に寄窮民等御發賑被仰付、御指支無之程之場へ不被爲至而者、甚以御手薄之儀御心痛被成候。殊に御前には申さば不時成御家督、萬一にも四民風俗も惡敷、次第に困窮に相成、暨御勝手も最早御潰之場へ至候而は、被對御老君様方候而も、別而被仰譯も無之御事に候。然る上者各初一統深く此御時節存付、一途に風俗も宜敷所相移、萬端御省略方等相整候様有之度思召候條、彌無油斷可相心得候。毎々右準候儀等被仰出候節、乍奉畏彼是後言仕候人々も有之哉に被聞召候。尤各には無之事に候得共、右等之儀者有之間敷儀に被思召候。向後者被仰出有之共難辨人々者、幾重にても奉伺、得与御趣意之程可奉畏候。右之通申上候は、一端被仰出候而も、道理に相當不申儀も自然有之候者、速に御改可被遊候。又は

申上方道理に相當り不申儀者、相分能く會得仕候迄幾度も可被仰出候。若如此被仰出候上、以來被仰出候儀等、會得仕兼ながら不奉伺、退候而自然評議仕候人々も有之段被聞召候者、御答可被遊思召候、右等之趣各奉承知、組・支配有之面々も、能々會得仕候様可申談候。尤於御前逐一可被仰聞候得共、入組申儀却而御前に而被仰聞候而者會得も如何与、先於御次被仰出候。猶近々被爲召候而可被仰聞、此段可申聞旨御意に候事。

丑 二月

外に御算用場・御郡所御添紙面者畧す。

二月三日。年寄及び家老等増借知之命に従ひ得ざることを上申す。

〔御家老方御密用之覺〕

一、二月三日此間被仰出之趣に付、左之通覺書に認、表方において年寄中御家老中列座、善左衛門・中務の申述上之事。
連年御勝手向御逼迫至極に被爲在、御入國以後格別御省畧被仰付、江戸并大坂御借金方御仕法被仰付候。然處御地盤方段々御しらべ被仰付候處、一ヶ年六百貫目之御不足に相成、御運方御指支に御座候。依之色々打返被爲遂御思慮も候得共、思召當り無御座候。併來年より此上御格別之御省畧可被仰出思召に候。就夫御身分を初、御次廻格別之御省略被仰付候思召

に付、御膳所等御入用悉御減少被仰付置候得共、御國家之爲御艱難聊御貪着不被遊、此上御省略之儀段々御直に被及御指圖、二之御丸御廣式御入用金も御減少、暨御鷹御馬等も被減候。右に付來寅の年一作、私共より百石に十五石宛御借知被仰付、御家老より者萬石以上十石充、其外之御家老よりは五石充御借知可被仰付候。右之趣相公様にも御内意被仰上、被仰付候。私共難澁申内厚薄も可有之候條、一兩年も打續指上候而、さのみ勝手向相迫り申に而も無之者は、一兩年續候而指上候へば、御運方にも相成申儀に御座候旨。且又私共より御借知被仰付候儀者、全御不足御償之爲被仰付候儀迄に而も無御座候條、御家中之人々傳承仕、志次第指上度旨申出候人々有之候而も、一圓御許容無御座思召に候條、其心得可仕旨段々各を以被仰出之趣奉承知。將又於御前御意之趣茂謹而奉拜聽、土佐守・安房守・義十郎にも被仰出候趣逐一申聞候。先以私共不才に而御省略會議方行届不申、御地盤方御不足に相成御符合不仕候に付、御身分を初御次廻御格別御省略被遊候。御廣式御入用等夫々御減少被仰付候御儀、可申上様も無御座、奉恐入迷惑至極奉存候。依之來年増御借知指上候儀は、何も勝手難澁仕候故、乍殘念唯今御請は得仕不申候。土佐守・安房守・義十郎儀も同様に申上候。此段可然様被達御聽候様致度存候。

二月四日。前田齊廣、老臣等の増借知の命に従ひたるを賞す。

老臣等の御請に上りけるに至りし経緯は明かしく、實は借知は實行せられざるなり。文化三年四月五日参照

〔御家老方御密用之覺〕

二月四日年寄中一切御居間書院において御前被召、相濟、御家老中一切御前被召御意之趣。

今般各増御借知被仰付候に付、昨日御請之趣申上、委曲御承知被遊、御大慶思召候。此上猶更身分内外幕方・行粧暨衣服等見苦敷儀は不被及御貪着候間、何分可遂省略候。各儀は諸人之目當に相成候儀、猶更無油斷心得候様御意之事。

二月十五日。富田景周自著の越登賀三州志を献す。

〔金龍公記史料〕

二月十五日。藩臣富田景周。献自著三州志。

二月十八日。親鸞上人の遠忌將に近きにあるを以て百姓の過分なる法會を行ふべからざるを令す。

〔郡方御觸〕

親鸞聖人五百五十回忌近年之内相當り候に付、御郡方之者共旦那寺等招寄、不似合法會を取行ひ、人多に致參詣候之族有之躰、粗相聞候。於俗家右様之躰御停止之儀は、前々より申渡

置候通に候處、甚等閑之儀不埒至極に候。元來右様之儀相企、宿等いたし候儀は沙汰之限に候間、追々綿密に及穿鑿、嚴重に相答可申候。尤其方中、組々において相企候躰見聞候は、相糺可申聞候。若其方中より不申聞、外より相聞候は、急度相答可申候間、油斷無之様可被相心得候。猶更此段末々迄不相洩様急々可申渡候、以上。

丑二月十八日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

奥・口十村中

〔郡方御觸〕

付札、御算用場奉行

一向宗之者共御坊方寄進等之儀に付、毎度申渡候所、今以町、在之者共密々寄進等有之躰に候。當年者先御門主年回相當に付、於在家寺庵相招、身分不相應之法會令執行、人多集候者も次第増長、追々可令執行心得之者も有之躰粗相聞え候。先祖等年回に候共事輕く可致執行段、前々より被仰出茂有之候所、是迄本願寺代々年回之節、於居宅身分不相應之法會令執行、人多集候儀等、畢竟御坊方より相進候に付、中に者不得止事致執行、且寺庵之内には右年回を申立、檀家寄進等之儀申談候族も有之躰に候。人々先祖等之年回に付、輕く致法會

候儀は格別、本願寺代々年回に付、町、在之者共居宅寺庵等相招、或密々寄進等いたし候儀者不埒之至に候。右躰之者於有之者、吟味之上答可申付候。

一、本願寺代々年回之節、商用に事寄參詣いたし候者も有之躰に候。尤爲商用罷越候者を指留可申子細者無之候得共、前々より商用に而上京いたし候者にも、右年回之砌者、所々奉行等に而其品承糺候上に而、上京之儀承届可指遣候。若不受指圖罷越候者有之候は、嚴重答可申付候。

右之趣被得其意、遠所町奉行等可被申談候事。

丑 二月

二月十九日。藩士小野木助三の娘中藤として召出さる。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

二月十九日小野木助三娘御中藤被召抱、御充行御格之通被下。同二十五日名屋尾与相改候様被仰出なり。

二月二十日。老臣等行粧省略の實行に關して上申す。

〔御家老方若年寄方日記之内覺書〕

二月二十日

加賀藩史料 第十一編 文化二年

後前田齊泰の生母とされるもの

一、今度各御前に被召、身分を初行粧等省略之儀御意に付、猶更同役中申合、着服之儀は不被及御貪着段、御意之通相心得罷在候。行粧之儀は格別減少可仕様も無御座、併平日御城に罷出候時分も、多分馬上或は歩行可仕候。召連候下人も、夫々順時に不同も可仕段、今日勘解由・圖書・織江・隼人助別席に而、關屋中務を以達御内聽置候事。

是月は大盡なり

二月晦日。郡方出火の際の死人は御郡所の見届を得べきことを定む。

〔御郡典〕

是迄於御郡方に、出火之節燒死人有之砌、斷方區々に相成居候間、以來燒死人有之候は、變死人同様相心得、見届方等之儀、役所受指圖取捌候事に相極候條、可得其意候、以上。

丑二月晦日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

能州四郡十村中

二月。御歩組の士他國に使用する際藩より刀持足輕を貸附せし例を廢す。

〔御年譜〕

一、御歩組之内より爲御用他國等に罷出候節、御用之品により、爲刀持足輕御貸人相願候得者、時々承届候得共、詮議之趣有之、以來刀持足輕御貸人難相渡候に付、右様之砌者半分に

相雇召連、雇賃者御渡之趣可申渡候間、其時々可被相願候事。

丑 二月

二月。學校に於ける讀師討論の席を廢す。

〔學校方覺書〕

學校頭に

於學校、毎月廿四日讀師討論之席被建置候へども、先當分可被指止旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申渡候事。

二 月

三月四日。前田齊廣、治脩と共に白山比咩神社に詣づ。

〔政隣記〕

三月四日朝六時過御供揃に而、同刻御出、御鷹野之御振に而、御兩殿様御同道鶴來邊御行歩、白山宮にも御參詣。同所續古城跡・八幡村御敷等御巡見、暮六時頃御歸城之事。

但、額谷村肝煎方御小休、鶴來村米屋等御晝休、御兩殿様御一所に而は無御座候事。

三月十一日。前田齊廣、留守中に於ける心得を家老前田兵部に示す。

〔御親翰帳拔書〕

文化二年三月十一日以山崎小右衛門被渡下。

其方儀、當留守中用向萬端無油斷可被心得候。且又當時存知之通り、殿敷省略中に候得ば、人受取治方心得所要に候。殊に各儀者一統目當にもいたし候事に候條、身分之儀も其心得可有之儀勿論之事に候。是等之趣爲心得申遣置候、以上。

三月十一日

前田 兵 部 殿

三月十一日。前田齊廣金澤を發して參觀の途に就く。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

三月十一日金澤御發駕、同二十六日江戸表御着府。上使等都而御先格之通なり。

〔政隣記〕

三月十一日御見立揃刻限六半時過に付、同刻より登城。御供揃は五半時也。且五時御供揃に而金谷御殿に被爲入、四時過御歸殿。九時頃益御機嫌能御發駕、御作法前々之通。三之御丸へ草履捕一人召連罷出候處、御例之通御意有之。夫より御席へ出、御用番又兵衛殿に恐悅申述退出。但今日式日者無之旨、御横目中より申談有之。

一、御供人奥村左京殿・本多勘解由殿等、夫々無異儀發出。今夜今石動御泊、去々年秋之通御泊附に而、二十三日江戸御着之御日圖りに候事。

〔政隣記〕

三月十八日朝、去十六日夜越中境之飛脚到着、左之通申來。

御日圖之通御通行、十四日夜泊驛御泊之處、同夜強雨、姫川洪水、并青海川も舟場切れ候に付、十五日も泊驛に御逗留。十六日は姫川等減水御支無之候得共、親不知并駒返り高波之段注進。併境迄押而被爲入、段々御實儀被仰付候得共、御通行難被爲成由に付、十六日夜境に御逗留。二十一日糸魚川より之飛脚着、十七日親不知・姫川御通行、同夜糸魚川御泊之旨申來。二十八日板ヶ鼻驛より之飛脚着、松平豊後守殿と御出合之圖りに而指支候に付、二十三日者深谷驛不時御泊、二十四日熊谷驛御泊、二十五日浦和驛御泊、二十六日江戸御着之圖りに相成候旨申來。

〔政隣記〕

一、當御參勤御道中、越後姫川出水等に而三日之御逗留に相成、失墜多懸り、一統難澁之躰に付、格別之趣を以、御逗留中旅籠代御取替之分、被下切に可申渡旨被仰出候段、奥村左京殿被仰渡。

但、一宿御先御跡より罷越候人々にも、三日分旅籠代被下之。

三月十六日。金澤城石川御門の石垣を修築するを以て通行を禁ず。

〔政隣記〕

付札、御横目

石川御門續御櫓下等石垣御普請就被仰付候、當二十六日より右御門往來指留候條、御城中御番人且又就御用罷出候人々、河北御門より往來之筈に候。若火事等之節者、石川御門往來不指支候。尤御普請所之儀に候間、往來人不込合様可相心得候。此段夫々一統不相洩様可被申談候事。

丑三月十六日

右御城代又兵衛殿被仰聞候旨等、例之通御横目廻狀有之。

三月廿一日。鹿島郡永光寺の山林を沒收し、境域を定めたる繪圖を下附す。

〔職事日記〕

一、能州酒井永光寺地論、去年落着に付、右繪圖後來之爲、右始終之趣繪圖面に書記文面に

兩刹とは寶
圓寺と天徳
院なり

書記。文面左之通り。

天明六年永光寺より兩刹に指出置候同寺明細帳之内に、應永十二年高田中務入道沙彌道教寄進狀之文面には、北川を限、東越中境を限、西路を限、其外寺寄之山は依有志永代寄進与有之。右寄進狀之通御當家大納言様より被爲下置候得共、此儀虛文也。其譯は寛文十年迄鹿嶋半郡長家之領分に被成置候處、寛永十二年長九郎左衛門より預山にいたし、寺中新之分山下茹を以用之、材木用事之節は様子承届寄進可申与、九郎左衛門より定渡候書物に而可考也。大納言様御代者慶長より以前之事也。

但、寛永十九年長家地頭之内、百姓共伐木いたし候節之誤證文有之處、右證文之寫文面を直し置、御當家御先代、永光寺古由緒御聞届之上、山林之儀中務寄進狀之通被下置候与申證據之様に申立候儀も、右明細帳之調方与同様之虛談也。

一、寛文十年長家領分鹿嶋半郡之所、御當家へ御引取之節、都而先地頭之除知寄進地は、當地頭之志次第之道理故、長家より永光寺に附置候十五石之知行所を以御引取有之。右預山之儀は、嶺筋より南西向之片平は永光寺境内除知与成、右片平之麓寺續之空地等、酒井村高之内に而未進地に相成、則元祿十一年右未進地打立も有之候。東北向片平は、字附御林其外酒井村持山に相成候事。

但、右之通故延寶三年神子原村其外四町村等之領与、酒井村・本江村等之持山領与之境塚出來之節、双方役人等立合、一統納得之趣に繪圖に相調、則字千かめと申所東之境塚は、酒井村領与神子原村領与之境に築候塚八つ之内に相成居候事。

一、明細帳之内に、境内山林前寄進狀之通、大納言様より被下置候歩數之儀、大槩相見量候處、豎一里程横幅は隨所十五町或は二十町少々宛廣狹有之、四方之境北与東西は分明に有之旨調置候へ共、山の豎嶺筋は神子原村領境より口迄之町數二十一町計有之候。往古中務入道前寄進狀之通大納言様より被下置候而、四方之境右之通に相違無之時は、神子原村領も打越、越中境迄境内に相成、其外西北之地面も境内へ多入不申而は、明細帳右之通には難調儀に候處、大納言様より前寄進狀之通被下置候杯与、勝手次第之儀を明細帳に相調置候事。

右之通に而、往古之領主高田中務寄進狀之通には難相成處、先住以來鎌倉殿御下知之地杯与申立及爭論候故、住持泰陽儀公事場僉議之趣會得有之候者、品能可取捌与申渡候處、其儀も不致許容我意を立罷有、申開無之期に至り悔前非候趣申出、不届之至に付遂言上候處、泰陽追院山林不殘御取上之旨被仰出。仍て此繪圖之通色取を以、御取揚之場所暨被下置候未進地并墓所等除知之所分ちの分見番杭帳一冊相添相渡候條、各添翰を以、此繪圖共に永光寺の御渡在之、後々繪圖面之通相守候様可有御申渡候、以上。

分見は分間
なるべし

文化二年三月二十一日

〔職事日記〕

此山嶺筋を境、南西片平は永光寺境内除地、北東向片平は御林山暨村方稼山に候處、寶曆年中永光寺より右山不殘永光寺境内与申出及爭論、僉議中年月を經、今度於公事場令穿鑿候上、永光寺不届之趣相顯候に付、永光寺山不殘御取揚之旨被仰出。依而十色之色分けを以、夫々境筋相分候繪圖永光寺へ相渡置候事。

但、永光寺へ渡置候繪圖、公事場并御算場用に扣有之候事。

一、東北向片平之内御林山与稼山之境筋、今般堀切等申付候に付、此繪圖之通御林山前々之間敷を以堀切申付候旨、御算用場より申來承届候事。

但、右堀切は御林与稼山与を相分可申爲申付候事故、永光寺へ相渡置候繪圖には嶺筋之境築等相記、御林山堀切間敷等は不相記候事。

附、右堀切間敷等相記候繪圖は、宇出津山奉行并御郡方へ相渡置、尤公事場暨御算用場に扣有之候事。

右書面之通於公事場相調、繪圖見届置候。都而境筋之儀繪圖之通可相心得者也。

文化二年閏八月

公 事 場

三月廿六日。前田齊廣江戸に着す。

〔政隣記〕

三月二十六日、益御機嫌克江戸御着、追付之御供揃に而御出、御老中御廻勤有之候段等、同日江戸發之飛脚、四月六日來着告來候事。

三月廿八日。徳川家齊、老中青山下野守を遣はして前田齊廣の參觀を勞せしむ。

〔政隣記〕

三月廿八日上使御老中青山下野守殿を以、今般就御參府被爲蒙上意、御作法都而前々之通に而、御都合能被爲濟。上使御退出後追付之御供揃に而、御老中方御廻勤。

四月朔日。前田齊廣登營して參觀の禮を行ふ。

〔政隣記〕

四月朔日、前日御老中方御連名之依御奉書御登城、御參府之御禮被仰上。隨駕之臣奥村左京・本多勘解由御目見。惣而御先例之通被爲濟。

右今月二十九日出飛脚指留に而、四月朔日江戸發、同九日金澤立之飛脚に申來候事。

四月十五日。金澤に於いて諸士に前田齊廣が着府以後の狀況を告ぐ。

〔政隣記〕

四月十五日月次出仕、四時前年寄衆等被謁。其節御用番山城殿左之通御演述、當座之恐悅に而相濟。

前月廿六日御機嫌克御着府、同廿八日上使青山下野守殿を以被爲蒙上意、當朔日御登城、於御黒書院御禮被仰上、殊に御懇之上意、奥村左京・本多勘解由御目見、重疊難有御仕合に被思召候段、以御書被仰下候事。

四月廿四日。前田治脩草鹿を行はしむ。

〔金龍公記史料〕

四月二十四日於金谷外庭。命近侍射草鹿。使人持組觀之。

四月廿八日。能登に於ける幕府領と加賀藩領との百姓が互に婚姻養子する手續を議す。

〔上田舊記〕

御預所村方与御私領村方与、是迄縁組等申合候儀聊指支候儀無御座候所、近頃御私領方にお

預所と幕府に能
登し幕府に能
藩に委て加賀領
諸村をいむる管

いて、高方并人別方等混雜之品々相改候旨に而、是迄之様に縁組互に相整不申、甚迷惑之趣相聞え申候。元來御預所之儀者、土方勘兵衛殿料知越中新川郡之内に御座候所、慶長十一年能州四郡之内に御替地被仰付、貞享元年御代官所に相成、享保七年御預所に被仰付、數年來縁組申合來候。既に奥郡入會時國村、御料・御私領本末相別れ居候者有之。先年より于今不相替親み仕、一方に子持不申時者一方より養子貰請、大切至極にいたし罷在候旨兼而承り居申候。第一右等之者縁組・養子相成不申時者、不心服之儀必定に御座候。天明六年千路村等八ヶ村之内、右等に順候者共多躰に御座候。御預所六十二ヶ村、能州四郡之内所々飛散村建有之、御預所切に而縁組等申合候儀に相成候而者必至与指支候間、人送りを以養子等指遣候儀者指支不申様仕度、且小高所に水飲多、稼等も無御座村方者、是迄御私領方之内懸作之貌に而持參候分も御座候。是又指支候躰。右高に離候而は、最早生計無之難儀仕儀に御座候間、右人送り遣度奉存候。左候得者御縮方も相立可申儀与奉存候。早々御詮議之上指支候儀無御座様、御郡奉行・改作御奉行に被仰渡置候様仕度奉存候、以上。

丑四月二十八日

賀古群五郎
前田源六郎
中宮半兵衛

戸田五左衛門

遠田誠 摩様

別紙賀古群五郎等より差出候に付、遂詮議候處、無據儀に御座候間、猶更同役共及示談、右紙面承届、夫々可申談与奉存候。此段申達候、以上。

四月晦日

遠田誠 摩

横山山城様

御預所村方与御私領村方与縁組申合候儀、於御預所指支不申段等、別紙之通御用番年寄中にも御達申置候間、於御私領不指支様、能州御郡奉行・改作奉行中に御申談有之様致度候、以上。

寅二月二十四日

遠田誠 摩

御算用場

御預所村方与御私領村方与縁組申合候儀に付、別紙之通遠田誠摩申聞候に付、寫相達候條可被得其意候、以上。

寅二月二十八日

御算用場

高田彌左衛門殿

五月九日。前田齊廣、陪臣の衣服に就いて令し、次いで之を撤回す。

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

五月九日

一、左之御親翰以主馬被渡下。

御付札、奥村左京殿

近年衣服之儀に付段々申出候處、家中之人々家來之内、中には品宜衣服を相用候躰粗聞候。主人に急度心得も可有之事に候。惣躰奢侈ケ間敷儀聊無之、分限を急度相守様、主人々々より可申渡筈に候。此段家中一統に可被申渡候。尤於此表も一統に可被申渡候、以上。

五月九日

奥村左京殿

被成下御親翰奉拜戴候。近年衣服之儀に付段々被仰出候處、御家中之人々家來之内、中には品宜——可申渡旨、奉畏候。御親翰勘解由にも拜戴申談候。當時嚴敷被仰渡も御座候に付、絹・紬之外宜敷品相用候儀は私共には見聞も不仕候。自然絹・紬之儀も御制之儀にも御座候者ば、如何敷様にも奉存候。依之今般金澤表に申遣候儀は先相扣置申候。猶更追而僉議之趣可

奉伺候。御親翰御着札・御封印奉返上之候、以上。

五月九日

奥村左京

御家中之人々家來之内、中には宜敷衣服を相用候躰被聞召、一統被仰渡方之儀に付、一昨日左京に御親翰被仰出、其節追而僉議之趣可奉窺旨、同人より御請奉申上候通に御座候。依之申合候は、御家中之人々家來共宜敷衣服相用候儀、何と歟被聞召候儀も被爲在候哉。一昨日も申上候通、私共には見聞も不仕候。陪臣之儀に付、分而被仰渡は無之御座候へ共、是迄衣服等之儀、一統に毎度被仰渡も御座候間、此度之儀は先御見合被遊候而可然哉とも心付候に付奉窺候。猶更被仰出次第奉心得候、以上。

五月十一日

奥村左京

本多勘解由

同 十二日

一、左之御親翰以十郎右衛門被渡下。

御指札、奥村左京殿

家中之人々家來衣服等之儀に付、重而僉議之趣令承知候。右之儀は横目共より言達之筋共有之に付申出候得共、被申越候趣茂尤に存候間、先令猶豫置、猶相考、重而可申出儀も可有之

候、以上。

五月十二日

奥村左京殿

五月十六日。前田齊廣、十ヶ年以上皆勤の士に賞詞を傳へしむ。

〔政隣記〕

五月十六日、十ヶ年以上皆勤之平士に、今日於御次、一段之由に被思召候段御意有之。頭々誘引、覺書を以不破五郎兵衛演述之。御禮は身當り頭々勤。

五月廿一日。前田利命金澤に逝去す。

〔政隣記〕

五月二十一日、裕次郎様當月上旬以來御腫氣有之、御勝れ不被遊候處、當十七日夕より御指引有之、不輕御様子。御ヒ醫中村文安等者御脚氣御衝心与奉診察、町醫師津田休寛は脾胃虛与奉診候得共、御醫師中は同意無之、段々御僉議之上一昨十九日より休寛に御療治被仰付、御藥指上候處少御宜、御小水八勺計被爲通、しうきふ三粒被召上候處、昨二十日に至り段々御指重り、申下刻御指詰り、今二十一日未中刻江戸表に御大病御指重り之爲御案内、御大小將組御抱守松原牛之助早打に而發出、酉上刻頃御大切御逝去之爲御案内、御使番金谷御近習

頭大橋作左衛門早打に而江戸表に被遣。御歳八、御實は御六也。

裕次郎様御氣色御滞被成候處、段々御指重不被爲叶御療養、今二十一日御逝去被成候。依之諸殺生・普請・鳴物等可有遠慮候。日數之儀は追而可申渡候。

一、御家中さかやき可爲遠慮候。又者は及其儀不申候事。

一、御先祖様方御忌日御寺へ參詣之儀、當分指扣可申事。

一、右に付頭分以上之面々者、明二十二日御兩殿様爲伺御機嫌、御用番宅迄可參出候。幼少・病氣等之人々者以使者可申越候。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候様可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月二十一日

長 甲斐守

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

五月二十日裕次郎様御卒去、同六月九日於寶圓寺御葬式御導師相濟、野田山御墓地に御納、御年御六つなり。御法號は香隆院殿梅胤總賢大居士と奉るなり。御縁女は紀伊中納言治寶卿女豊姫様文化元甲子年正月十九日御縁組之台命有之なり。香隆院様御生母於伊尾の方は竹村

大九郎安陣が伯母なり。

〔御觸留〕

裕次郎様御逝去に付、普請・鳴物等遠慮日數之儀、追而可申渡旨、先達而相觸候通に候。依之不押立普請は、昨廿一日より廿七日迄七日、諸殺生・鳴物等は來月十一日迄御忌中日數、遠慮可仕候事。

一、御家中之人々、御目見以上月代剃申儀、昨廿一日より廿七日迄七日、御歩以上は三日遠慮可有之候。又者は不及其儀候事。

御附之面々、頭分は五十日、平士等御目見以上三十五日、御歩並御居間方等坊主者廿一日、足輕小頭以下二七日月代剃申間敷候事。

但、本文日數相濟候共、御葬式相濟迄は相扣可申候。

一、頭分以上之面々、當廿七日御兩殿様爲伺御機嫌、御用番宅に可有參出候。幼少・病氣等之人々者、以使者可申越候。

右之通被得其意——

右之趣——

五月廿二日

長 甲斐守

五月廿七日。前田利命逝去の報江戸に達す。

〔政隣記〕

五月廿七日朝、裕次郎様御氣色御指重に付而之早打御使松原牛之助、御逝去に付而之早打御使大橋作左衛門、追々江戸表に着。右に付從江戸早打御使御近習御使番今村藤九郎、六月三日金澤着、翌四日發歸府。并御醫師丸山了悦六月三日着、翌四日發歸府。も、早打に而同日發出。就御逝去に而は御近習物頭並戸

田與一郎六月六日金澤着、翌七日發歸府、大村・淺野も同斷。へ指急御使被仰付、從兩御廣式大村武次郎・淺野三郎左衛門指急御使被仰付、三人共同日江戸發。

一、右に付御客等多、御表向一統平詰。且普請・鳴物等遠慮日數は、追而可被仰渡旨小屋觸有之。

一、右に付、於竹之間頭分以上爲伺御機嫌、御帳に付。

一、左之御覺書與村左京殿御渡被成候條、組・支配之人々に可申談旨等之以添書、御大小將横目山本又九郎より頭々に廻狀有。

付札、御横目

御家中之人々御目見以上月代來月四日迄七日、御歩并御歩並は同日迄五日、足輕・小者は當廿九日迄三日遠慮可致事。

一、御表向御忌中佳節・朔望に候とも平日之通に候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申聞候。組等之内裁許有之人々は、是又夫々申聞候様可被申談候事。

五月廿七日

五月廿九日。德川家齊、前田齊廣に使を遣はして利命の逝去を弔せしむ。

〔政隣記〕

五月廿九日、今般就御不幸相公様御膝中御尋之御奉書相渡。同夜宿繼を以江戸發、六月八日曉金澤へ到來。右御禮之御使者御馬廻頭人見吉左衛門に被仰付、同月十一日金澤發足。

同日、今般就御不幸上使御奏者番堀内藏頭殿を以、從公方様・大納言様被爲蒙上意。御前少々就御不例、御名代織田出雲守殿に而、御例之通夫々御都合克被爲濟候事。

五月。郡方の者の空米商賣を行ふことを禁ず。

〔筒井舊記〕

近年於金澤紛敷空米商賣多、暨支配所之内に茂當町米中買与申談、右米商賣いたし候者も有之躰粗及承候。右者御郡方に而有之間敷儀に候。米下直に向候得者過分損料有之、詰り候所者身を隠し候族も出來、且は米方作法も有之由故、無據他方より懸合に可相成も難計候。當

活は寛闊の
意なるべし

町杯に而、中にも身上相應躰之中買は、危き米取扱不致、先は町方之儀は兎も角、御郡方之者致米商賣候儀は甚不相當、身元相應之者茂終には身代致零落候。全躰御郡方之者も活つ成風俗に相成、全盛を人先々越可申存心故、暫之内に過分之得利徳度、且欲心を以右様之働、空米杯を取扱、甚危き働に而所謂山師与申なし候類に候。且又近年變作等に而、御郡方も不景氣至極之時節に候所、右等之働相募り、一躰潛上に相成候儀、彌難澁之基に候。此處輕き者に而茂不存付儀は残念之儀。一人之出奔たり共不輕大切之儀に付、於拙者共茂致辛勞儀に候條、是以後心得違之者無之様、末々之者に至迄茂不相洩様急度可申渡、尤村役人共々茂制方能々致會得候様可申渡置候。斯申渡候上心得違之者於有之は、其方中可及不審候條、會得之儀肝要に候事。

丑 五月

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

能州四郡御扶持人・十村中

六月八日。百姓の法寶物を觀る爲寺院に參詣するを禁ず。

〔郡方御觸〕

當年親鸞聖人年忌相當候に付、所々於寺寶物相弘候由、其内に茂追付越中富山極性寺寶物、

加賀藩史料 第十一編 文化二年

四五九

御郡中寺庵に而相弘候様子に候。若村々之者共參詣致候者茂可有之与存候間、此段村々役人共の申渡、參詣等之趣相制、一人茂不罷越様可申渡置候、以上。

丑六月八日

菅野兵左衛門

高田彌左衛門

能州奥郡十村中

六月九日。前田利命の葬儀を寶圓寺に行ふ。

〔政隣記〕

六月九日、香隆院様御葬送、今朝六時頃金谷御廣式御出棺、於寶圓寺御葬式夫々被爲濟、四時過同寺御發棺、野田山御廟所被爲移、御納方相濟、御供之人々山城殿等夕七時前歸宅。

〔御觸留〕

御横目

御葬式之刻、金谷御廣式より寶圓寺、夫より野田迄御供之人々、且又右之節暨御中陰御法事之節、御寺に罷越候役人・御番人等御歩並以上其外、都而上下着用之人々者、白帷子・石餅無地淺黃上下着用之事。

但、御寺に相詰候頭分以上之面々者、長袴可致着用候。

一、御法事之内拜禮に罷出候頭分以上、白帷子・長袴之事。

但、長袴者何色に而茂可爲勝手次第事。

一、裕次郎様御附之人々者、御側小將を初、御中陰滿散日拜禮罷出候人々、白帷子・半上下之事。

但、上下者何色に而茂可爲勝手次第事。

一、御三十五日・御四十九日・御百ヶ日御法事之刻者、御寺詰・拜禮共、頭分以上染帷子・長袴、平土者染帷子・布上下之事。

但、何色に而茂勝手次第之事。

右之通夫々申談可仕候事。

五月

六月十四日。前田利命逝去せしを以て赦を行はしむ。

〔金龍公記史料〕

六月十四日令爲香隆公子中陰法事行大赦。

八月十三日行赦五十三人。

六月二十日。御林山の竹木を盜伐したるものある時の處置を定む。

〔郡方御觸〕

能州四郡一村一ヶ所御林山、往古より之御林山十五ヶ所、并永光寺御取揚山唐竹御藪之内に而竹木盜伐有之節、山廻足輕見咎候歟、何に而茂、其村より斷出不申分者、一作一步過怠免申付、尤伐人相知候得者御定之通禁牢可申付候事。

一、御林山等之内竹木盜伐有之節、伐人相知不申、其村より斷出候得者、一作一步過怠免之内五厘用捨、五厘過怠免申付候。伐人指出候節者、五厘之過怠免も用捨可申付候事。

一、御林山等番人之儀者、村方より給米茂宛行置候儀に候得者、嚴重に相守可申儀、萬一盜伐之竹木有之節者、早速村役人々斷可申答に候。等閑に致置、外より於相顯者、詮議之上山番人禁牢申付候事。

右之通今般御林山等之内伐木有之節、取捌方御定相極候間、其段村役人并山番人々不相洩様可申聞候、以上。

丑六月二十日

御用番 堀 與 八郎

山田三郎左衛門 不在合

奥郡十村中

六月。江戸に於いて禁牢の後放免せられたる者の處置に就いて議す。

文化五年閏
六月の條參
照

〔公事場奉行相勤候節職事日記〕

付札、公事場奉行に

於江戸表禁牢被仰付候者出牢之節、其主人相詰罷在候而も、主人貪着不仕、出牢之者は割場より御門外へ追拂候御格に候由。右は御定等有之、前々より之御格に候哉。且自然江戸表に而惡事有之節、右追拂之儀公邊向譯立居候哉。御國は公事場より追拂之儀御届有之儀とは相違いたし候事故被相達候間、江戸表之様子承札可申達旨等、先達而各紙面被指出候に付、江戸表割場奉行手前遂僉議候處、出牢者御門外に指出候儀、舊記等相しらべ候得共、御定等も相見え不申。尤いつ頃より申儀も、年舊き事故相知不申、前々より右之御格合に相成居候旨等、別紙覺書之通に而、御國へ罷歸候儀不指支趣に候。且又此表に而之追拂は、御領國追拂之御刑法故、若於他國惡事等可致哉と公邊に御届置有之候。江戸表禁牢者は、御刑法は禁牢に而相濟、月數等相滿出牢之節、乃至此表に候得ば主人に可相渡處、江戸表に而は主人相詰罷在候而も貪着不仕、御門外に指出候譯に候得ば、此表追拂者とは様子違候。併右御門外に指出候茂、御縮方如何敷と申儀にも候はゞ、猶更僉議之趣可被申聞候。則別紙相渡之候事。

丑 六 月

七月七日。江戸に於いて御先手物頭堀萬兵衛の若黨酒狂を以て小者を傷害す。

〔政隣記〕

七月七日夜於江戸、御先手物頭堀萬兵衛家來若黨中谷與太夫と申者、於御小屋萬兵衛家來小者久内与申者之肩先へ脇刺を以切付。其夜主人萬兵衛は泊番之處、右與太夫御殿物頭溜縁際迄罷越、右等之趣萬兵衛へ直に及届候に付、萬兵衛儀様子承受候内、與太夫儀脇刺を抜、其身之喉に當之少々疵付候に付、其儘萬兵衛押留、取締御小屋へ爲引取候。右與太夫之疵は至而少々之儀、久内疵も死申程之事に而無之、翌八日夕爲檢使御歩横目兩人罷越、無異儀相濟候事。

但、右外に何等之趣意も無之、全酒狂之躰与云々。

七月。能登奥郡より毎年浮塵子を生ずる田地の面積を上申す。

〔上田舊記〕

こぬか虫附候田地、魚油を入候得者虫散可申由に而、文化二年右虫附田地歩數書上可申分改作所より被仰渡、常右虫附候田地歩數書上方左に記。

覺

- 一、五十一萬歩程 馬場村 喜左衛門組 一、三十八萬歩程 走出村 友右衛門元組
- 一、三十三萬歩程 大澤村 内記跡組 一、七萬五千歩程 稻舟村 藤太組
- 一、十二萬歩程 鈴屋村 九郎右衛門組 一、五萬歩程 折戸村 源助組
- 一、六萬五千歩程 飯田村 三郎右衛門組 一、十一萬歩程 宗玄村 忠左衛門組
- 一、七萬歩程 鹿野村 恒方組 一、十七萬歩程 鶴川村 爲次郎組
- 一、三十二萬歩程 中居村 三郎兵衛組
- 二百二十萬歩程

右こぬか虫か虫与唱候虫付候節、魚油を灌候得者虫散、痛等無之様子に付、右虫付申御田地歩數書上可申旨被仰渡、奉得其意、奥兩御郡組々申談、例年大抵うぬか虫付申歩數僉議仕書上申候。尤其年柄に依多少可有御座候得共、大圖右歩數に應、魚油手當被仰付候は、相辨可申与奉存候、以上。

文化二年七月

- 鶴川村 喜三兵衛
- 折戸村 源助
- 鹿野村 恒方

御改作御奉行所

魚油浦方に貯有之哉、直段等僉議仕書上可申旨被仰渡、奉得其意、組之浦方僉議仕候處、年内より五月中迄鯨・ゆるか・さめ・ふぐ等之油出來仕候得共、燈油に相用、當時賣買之油無御座候。爲其私共より御達申上候、以上。

丑 七月

鵜川村 喜三兵衛
折戸村 源 助
鹿野村 恒 方

御改作御奉行所

八月二日。他國流浪人の能登に徘徊する風聞あるを以て警戒を命ず。

〔筒井舊記〕

當盆前より越中筋に他國流浪者大勢入込、放火・夜盜之沙汰に而、所々騒ケ敷様子專取沙汰いたし候處、前月廿五・六日頃より右之者共能州に入込候様專致風聞候旨、村役人共より相斷候に付、當所并近邊高田村喜三次・武部村四郎太夫兩組にも縮方爲心得申渡候。依而其方共組々、村方・山入迄茂不相洩様御縮方嚴重に申渡、若右躰之無心元者致徘徊候はゞ、宿廻之藤内共に爲召捕、所口役所に可指出候。右之趣得其意、先々急速相廻、留より可相返候、以上。

丑 八月二日

奥兩御郡外浦十村中

神尾孫九郎

八月五日。藩主等の忌日に當るとも河川漁撈者にその業を營むことを得しむ。

〔御用留〕

才川魚殺生請負人油屋長右衛門、并下付商賣人共、過分川役銀指上殺生仕候所、去年鳥屋共手前被仰渡之趣も御座候に付、何と無御日柄には相扣申候。是迄は川下等も手廣御座候處、去年來川方嚴重之被仰渡も御座候故、彌手狹に相成候上、毎月餘程之御日柄指除、暨時々濁川等に相成、彼是殺生不仕日多御座候而者、畢竟上納方も指支難澁迷惑仕儀に御座候間、獵師之振を以、是迄之通御日柄にも殺生仕候様可申渡与奉存、川請負人之儀者何之被仰渡も無御座儀には候得共、右等之儀私共切申渡候儀も難仕候之間、一往御達申上候、以上。

七 月

井上井之助

若年寄衆四人様

才川魚殺生請負人

下傳馬町 油 屋 長右衛門

右下付商賣人

加賀藩史料 第十一編 文化二年

横傳馬町	小松屋	藤兵衛	千日町	淺野屋	吉兵衛
才川橋爪	八尾屋	彌兵衛	河原町	釘屋	與右衛門
川上新町	越中屋	善八	下傳馬町	油屋	長兵衛
法船寺町	太郎田屋	次右衛門	才川々除町	紺屋	平助
才川々除町	村屋	八郎右衛門	都合	十人	

右才川請負人并下付之者共名書御達申上候。せがれ并雇之者も罷越候儀に候間、可相成儀に御座候はゞ、鳥屋共同事札御渡被下候様仕度奉存候。左候はゞ紛敷殺生人入込不申、御縮方にも宜御座候間、此段御達申上候、以上。

七月

井上井之助

若年寄衆四人様

〔御用留〕

一、川殺生人御日柄に罷越候儀、高構之儀は御家中構場に付而之儀、川方は右とも違候儀に而、敢而御貪着も無之儀乎、一通若年寄衆聞濟有之に付、猶更御日柄に餘人も罷越候儀杯有之、紛敷事も可有之哉に候間、私共切札渡置申候間、御横目方にも一應被仰入置候様に致度、改方に者私共より申遣置可申段、岡部宗助を以御達申置、明十一日御横目所へも可被仰

入置旨に付、左候はゞ十日夫々可申渡旨宗助迄咄置、今日夫々申渡候事。

但八月五日治定井上承之。

八月十二日。諸士の河川に漁撈を爲すものは役銀請負の川師より鑑札を受くべきことを命ず。

〔政隣記〕

下傳馬町油屋長右衛門与申者、當年より七ヶ年之内才川魚殺生請負申付置候。然處前々御家中之人々初、都而自分に致川殺生候人々者、川師方へ相達見合札を請可致殺生筈に候處、當三月迄暫く請負人無之、明川に相成居候故、諸人勝手次第致殺生、今以不苦事之様に相心得候者も有之、川役銀不指出、川師致難儀候間、投網・小目網・流網・鮎飛網・ねり網并片瀬築等に而致殺生候人々は、川役銀等定之通指出、札を請候様致度旨、町奉行申聞候條、以來右致殺生候人々、都而札を請候様相心得可申候。

右之通被得其意、組・支配之人々を可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。右之趣可被得其意候、以上。

八月十二日

長 甲斐守

吉田八郎太夫殿

八月十三日。前田治脩尙在國二十ヶ月の請を許さる。

〔金龍公記史料〕

八月十三日。太公因疾尙滯在于國二十月之請見許。

八月廿七日。前田齊廣、從來發したる命令の當否を上申せしめ、その不可なるは之を改めんとすることを告ぐ。

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

八月廿七日

一、左之御親翰藤九郎を以被渡下。

御指札、奥村左京殿

別紙差遣候條、披見候上金澤同席中可被相達候。尤不時に遣候に者および不申、明後廿九日出に可被相達候、以上。

八月廿七日

奥村左京殿

猶々別紙之趣、尤此表に而も夫々被遂僉議、相改め可然品は無泥可被申越候、以上。

入國以來申渡置候事共、其砌急速に申出候儀杯も有之候故、其内に者不相當事も可有之哉与存候。依之今般改而申聞候間、各得与被遂僉議、不宜儀は勿論、無左与も若後々に至り不可然品々者、相改候存寄に候間、格別に被遂僉議、其砌急度申渡置候事に而も、無泥可被申聞候。其上にて可遂思慮候、以上。

八月廿七日

年 寄 中

〔御勝手方諸事覺書〕

一、江戸表より御用番に到來之紙面寫。

御入國以來被仰渡置候事共、其砌急速に被仰出之儀杯も有之候故、其内に者御相當不仕事も可有御座哉与思召候。依之今般改而被仰聞候間、得与僉議仕、不宜儀は勿論、無左とも若後々に至不可然品々は御改被遊候思召候間、格別遂詮議、其砌急度被仰渡置候事に而も、無泥可申上旨等、御親翰を以被仰出候趣、先達而被仰越候。右之趣御勝手方甲斐守等と茂可申談与存候間、猶更御序を以御伺御申越可相成候、以上。

九月 四日

横山山城判

奥村左京様
本多勘解由様

八月廿八日。石川御門櫓下の修理急に成就せざるを以て諸士通行禁止の令を解除す。

〔政隣記〕

付札、御横目

石川御門續御櫓下石垣御普請被仰付、當春より右御門往來指留置候處、右石垣御普請今三・四年も相懸り候に付、右御門往來も急に難相辨由に候。左候而者右御門向寄之諸役人等、短日之砌杯相廻り候而者、指急候御用有之節おのづから指支も可有之儀に付、格別御普請奉行遂詮議、來月四日より石川御門先往來不差支候。乍去右之邊御普請所へ圍取り道橋も無之候間、往來之人々其心得に而罷通、猶更從者等末々迄込合不申相通候様可申渡候。且又下馬・下乗も右に准じ、假圍外に而可致候。併嘉節・朔望并御弘等に而出仕之面々者、人多に召連致混雜候條、是迄之通河北御門より登城可有之候。右之趣一統不相洩様可被申談候事。

八月二十八日

右御城代又兵衛殿被仰聞候旨等、例之通添紙面を以御横目中より廻狀有之。

閏八月八日。百姓等の頼母子に類したる所行を停止せしむ。

〔加州郡方舊記〕

一、頼母子之儀者元來御停止之儀に候得共、時節柄に付無據節者、一門等へ一通り才覺等相頼申儀も相泥、無是非右に似寄申趣才覺等仕儀、當時一統之儀に者候得共、右之譯合に付役儀等相勤候者は急度心得可有之所、御郡方之者其儀令違失、十村共等之内爾与續も無之百姓共へ相頼、頼母子に似寄候調達等致候。依而夫々手當可申付候も如何敷事に候得共、累年右風俗之處今更相顯候者を嚴重申付候も如何に付、先是迄之儀者令用捨、以後之儀申渡候。十村之儀者別而支配之者風俗も可相改所、其身右躰不筋調達等仕族に而者、下々穿鑿も不行屈筈、誠に不埒之儀に付、是以後若右躰之儀企申者於承者、無用捨急度申渡儀に候間、此段譯而嚴重十村共へ可被申渡候。尤新田裁許・山廻り之儀も、人支配無之候得共、役儀も有之儀に候得者、十村共同様以來之儀急度相心得候様、是又嚴重可被申渡置候、以上。

閏八月八日

御算用場

杉山新平殿

宮崎久兵衛殿等廻狀

閏八月十四日。物品を拾得したる時は往還に札を建て、公告せしむ。

〔郡方御觸〕

支配所之者ひろひ候品物有之節、役所^に直々指出、尤是迄札建置候儀も無之候得共、以來拾物有之節者、其向寄往還等に日數七日札建置可申候。勿論主在無品共、前々之通役所^に指出受指圖可申候。且海上拾物之儀者、是迄之通相心得可申候、以上。

丑閏八月十四日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門 不在合

能州四郡十村中

閏八月廿二日。前田齊廣夫人高須侯邸に赴き病と稱して歸らず。

〔政隣記〕

閏八月廿二日

今月十一日御前様五時御供揃、常御行列に而市谷御邸へ被爲入、同日御戻可被遊筈之處、就御不例御逗留。依而御供之人々一たん罷歸、御戻之御様子相知れ次第御迎に罷越候筈。且御逗留中彼邊火事有之候節、御供之人數於市谷夫々御手當有之に付、從此方様御供御人數不被遣筈之段、奥村左京殿夫々^に被仰渡。附、御醫師大高東榮被指遣候得共、御診不被仰付、且年寄女中罷越候得共、御目見不被仰付候由。

市谷は夫人
の實父高須
侯徳川勝常
の邸

閏八月廿二日。外海及び湖潟に於ける諸船に郡奉行をして焼印を施さしむ。

〔加州郡方舊記〕

一、御領國諸浦共往來札を以相通候渡舟・商舟之外、外海并内潟獵舟・川船・商船共、御舟之外者都而是以後燒極印入爲致通用候趣、今般詮議相極候に付、右極印可相渡候條、各手前へ被請取、船に不相洩様極印爲入可被申候。尤右極印無之舟通用不相成儀に候間、以後新造出來之分者、其段當場へ被相届、右極印可被申付候。尤今般極印入候上、舟數委曲可被書出候。且是迄船役銀十村散役裁許取立候分者、右散役裁許より極印打渡候條、此段夫々可被申渡候、以上。

閏八月二十二日

御算用場

杉山新平殿

宮崎久兵衛殿

九月廿三日。前田光高夫人の百五十回忌法會を行ふ。

〔政隣記〕

加賀藩史料 第十一編 文化二年

九月廿三日、昨今於傳通院、清泰院様百五十回御忌御法事無御滞相濟。昨廿二日は五時前之御供揃に而御參詣、今廿三日は曉八半時過之御供揃に而御參詣。同寺へ御先規之通御名代水野出羽守殿御出、御代香御香奠御備。依之爲御禮四時御供揃に而兩御丸御登城、御老中方御廻勤之事。

但、昨日者御寺詰人暮頃歸、今日は四時前一統歸。

右之通に而、廿一日より今日迄指支候に付、御客方且御用人も御歩頭菊池九右衛門勤之候事。

同日於金澤如來寺も右御法會御執行今朝有之。

〔金龍公記史料〕

九月廿三日修清泰夫人百五十回忌法會于傳通院。大將軍使寺社奉行水野出羽守。參拜奠銀二十枚。

九月。諸士の家作に關する件を定む。

〔御勝手方諸事覺書〕

一、家建修理願は、何程加修理候哉様子相知不申に付、御聞届被成間敷事。

但、家取拂建直し候儀は、紛敷儀無之儀に候間、御聞届可有御座事。

一、町家等に罷在、及大破難居住に付、同町家等の家仕替之儀、宜家に仕替候哉、暨家大破之程茂分り不申、其内に者自由之仕替茂可有之哉に付、御聞届被成間敷事。
但、本屋敷の罷越候儀は、新作は勿論、外居住家拂罷越、又者本屋敷の家買戻罷越候共、本屋敷の罷越候儀は不惡儀に付、御聞届可有御座事。
下札
家所持無之、一類等之内に同居仕罷在候者、居屋敷の家作いたし候か、又者外家求候節右同斷。

丑 九月

十月八日。能登奥郡の十村等、一向宗西派の門徒騷擾の憂あるを以て警戒すべきことを通牒す。

〔筒井舊記〕

高田彌左衛門様より被仰渡候者、近年西方一向宗安心勸め方之儀に付、右宗旨之者共騷敷。然處頃日越中古國府勝興寺、江戸表より御召出之旨に而致出立候。右等之儀に付猶更右宗門之者共騷立申儀可有之哉。何分此節御上之御邪魔に不相成様取計有之様に与、御席より被仰渡之旨に而、御郡方之儀者先御扶持人手前に而取鎮め可申儀に候。尤奥・口共下々之者共騷

立候儀無之躰に候得共、此末何角取沙汰有之候は、取計可申、併前廉より下々可申渡儀に而者無之、其心得に而罷在候様に与被仰渡候に付、爲御承知申進候。自然右躰之取沙汰有之候は、何分御取鎮め可被成候。猶更私共之内にも其段御申聞可被成候。此狀先々御順達、落着より喜三兵衛方御返可被成候、以上。

丑十月八日

鶉川村 喜三兵衛

折戸村 源 助 不在合

鹿野村 恒 方

仲間 宛 所

十月廿三日。前田光高夫人の遠忌の爲に非常大赦を命ず。

〔政隣記〕

十月廿三日非常之御大赦被仰付。是依清泰院様百五十回御忌也。

〔職事日記〕

一、非常御大赦与一通り御大赦与は品違之趣、左之通り覺書今日御用番執筆齋藤源之丞へ渡也。

非常之御大赦与一通り御大赦与之差別有之哉之旨、御尋之趣承知仕、左之通に御座候。

一、先年は急度赦被仰付候節は、御大赦与被仰出る。

但、右御大赦には吟味未決之者をも言上仕候。然共右未決之者に而も、死刑に可當者は命御助追放被仰付、三ヶ所御構追放刑之者は爲御大赦御宥免も有之、又は爲御大赦御領國追放被仰付候儀も御座候。御領國追放以下之者共不殘御宥免御座候。尤吟味決着に而言上仕候者も、右同様に被仰付候。

一、急度不仕、或者此節之儀故一等御用捨杯与輕き御赦被仰付候儀、先年御座候。

右御吟味未決之者、并死刑之者は指除、追放刑より以下之者を書上候へば、御刑法一等宛御宥免被仰付候。

右之通御赦輕重有之候處、中古より御大赦并輕き御赦之名目無御座、一通り御赦与申名目迄に而、未決之者御赦に掛り不申、罪治定之者迄御刑法一等宛御赦免御座候。元來未決之者は本刑難定者も有之候事故、何となく未決之者は御沙汰無御座事に相成候哉、何故与申儀相分不申候。

一、天明五年御改法之節、御法事に付死刑治定之者之外、爲御大赦吟味未決之者共迄も、御刑法之無差別不殘出牢被仰付候。

一、天明六年泰雲院様御中陰御法事之節、非常之御大赦与被仰出、死刑之者を初未決之者共

迄も、不殘無差別出牢被仰付候。夫より以來重き御法事に非常之御大赦被仰付、右之通御刑法之無差別出牢被仰付、常御赦には未決之者被及御沙汰間敷旨、天明七分而被仰出候。仍之當時は非常御大赦与常御赦与兩様に相成居申候。右兩様に相成候所は、先年之兩様有之儀に相當候へ共、御助成之所は先年より結構に相成居申候。依而先年之御大赦与、當時之非常御大赦与は様子違申候事。

右執筆齋藤源之丞に相渡也。

十月廿六日。河北郡百坂村に於いて磔刑を行ふ。

〔政隣記〕

十月廿六日下口桃ヶ坂女兩人磔被仰付。拷札之寫左之通。

はりつけ

越中高岡町

酒屋與三右衛門妻

そよ

此者意恨を以夫與三右衛門繼母之家へ火をつけ、其外盗いたすべきたため老女をころすべき仕形有之所、仕損候故逃走候を召捕畢。重罪露顯之上如此申付者也。

十月廿六日

はりつけ

安江町裏地借罷在候
越中屋七兵衛後家

むめ

此者停止を背、男女出合之宿いたし、剩其身誰彼となじみ合、身持不埒に付存命難成儀有之

とて、幼少之子ども三人押殺、其身可相果と井戸へ入候を引上畢。重科顯然之上如斯申付者也。

十月二十六日

右に付爲檢使、御先手物頭茨木源五左衛門・渡邊久兵衛、公事場付御横目宮井傳兵衛、右場所へ參出之事。

十月廿七日。家中諸士直接に知行所の百姓を使役すべからざる前令を守らしむ。

〔異本三守御譜〕

付札、定番頭

御家中諸給人より不依何事百姓へ直々申付間敷、又百姓よりも給人へ相斷間敷旨等、寛政年中御定之趣も在之候處、知行所百姓に飯米之内相拂候旨差紙面相渡、米持運候儀在之躰に付、右様之儀は不相成御定に候へば、一圓在之間敷儀に付、猶更心得違無之様、寛政十二年相觸候通に候。然處御家中之人々を初、收納米之由にて、知行所百姓を相頼、批屋等へ米賣渡候人々も有之、しらべ方紛敷、米縮方指障候旨、御算用場奉行申聞候條、以來右躰之儀無之様嚴重可相心得旨、組・支配之人々を可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相

達候様可被申聞候事。

右十月廿七日御用番甲斐守殿御渡、武田喜左衛門廻狀。

十月。河北潟の漁撈に關する細則を定む。

〔河北郡内獵業相用候網員數長短並役銀取立方定〕

八田村抄漬之事

一、抄漬方五十なき限りに相極、抄數六百ヶ所限り相配漬置可申、役銀一なきに付五匁五分宛毎年取立可申候。抄漬場所之儀領切差支候は、何村之前に而も漬申儀毎年九月中書出可申候。但本文定之通之外不時に漬申儀有之候は、他村より可及斷、其上に而急度可申付候。

根懸獵之事

一、才田村に三ヶ所限、大崎村に二ヶ所限り相極、一ヶ所之間數十二間宛与指定可申候。抄伏方之儀、其ヶ所之水面深淺により抄數伏可申事。兩村共伏方相違有間敷候。場所之儀大崎村に而者、本村より新村与之前中程に相究、才田村に而者、大崎村前に一ヶ所、太田村前に二ヶ所相究可申候。右向後少も場所替不致様定置可申候。役銀之儀毎年一間に付三分宛取立可申候。

鮎網之事

一、内日角三統在來之通可相用候。網長八十尋を限、袋幅四幅、袋口左右三十間程之間六幅、袋二尋半廻り六幅相究可申候。
一、北間村四統在來之通可相用候。網長百尋を限、袋口五幅、中六幅、長三尋半、横廻二尋半に相究可申候。右役銀一統に付十二匁毎年可取立事。

卷網之事

一、荒屋村に五統、八田村十統限与相究、是迄之通相究可相用候。網大さ之儀四十六尋を限、船二艘に而獵業仕、是を一統与可相極候。網目者九節限、夫より細かなる網一圓相用間舖候。役銀者一統に付十一匁八分一厘宛毎年取立可申事。但是迄四艘に而卷揚候大網者捕揚、以來一切差止可申事。

阿免鮎網之事

一、大根布村・荒屋村・八田村・大崎村・宮坂村・向栗崎村・内日角村・室村・西蚊爪村・北間村・川尻村、是迄之通可相用候。網長八尋三尺、横一目織布八幅限、是より大成分堅相用申間敷、役銀一統に付毎年一匁取立可申事。

海老網之事。但八田村にてはあまきぎ網与相唱候。

一、八田村・大根布村・荒屋村・宮坂村・室村・内日角村、是迄之通年中勝手次第相用可申。網長一丈八尺より七尋迄、横三尋二尺限りに可仕候。役銀一統に付、毎年二夕宛取立可申事。白鮎之事

一、大根布村・内日角村・八田村・西蚊爪村・北間村相用可申候。網長九尋、横もじ十四幅限りに可仕候。役銀一統に付毎年一夕宛取立可申事。

小網之事

一、長二間二尺限り、横二尋限り、十月より正月を限り可相用候。尤船一艘宛散々獵業可致、ならべ引堅相禁じ可申候。役銀之儀者取立申間敷事。

おり引網之事。但五郎島村に而は追鮎網与相唱候。

一、内日角村・西蚊爪村・五郎島村・北間村、是迄通可相用候網、長四尋、横もじ七幅限り、六月より九月迄可致獵業候。役銀之儀者不及取立事。

川ぎす網之事

一、大根布村・向栗ヶ崎村・西蚊爪村・北間村・大野村・洲崎村・栗ヶ崎村・五郎島村に相用可申候。網長七十尋限、横一尋、網目十節限り可仕候。役銀不及取立事。

持網之事

一、是迄之通五郎島村・大野村・大根布村・栗ヶ崎村・八田村・向栗ヶ崎村可相用候。大潟に而は混同、其餘者領切に可相用、無役之事。但潟縁村々之内、持網是迄所持之分、其領切陸より持候儀は不苦。船に而持候儀堅不相成候事。

投網之事

一、是迄仕來之村々、網九尋を限り相用可申候。是より細かなる網堅相禁、何方之者に而も取扱候はゞ、見付次第捕揚可申候。尤不及役銀事。

立袋獵之事

一、栗ヶ崎村・五郎島村・大野村領切に相用可申。尤不及役銀事。

一、鯨釣・蛸貝・追狩獵之儀、是迄仕來之通獵業可致候。尤不及役銀事。

うなぎ網之事

一、北間村・西蚊爪村仕來之通相稼、役銀一人に付一夕宛毎年取可申。尤人數毎春書出し可申事。

一、致獵役銀無之村、うかひ並ゑびすき之儀者格別、持網等獵業に似寄候儀堅不仕様可相心得候。若相用申儀有之候はゞ、獵師共見付次第取揚可申事。

一、前段網數等相究候品々、限數之内相減申候節者、斷次第役銀定之通退轉可申付候。重而

出來致候節、是又斷次第限數迄は承届候事。

右之通今般相改申渡候條、村々獵師急度相心得、此外獵業致問敷、相互に吟味いたし、其村に無之網等相用候は、取揚可申斷。如此遂詮議申渡以上、紛敷網を以致獵業候村々有之を見咎不申、致用捨於置、其儀相現候は、右致用捨候村々も急度相咎可申候。且又前搔之儀は元來御停止之儀に候所、近年似寄候網相用候者も有之躰聞候條、此儀も前條之通嚴重に申渡、都而紛敷網等見請候は、少も無泥取揚可申斷候。勿論渴縁鳥に障候場所に而、網用不申様可相心得候。是等之趣村々役人之儀は不及申、此帳面村々に寫取、獵師共人別に能致會得相聞候様嚴重申渡、尤人別請書取立可指出候、以上。

文化二丑年八月

御郡奉行
改作奉行

- 淵上村 源五郎
- 相合谷村 喜兵衛
- 森元組 才許
- 酒見村 八三郎
- 南森下村 金太郎

北川尻村 市十郎

森村 市十郎

白尾村 理右衛門

十一月朔日。金澤城土橋御門の工事竣成したるを以て通行を許す。

〔御觸留〕

御横目

土橋御門御造營就出來、來月朔日巳の刻より、如最前右御門往來不指支候條、夫々一統不相洩様可被申談候事。

十月廿八日

前田伊勢守

十一月十一日。村々貯用林の取捌方を定む。

〔眞館留帳拔書〕

村々貯用林枝下并下草苧取、或者損木等伐取方取捌之儀御窺申上候處、御聞届に付、御裏書之小紙別紙相廻候間、御承知可被成候、以上。

十一月十一日

本江村 惣助

仲間 宛所

近年山方御仕法に付、村々貯用林一ヶ所宛相定、此分十村支配被仰渡置候。依而已後取捌方之儀左に申上候。

一、貯用村林之儀は、其村非常手當に可仕ため立置申儀に候得ば、御林山同事縮方嚴重爲相心得、若盜伐仕候者御座候はゞ、組十村廻り口立會詮議仕、御郡御奉行所へ申上、急度御答被仰付候様可仕儀に奉存候。

一、松枝下し・下草苧取之儀願在之砌、書付爲指出、組十村見分、願之通相違無之候はゞ、廻り口御扶持人へ申遣、願書付に組十村・廻り口御聞届之致裏書、枝下し・下草苧取爲仕、追而跡山見分之儀、組十村手代指出可申候。

一、立枯・風折・根返等之損木出来、伐取願出候はゞ、組十村見分、廻り口御扶持人へ相達、廻り口罷出立會爲伐取、伐木伐廻り、組十村極印を入可申候。

但、風折・根返等に而人家・往還道或は御田地へ指障り申節は、組十村より早速爲伐除置、廻り口御扶持人へ相達、廻り口立會に而極印を入可申候。

一、無據品御座候而松木伐取度段願出候はゞ、書付取立、組十村より廻り口御扶持人へ委細申達、無據品精誠相糺、随分木數多く伐取不申様成限り詮議を詰、願書に聞届之木數、組十村・廻り口連名裏書仕、尤立會伐渡、組十村より極印を入可申候。

一、前段之通無據趣在之候歟、或は損木に相成伐渡候はゞ、木數見廻り、組十村・廻り口御扶持人連名之書付を以、追而御郡御奉行所へ御達可申候。
右貯用村林取捌方之儀、私共詮議之趣御窺申上候、以上。

丑 閏 八月

本江村 惣 助

武部村 四郎 太夫

緩目村 五 兵 衛

高田村 喜 三 次

御郡御奉行所

御改作御奉行所

表書之通可相心得候、以上。

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

澤崎源太郎

吉田 兵 馬

十一月十四日。諸士困窮するを以て救助の方法を議す。

〔御親翰留其外密事暨内廻狀留〕

御朱書物寫左之通。

紙面遂披見、段々申越候趣令承知候。其方共存寄之趣尤之儀に候。當暮一統難澁之程彌令推察、先以寢食不安之事に候。しかし其方共存罷在候通り、時節柄之事故、手前幾重にもおもふとも、中々救方不行届、別而心痛之至に候。乍去此儘に有之候而は、勤仕取續之程難計躰に相聞候付、何とか救方之手段も可有之哉、何分にも遂愈議申越候様、先頃金澤表年寄共の申遣置候。先此段申遣候。何れ共其方共心付之趣は、聊無泥可申聞候。替存寄有之人々は、人別に成共可申越候。將又先達而其方共心付に而、組之人々勝手取續仕方之儀も相立置候得共、申越之族に而は其詮も無之哉、此儀は少辨兼候。組々面々難澁之儀も、種々様子も可有之事に候。彼は無油斷、其方共深切に指引可有之候。尤此儀は不及申事に候得共、序にまかせ申遣候、以上。

口達之覺

當年米價別而下直に付、御家中一統難澁之處、金銀融通無之、必至与指支候に付、何とか御裁判御座候様仕度旨、先達而申上置候處、御上御難澁之御時節故、容易御取扱は難被成候。乍併私共存之趣如何様に存付罷在候哉、可申上旨被仰聞之趣奉承知候。先達而御達申上候

趣は、當時世上之様子御達申上候儀に而、此儘被指置候而は人々勤仕にも指障候場へ至り可申哉与奉存、其段申上候。然共當時御時節之儀御座候間、御救等之儀奉願候儀奉恐入罷在候に付、品を定候而者不申上候得共、此度御内分被仰聞候儀に付、私共存之趣申上候。當年作方申分も無之様子承及申候間、何卒一統御借知一作被返下候儀に御取計可有御座哉に奉存候。世上一統指支候儀被聞召、御上より之思召を以被返下候は、格別一統難有可奉存儀に奉存候。此儀も私共より相願申に而は無御座候。如此之年柄格別之儀御座候間、右等之御取計も御座候は、一統思召通心服仕、末々通用之所も自然に解可申哉に奉存候。御尋に付、私共存之趣御達申上候事。

丑十一月

御馬廻頭

先達而奉指上候紙面に御朱書被成下、謹而奉拜戴候。段々申上候趣御承知被遊、私共存寄之趣尤之儀に被思召候。當節一統難澁之躰御推察被遊、先以御寢食不被爲安候。併私共存罷在候通、御時節柄之事故、御前幾重に被思召候共中々御救方不被爲行届、別而御心痛被遊候。乍去此儘に有之候而は、勤仕取續之程も難計躰に被聞召候に付、何とか御救方御手段も可有之候哉、何分にも遂愈議申上候様、先頃金澤表年寄中の被仰出置候。先此段被仰下、何成共私共心付之趣は聊無泥可申上候。替存寄有之者は、人別に成共可申上候。將又先達而私

共心付に而、組之人々勝手取續仕法之儀も相立置候へ共、申上候族に而は其詮も無之哉、此儀はちと御辨兼被遊候。組々面々難澁之儀も、種々様子可有之事に被思召候。彼は無油斷、私共深切に指引可仕候。尤此儀は不及被仰出候事には候得共、被爲任御序被仰下候段奉畏候。當節一統難澁之程深く御推察被遊、何と歎御救方之御手段も可被爲在哉、遂僉議候様年寄中へ先達而被仰出置候段、先以御憐愍之趣、於私共難有仕合奉存候。今般被仰出候通、此儘に被成置候而者、當暮之處必至与指支可申哉に奉存候に付、當時以之外不通用に而、及困窮指支之趣等見聞之躰申上候儀に御座候。其節奉言上候之通、何と歎御救方等之儀奉願度奉存候得共、御時節柄之儀甚奉恐入罷在候。乍去當年之儀は米價段々下直に罷成、町方金銀貸借等仕候者共及損毛に候故にも御座候哉、近來見聞不仕程之不通用に而、一統段々難澁申躰に御座候。然者當暮之儀、如何可有之哉も難計奉存候に付、先頃年寄中へ委細相達、何と歎裁許も有之候様仕度旨相達候處、御上御難澁之御時節故容易難致取扱、乍併私共内存之趣如何様に存付罷在候哉可申達与、御用番山城申聞に付、別紙之通口達書相認相達置申候。則別紙寫奉入御覽候。右紙面に相認置候通に而、外存付之趣等無御座候。町會所仕送之儀に付被仰出之趣、乍恐奉至極候。尤極難澁人之儀は、追々頭々へ申出候へば及僉議、町會所へ仕送申談取續申候。且又人々勝手向之儀は、難澁におよび候程彼是様子も有之ものに御座候故、手

斐はあやと
訓むべし

前々々指支に而も、右仕送仕候時は、難打顯斐も不申出候而は相濟兼候に付、其所へ及不申人々も可有之哉に奉存候。右之族に御座候間、存外右仕送に相成不申譯は、人々存寄も有之、且は難申出品も有之候哉、此所は如何共難申上奉存候。依之右仕送之分、當時取續指支不申候へ共、其外一統融通不仕候に付甚指支及困窮申儀、いづれにも御家中指支候之故、町方等も連々逼迫仕、當暮之所何分にも御裁判之趣無御座而は、一統指支可申哉に奉存候に付、前段之通年寄中へ相達、何とか僉議有之候様相達置申候處、先達而御仁政之趣年寄中被仰出候由。然上は此節僉議之筋も可有御座与奉存候。

一、御朱書物并御上包御印之物奉返上候。

一、青木與右衛門へ先達而奉□聽候趣申遣置候に付、此度御朱書之趣寫を以拜戴可爲仕与奉存候。

右御請上之申候、以上。

十一月十四日

十一月十八日。江戸廣德寺に於いて前田吉徳の生母淨珠院の廿五回忌法會を營む。

〔政隣記〕

十一月十八日於江戸下谷廣徳寺、淨珠院様二十五回御忌御法事有之。
但、十二月十八日御相當之處今月へ御取越御執行也。

十一月廿二日。細小の網を用ひて幼魚を捕獲するを禁ず。

〔政隣記〕

近年潟獵業之儀、微細之網等を以、小魚より捕絶し申様之仕業次第に致増長候に付、今般潟廻獵業方相改、夫々申渡候。依而御家中を始殺生人、其心得可有之候。且又川々瀬違杯、元川を勝手に堰留候族、掘すき杯と名付、小き引網様之殺生も右に准堅不致様、組・支配之人々へ嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月二十二日

横山山城

津田權平殿

十一月廿六日。足輕及び坊主の着衣に就いて令す。

〔政隣記〕

付札、御横目

足輕并坊主共等近年借上に相成、衣服も絹類致着用候躰に付、向後地・他國共綿衣迄相用可申旨等、去年申渡置候通に候。然處於江戸表、御用之筋に寄無據指支之品等有之分は、夏向絹羽織着用之儀依願承届置候。是以後者御用に付御仕着小袖等被下候分者、御仕着之品爲致着用、御貸衣類之儀も前々絹羽織等相渡候分は、以前之通被仰付候。依而足輕・小頭着服之儀は、御定之通可相心得旨、江戸表に而申渡候條、致其心得候様一統申渡候。右に付而者、平常之儀者彌以綿衣着用、分限不取失様に急度相心得候様可申渡候事。
右之通足輕等支配有之面々、并御坊主頭へ可被申談候事。

丑十一月

別紙寫之通、御用番山城殿被仰聞候條、足輕等御支配有之御面々、夫々御申渡、御組等之内右支配有之面々、夫々不相洩申渡候様御申談可被成候。尤御同役・御同席御傳達可被成候、以上。

十一月二十六日

御横目

御歩頭衆中 但諸頭役連名書

右御歩方不相當に付不觸出之。但小頭中へ者爲承知寫令披見置候事。

十二月十一日。前田齊廣、徳川家齊夫人より歳暮の祝儀を受く。

〔政隣記〕

大御前は前
田治備夫
人梅の居
宅はその住

十二月十一日爲歳暮御祝儀、中將様に從御臺様御使御廣式番之頭長谷川藤太郎殿を以、白銀十枚・干鯛一箱・御目錄御拜受。大御前様に從公方様・御臺様、上使右同頭桂山三郎兵衛殿を以、御卷物等御例之通御拜領。但梅之御居宅へ上使被越也。御前様者市ヶ谷御屋敷に就御逗留に、右御屋敷に上使有之、萬端御例之通御都合克被爲濟候段、去十四日江戸發之飛脚に申來候事。

十二月十一日。人持組三田村縫殿不謹慎を以て役儀を除き逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

十二月十一日左之通、甲斐守殿於御宅、伊勢守殿御在合、御横目指引に而被仰渡。

人持組 三田村縫殿

縫殿儀不愼之趣有之、一々可被仰渡筈に候得共、其儀は御用捨被成、定火消役并小松御城番被指除、逼塞被仰付、急度相愼可罷在候事。

十二月廿二日。江戸に於いて物價高直なるを以て扶持方を増給す。

〔政隣記〕

十二月廿二日、左之通於江戸表左京殿被仰渡、青木與右衛門等より廻狀有之。付札、青木與右衛門・中川平膳に

此表米價は下直に候得共、諸品は高貴に候。詰人一統格別致省略、質素に相暮候得共、金相場迄も當年過分に引上、彼是以別而致難澁候。例年は分限に應じ、宅々より才覺を以取寄、夫々仕拂方引足仕來候得共、當年は御國表米直段下直、其上才覺も一圓不致調達、旁以此表之諸拂方必至与指支難澁至極之段、各見聞之様子先達而より段々被申聞候得共、一統承知之通、當時御逼迫至極之御時節に候得ば、前方より金澤表へ申遣候而も、中々御救之詮議方も一圓無之事に候。然處此節に至、段々に指支候趣共猶更被申聞、諸方よりも申出、誠以無據相聞候に付、委曲相達御聽、不時成御貸渡等可有之御時節に而は無之候得共、御逼迫之内ながら格別之趣を以、御歩並以上一人扶持に金二步宛御貸渡、足輕以下には一人金二步宛被下之候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。且又諸頭中へ演述、組等之人々にも申聞候様可被申談候事。

丑十二月

十二月廿四日。諸士の困窮するものに町會所仕送銀の借用を許す。

〔政隣記〕

十二月廿四日、當暮之處世上銀支に而不通用、暨米下直等に付頭々より依頼、左之通町會所仕送銀之内借用貸渡之儀、御勝手方甲斐守殿等就御聞届、頭々より借受、夫々令配當候事。

平士 八百石以上、六百五十目宛。七百石より、六百目。六百石より、五百五十目宛。

五百石より、五百目宛。四百石より、四百五十目宛。三百石より、四百目宛。二

百五十石より、三百五十目宛。二百石より、三百目宛。百五十石より、二百五十

目宛。百石より、二百目宛。

諸小頭新番與力 百五十目宛。但、新番小頭者平士割之通り。

御歩御知行被下置候分百二十目宛。

御切米之分 百目宛。

十二月。越中古國府勝興寺の住僧が江戸築地門跡に預けられたるを以て、能登の門徒の騷擾を警戒せしむ。

〔筒井舊記〕

古國府勝興寺儀、前月廿五日寺社御奉行脇坂中務大輔殿に御呼出之上、翌曉築地門跡に御預に相成候。勝興寺與力之寺庵等致上京、於本願寺邪正相糺度旨先達而願出候趣茂有之候得共、右御預に相成候趣承傳候はゞ、本願寺に人多に馳登り及狼藉、又は江戸表に拔々に罷越候者も可有之哉難計儀に付、猶更御縮方之儀嚴重に可申渡旨被仰出候段、江戸表より申來、則寺社奉行に申渡候條、御郡方等門徒之者共にも、右躰之族可有之茂難計候條、御縮方之儀嚴重に相心得候様、御郡奉行等可被申談候事。

右之通御用番年寄中より被申談候條、寫相達候條、被得其意、夫々不相洩様嚴重に可被申渡候、以上。

十一月

御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

右之通申來候條、得其意、門徒共有之候はゞ、猶更無油斷制方嚴重に相心得候様可申渡候、以上。

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

文化三年

正月朔日。前田齊廣登營して年頭の禮を行ふ。

〔政隣記〕

正月元日。今朝六時御供揃に而御登城、九時御歸館、年頭御作法都而御例之通之旨、江戸表四日立之飛脚十七日來着告來。

正月八日。馬廻頭等町會所仕送銀の借用を許されんことを前田齊廣に訴ふ。

〔御親翰并言上其外内密留〕

乍恐謹而奉言上候。去暮町方不通用等に而、御家中一統指支候躰に付、先達而見聞之趣等奉申上候處、被仰出之趣御座候得共、御上にも御難澁に付、御救方之御手當無御座、乍御心外右之不被及御沙汰候旨被仰出候段、御用番甲斐守申渡候へ共、段々及月迫別而調達等出來不申、必至与指支候に付、其後彼是甲斐守に相達候へ共、幾重にも難及裁許旨申聞候に付、左候者去年之趣を以町會所調達銀爲組用借受、少銀に而も貸渡申度之旨申達候處、調達銀も難

承届、是非指支候は、町會所仕送銀之内借受、指支之人々に少々宛成共貸渡候様申聞候に付、右銀子貸渡候趣等舊臘奉達御聽候通に御座候。去年米價下直等に而、世上不通用に相成、一圓才覺相調不申、一統指支候故奉達御内聽、且年寄中へ再往存底之趣等相達申儀に付、平士に限り不申、小身之人持、頭分之儀も指支候面々は致借用申事与存罷在候處、頭分は一圓承届不申候條、爲心得申談置候旨甲斐守申聞候。此儀私共會得難仕候。御上思召を以御救等に而御借知被返下、又は御貸銀被仰付候節は、頭分以下或何百石以下杯与有之儀も御座候。今般借用銀は町方之不調達に而、地盤難澁与申程に無之而も、覺悟相違仕候而行當り指支候故之儀に御座候へば、頭分も借用之心得に罷在候處、前段に奉申上候通甲斐守申聞に付、頭分一統不信服に罷成、彼是申合候儀に御座候。然所御小將御番頭爲組用右銀子致借用、右兩役之面々に貸付申候。此儀は甲斐守より頭分は借用相成不申と之儀承及不申已前、夫々貸渡申由御座候。仍而定番頭支配・定番御馬廻御番頭より同様借用致度旨、定番頭に申出、甲斐守に相達候處一圓承届不申に付、定番頭甚不信服に而、最早御役儀も相勤兼候旨申聞候段承及候に付、右様之儀に御座候而は甚不御爲御儀に奉存候に付、定番頭彌其心得に候者、其段御用番へ心得可申達与奉存、舊臘廿六日同役共申談御城に罷出居申候處、同日定番頭より段々存念相達候へ共、頭分借用承届候而は被仰出之御趣意与致相違候間難承届、大小將

御番頭等ハ貸渡候儀ハ、甲斐守にも一圓不致承知儀、御小將頭手前に而爲支配用借受貸渡候儀に候。只今定番御馬廻御番頭ハ貸渡候儀承届儀、不奉伺而者難相成候旨甲斐守申渡候間、御番頭中ハ夫々申渡候旨定番頭申聞候。併組外御番頭・小松御馬廻御番頭ハ、御小將御番頭等致借用、外頭分不相成儀甚不心服之躰に而、誓詞御前書御條目にも、金銀米錢指引合之儀不埒等無之可相心得旨毎月爲讀聞候儀、爲其頭者指引合等隨分可成□事の立不申様可相心得候所、不通用に而指支、其上右仕送り方銀子も不致借用候而者、指引等指支可申候。乍去平士ハ貸渡有之候得共、頭分之儀は聞届無之申儀趣意相分候へば、格別左様之儀無之而者難致會得候。私共心得いかゞ候哉杯与相尋候而々も有之、返答も致當惑候族。右に准諸頭中不信服に而、彼是申合候躰に見聞仕候間、今般町會所仕送り銀頭分一圓無之旨、夫々願候人々ハ申渡有之候處、大小將御番頭等御小將頭より貸渡候に付、諸頭中彼是申合不信服之躰に相聞え候。諸頭不信服に有之候而ハ、押移り下々迄不信服に可相成、左候而者不御爲御儀与奉存候に付、心付之趣御用番へ相達置候處、翌廿七日甲斐守より申聞候者、昨日御爲不可然旨同役共より相達候。右ハ不輕申聞に付、甲斐守存寄に而裁許も致兼候に付、外年寄中等加判之面々今日出席會議候處、今般町會所仕送り銀不致借用候に付、頭分不信服等之儀何も會得難致候。平士之儀承届候へ共、頭分之儀は常々心得も可有之儀、行當りか様之銀子借用

可成以下本
のまゝ、

之儀有之間敷儀。頭分・平士之違ハ此所之旨申聞候へ共、町會所仕送銀貸付候趣意ハ、當年米價下直暨町方不通用に而、一統指支候に付而之取扱に御座候へば、頭分・平士之差別は無御座儀与奉存候所、頭分之儀は前段申聞に而承届与有之候而ハ、彌不信服に可相成儀に付、重而同役共一統罷出、右之趣申達、畢竟か様に御座候而、不信服に相成候而ハ不御爲儀故、心付之趣段々相達置候儀に御座候。私共より相達候儀与趣意相達仕段申達置申候。然所表小將御番頭支配之人々へ貸付候儀、御用番ハ相達候處、御横目之儀ハ難承届旨申渡候へ共、段々存念之趣相達候哉、御表小將横目之儀承届候躰に承候。夫に付舊臘廿九日定番頭一統罷出、先達而御大小將御番頭等之外ハ頭分借用之儀承届不申旨、御用番申聞候處、御表小將横目承届候躰。左候而者支配之御番頭ハ申渡候趣致相達候旨、段々存念之趣種々申達候へ共、一圓承届不申に付、支配御番頭ハ申渡置候趣致相達候而者、御番頭ハ重而可申様は無之に付、定番頭三人共甚存念も有之躰に而致退出候所、佐藤勘兵衛、甲斐守自分に逢可申旨に而逢候に付、勘兵衛より段々存念相達候處、尤に候、依而春に相成候ハ、可承届旨申聞候故、右存念止候旨申聞候。定番頭支配御番頭借用承届之儀承及、組外御番頭等にも又々申出候而者、寺社御奉行支配之頭分も彼是可申發与奉存候。左候而者彌諸頭不信服に可相成与奉存候。私共底意不御爲御儀与存付候儀に付、彼是及懸合申候間、始終之趣乍恐奉達御内聽置候。

一、青木與右衛門儀は、其御表に相詰罷在候儀に付、名前相省き申候、以上。

寅正月八日

御馬廻頭十一人

正月八日。是日以後越中の百姓等、金澤西本願寺末寺に參集し藩に請ふ所あらんとす。

〔文化雜記〕

一、文化三年正月古國府勝興寺配下の門徒共、當八日より追々罷越、西末寺の内に罷在候旨に付、御横目足輕山村直右衛門等兩人申渡爲承合候處、右之通追々罷越、翌九日夜迄には千六百人許末寺の内に罷在、猶追々罷越候旨願之筋有之。右之通候故がさつ之爲体等者無之、隨分穩便に罷在候由に候段、右直右衛門申聞候に付、御横目足輕彼筋の繁々見廻候様申渡候。

一 前段得御意候勝興寺配下之門徒之百姓共等、西末寺並照圓寺の相留り居申者、當十一日之所に而者、壹萬人許も罷在候様子に候段、御横目足輕申聞候處、翌十二日五半時頃より追々引取り、晝九時前迄に、兩寺に罷在候者共不殘引退、越中筋の罷歸候段、爲相廻候假御横目足輕中村喜太夫等見届候上、御殿の罷出申聞候に付、其段御用番又兵衛殿の御達申候。右之通引取候に付、御横目足輕相廻り申に不及旨申渡候。

正月十一日。金澤西本願寺末寺に參集したる越中の百姓等に退散を命ず。

〔郡方御觸〕

願之趣有之由に而、僧俗西末寺の人多に相集居候躰に候。御郡方之者共願之趣、右末寺の罷出申達候筋に而者無之、假令尤成儀に而も、筋合違候而者取揚候事難被成候。右願之趣有之候は、其役筋の神妙に願出可申儀に候條、此段申聞、早速致退散候様可被申渡候事。

願之趣有之由に而、御郡方之者共西末寺の致來集候由に付、御用番年寄衆より御覺書を以被仰渡候條、得其意、幾重に茂相宥、金澤表の罷越不申様可取計候、以上。

寅正月十一日

菅野兵左衛門

鳳至郡十村中

猶以自然取計方不相用、何と歎申儀も有之候は、喜三兵衛急速出府可有之候、以上。

勝興寺門徒共願之趣有之旨に而、西末寺の人多に罷出相詰居候躰に付、別紙之通御用番又兵衛殿より被仰渡候之條、得其意、幾重にも品能申教、爲立退可申候。猶委曲御郡奉行より茂申渡候條、夫々取計可申候、以上。

正月十一日

賀古橘江不在合

澤崎源太郎

〔政隣記〕

正月十一日、今日御用多年寄中等下城及暮。是西本願寺宗意相違之儀に付、古國府勝興寺江戸表に罷出候一件に而、越中國門徒之族去八日より金澤西末寺に群參、今日に至候而は萬人餘に相成。

〔異本三守御譜〕

文化三丙寅年正月十一日、一向宗派門徒越中國百姓金澤西末寺に集、不日して離散す。是先達て越中古國府勝興寺自得の安心不束の儀に付江戸へ被呼召、寺社奉行脇坂中務大輔宅へ被呼立詮議候上、公邊より逼塞被仰付、右一件相濟候に付、國恩を謝せんが爲金城大手迄百姓共來りて拜をなす。序に西末寺へ來る也。暫時そう動すれ共追付退散す。

脇坂中務大輔殿方にて勝興寺への書立

勝興寺關郁儀自得の安心は本山之宗意に背不正儀に付、御吟味之上回心は致候へ共、一ヶ國同派之寺院を支配致し、殊に連枝之身分に候上は、宗意教化方祖師相承に不背様可心懸處、配下之寺院共講釋いたし候を承り、既に二途に在之上は、本山へ申立取計方も可有之所、其分に致し置、宗意安心心得違罷在候段不束に付逼塞被仰付。

此時西本願寺連枝河州久寶寺村顯證寺外に廣教寺不届に付、本山へ御預永押込被仰付。其外江州彦根明性寺追院被仰付事別記あり。

〔御親翰并言上其外内密留〕

今般古國府勝興寺宗旨之儀に付、江戸表に被致出府候故、右門徒共等騒合候由。然處此頃御當地西末寺に、越中筋等百姓共追々相集、九千人計にも及び願之趣申出候處、相願候儀御會議可被成候、何れにも致退散候様、御郡奉行より十村を以爲申渡候由。仍之百姓共難有とて、尾坂下に罷出奉拜、退散いたし候由に御座候。右之通末寺へ九千人計も集り候處、一統作法能、相互に嗜罷在候躰に而、客殿并書院・小間等に致屯居申候處、疊・障子・張付杯少も損所無之、且は數千人之事故兵糧行届兼候處、是又互に心を添平等に給之候由。餘寒者強、土民共之儀に候へば、酒杯相用ひ寒さを凌可申哉に候處、一同に申談罷在候哉、一人も酒を呑候者も無之由。於末寺年々十一月十七日佛事供養之節、大勢致群集甚騒敷候へ共、此頃相集居候中、右佛事之時分は夥敷人數ながら、常よりも物靜に有之候由承及申候。此度勝興寺宗論一件は公邊之御會議故、勿論當御家の拘候儀は無御座、仍之土民ながら其處を奉恐、寔に禮儀を盡罷在候儀に被存申候。然ば願之趣御會議可被成候條、歸村可仕与御郡奉行申渡之儀は、尤各様の御達申、御指圖も御座候に付而之事与奉存候得共、勝興寺浮沈之儀は、於公邊御裁

八萬人は越
中の西派門
徒の數歟

判等次第之儀に御座候間、各様にも御不定に可有御座儀。乍去無御據趣公邊に被仰達方等御座候故にも候哉。若此上勝興寺異變之趣等於有之は、右門徒等重而及騒動可申、其節は右御郡奉行より爲申渡候趣も有之儀故、御上を奉恨にも至り可申儀に奉存候。既右百姓共願之趣御聞届無之候へば、投身命江戸表へ打出可申杯申合候由致風聞候間、御僉議可被成与承、致安堵歸村仕候。然所勝興寺異議候而者、我々江戸へ罷越不申故如此与、必御上を可奉恨儀に御座候。右門徒共等凡八萬人計有之由。越前よりも右宗旨西方之者末寺に相集候時分、此表へ罷出可申与騒ぎ候へ共押留有之由。將又河州・江州等西方一向宗之者共も、此方様御領内勝興寺之儀は格別に付、此方様より公邊に御願之筋等有之宗論負には相成間敷旨、夫を力に罷在候由。虚實は難相知候得共、此間群集之内にも、江州之者餘程罷在候杯与も風説仕る由に御座候。先指當り此一件落着不仕内は、農業等にも相成不申旨申罷在候由、旁以一大事之儀に奉存候。尤各様御油斷者御座有間敷儀は、勿論可被遂御詮議候へ共、急切公邊に被仰達方之御評議御專用に奉存候。私共愚案に相考候者、御領國において勝興寺之儀は御様子も有之儀。先以今般御城下の數千人罷出及騒動候は、暫時江戸表へ相知居可申、右等之趣を以御國政に指障候に付、先勝興寺歸郷在之、御僉議之筋暫御預り被成度与、幾度も御願被成候御事に而も可有御座候哉与奉存候。左候へば此度公邊に御達方に而勝興寺歸村被致候へば、萬

代迄も御國威之程難有、御領分不及申、他國之儀も右宗旨之者は御當家の奉慕様に罷成可申候は顯然に候儀に奉存候。然ば勝興寺及異事候へば右に準可奉恨、雲泥之儀に御座候に付、是等之趣如何敷、御聞受も恐入儀に御座候へ共、前條之次第見聞仕候而者寢食不易奉存候に付、不得止事御達申上候事。

正月十六日

御馬廻頭

〔累年雜記〕

一、正月六日比より越中同行金澤西御坊へ詰申事、凡一萬六千人程与申事。風聞には二萬三萬と申也。是願之趣、勝興寺様早速御歸國有様、左右なく者境之廻書被仰付可被下候、江戸表へ詰申度之事。金澤寺社所者不申及、執役所茂混雜仕ると申事也。願所は寺社人は郡故、御郡御奉行より石川・河北十村中を被遣、段々詮議有之所、願之趣立紙差出し申所、願之趣早速御上へ相届申候條、早速御當所退相歸り申様に而、十日比より何も罷歸り、迎も前代未聞之事也。元來法義區々也。

正月二十日。鳳至郡總持寺燒失す。

〔金龍公記史料〕

正月二十日夜能州惣持寺五院中如意庵失火。坊舎盡燒。此寺四百餘年無災。今之燒亡云。

〔又新齋日録〕

文化三年正月五院之内如意庵より出火、惣持寺不殘焼失、普藏院・洞川庵迄相殘。焼失之ヶ所左之通。

大門の間數
は書損なる
べし

- 一、大門二間三寸四方。
- 一、小門桁八間梁二間五寸。
- 一、山門桁八間半梁四間。
- 一、山門廻廊四間半二間左右に有之。
- 一、廊下山門より大庫裏迄十八間。
- 一、浴室桁八間梁四間。
- 一、大庫裏桁十四間四尺梁十三間。
- 一、同玄關二間半四方。
- 一、廊下大庫裏より洞川庵迄二十一間半。
- 一、廊下大庫裏より侍者寮迄四間。
- 一、兩侍者寮桁十間梁八間。
- 一、廊下侍者寮より普藏院迄二十一間半。

- 一、廊下現方丈登り三間半。
- 一、現方丈桁五間半梁四間。
- 一、同二間四方入口板間。
- 一、客殿桁十七間半梁十六間、玄關廻廊三間五尺。
- 一、廻廊桁三間五尺梁三間四尺、客殿左右に。
- 一、廊下箱組四間に二間、客殿より佛殿の取附。
- 一、佛殿九間四尺四方。
- 一、無經塔二間四方。
- 一、觀音堂九尺に二間、三方縁有之。
- 一、廊下佛殿より禪堂迄折廻り十四間半。
- 一、禪堂六間四尺四方。
- 一、禪堂庫裡桁五間半梁二間。
- 一、廊下禪堂より維那寮桁九間梁七間、玄關二間四方。
- 一、廻廊維那寮より妙高庵迄二十一間半。
- 一、妙高庵桁十三間梁十一間半。

- 一、同玄關二間半に二間一尺。
- 一、短廊三間に五間。
- 一、同庫裡桁十二間半梁六間半。
- 一、廊下妙高庵より傳法庵迄十間。
- 一、傳法庵桁十二間半梁七間半。
- 一、同玄關二間一尺四方。
- 一、同短廊二間に三間半。
- 一、同庫裏桁九間半梁四間。
- 一、廊下傳法庵より如意庵迄二十五間。
- 一、如意庵桁十一間半梁八間。
- 一、同短廊二間に三間。
- 一、同玄關二間一尺四方。
- 一、廊下如意庵より淨頭迄十三間半。
- 一、淨頭桁八間梁三間四尺。
- 一、廊下淨頭より山門廻廊迄四方。

- 一、鐘樓堂桁三間梁二間六寸。
- 一、收納藏桁五間梁二間半。
- 一、材木藏桁十間梁三間。
- 一、作事小屋桁十一間梁四方。
- 一、鎮守白山宮拜殿桁三間梁二間半。

右之通致燒失候。外に二十程坊燒不申候。

正月廿一日。江戸に於いて大聖寺侯前田利考の喪を發す。

〔政隣記〕

正月廿七日、於江戸表飛驒守様御滯之處御大切之旨、一昨二十六日申來に付、從相公様爲御見廻早打御使御表小將松平康次郎、今日四時過發出、且左之通御廻文出。

附、實は舊臘二十五日御卒去与云々。

飛驒守様御氣色御滯之處、不被爲叶御療養、去二十一日御卒去之旨申來候。依之諸殺生・普請・鳴物等、今日より明後二十九日迄三日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配之人々は可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々者、其支配はも相達候様可被申聞候事。

相公は前田治備にして在金澤なり

右之趣可被得其意候、以上。

正月二十七日

村井又兵衛

正月廿七日。徳川家齊、前田齊廣に鶴を贈る。

〔政隣記〕

正月二十七日上使御使番大久保新八郎殿を以、御鷹之鶴御拜領、御作法御例之通御都合能被爲濟。

正月廿七日。前田齊廣、足輕・坊主・小者等の作法を正しくすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

足輕・坊主・小者於此表御屋敷中、頭分以上之人々を對し不法之者共有之躰に候。以後は急度相扣致時宜、尤雨天之節はあしたぬぎ、作法よろしく可致時宜候事。右之通被仰出候條、夫々可被申渡候事。

寅 正月

右廿七日大組頭等并割場奉行の奥村左京殿被仰渡。

正月晦日。大聖寺侯世嗣前田利之を弔問する爲の使者金澤を發す。

是月は大盡なり

主水は前田利之

〔政隣記〕

正月廿八日、飛驒守様就御卒去、大聖寺主水殿等を爲御悔、從御兩殿様御使番三浦助右衛門被遣候段今日被仰渡、同晦日發出二月三日歸。

同日右に付、御代香御使者御馬廻頭中村九兵衛を今日被仰渡、三月三日發出、同九日歸、御香奠白銀十枚、從相公様は白銀五枚也。

二月二日。年寄中等の關川・碓氷兩關所を乗物にて通過することを許されたる報至る。

〔毎日帳書抜〕

二月二日

一、越後國關川・上野國碓氷兩御關所、年寄中乗物に而乗通之儀、御關所懸り御目付土屋帶刀殿へ御達置被成候所、御老中方へ御伺相濟、向後乗物に而乗通指支無之様、御關所預りへ御達置被成候旨に候。此段被仰聞候間、土佐守等へも可申達旨被仰出、御付札物被渡下候付、當座之御禮申上旨等左京より申來候事。

二月二日。他國の商人にして米穀を買入れ漕運せんとする者の便宜を妨

げざらしむ。

〔筒井舊記〕

御拂米并御家中收納米、他國旅人等買受諸浦積出之節、於其所に彼是申立等を以積渡方爲及遅々候躰に而、買受人手前において費用多相懸り迷惑之筋有之、自ら御拂米直段等指障りに相成、第一御不益之筋、暨御家中之人々茂同様之趣に候條、以來右躰之族少茂無之、嚴重相心得、若御藏所に罷出候役人之内、無謂致遅參候儀於有之者、夫々及斷候様急度可被申渡候。

一、右積出之節、諸雜用銀之分懸り物与名付、買請人手前より爲相拂候由に候。右米積受に向出帆迄之間、何々之品何程々々取受候儀に候哉、是迄取受來候分聊無間違委細に相調、帳面に仕立、積出之ヶ所々々より不洩爲書出、當月二十日限り取立、各加奥書當場に可被指出候、以上。

二月二日

御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

二月四日。前田齊廣、西本願寺派門徒の處置に關して令す。

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

二月二日

一、今日に而茂明日に而茂、御前御透次第左京儀御前を罷出申度御座候間、御序に申上候様中務の申達置候處、九半時前十郎左衛門を以被召候旨被仰出候付、於御居間書院御前を罷出、左之來狀兩通共持參入御覽。紙面之通申來候。右僉議之趣は事立候儀に而御座候へ共、金澤において左様之僉議も可有御座哉。前月廿四日出被仰出之御趣意通り申遣、右被仰出之趣申渡も有之候は、左而已事立候様成僉議之處に者至り申間敷哉にも奉存候へ共、唯今にも勝興寺手前、脇坂殿より被仰渡方により騒立候儀も可有之哉。其所者未前之儀に而難計御座候へば、自然之時之ため右様之御手當いたし置候儀は、金澤表僉議之通に而も可有御座哉。猶更被仰出次第奉心得旨申上候處、いか様左様にも可有之哉、隨分穩便取計可然事に候。猶御考可被遊候。いづれにも金澤表の返書相調可入御覽候。將又相公様御尊被爲在候儀に付而、又兵衛よりの紙面も入御覽候處、御丁寧之被仰出与思召候旨等御意に而、來狀は被遊御留置、追而可被返下候旨御意に付、及御請退去之事。

西方一向宗安心一件之儀に付、先般勝興寺御呼出有之、猶又御糺明之上近々に者浮沈之御取捌にも至り候はんと之儀に付、御領國之内越能之民間愚癡文盲之者共、今度御當國西末寺の

人多に集、寺社奉行杯より届候は一萬も有之由に御座候。然處右人數籠り居申には似合不申、殊之外人々行儀正敷、尤無用之高聲も仕不申、質素至極に而、夫々引退候跡損處等も無之、畏り居申候躰之由、先々より申聞候。尤其時々町飛脚急便を以言上候通に而、先是迄之處は可也に取治り居申候。尤此末迎も、御算用場奉行等より段々申渡候趣も有之候間、左而已之儀は有之間敷様にも存候へ共、斯く申時は、勝興寺儀は安心に本願寺殿被心得方与相違之儀も有之躰に候へば、假令無難に御請印形出來与申候而も、是迄之處不被改候而は、印形は成不申事与存候。又印形無之時は、如何躰に被至候茂可難計、又公邊杯も是程に被仰渡、御手入申儀に候得者、不被改而は叶申間敷、改り申時は必重而騒立申儀眼前之儀に被存候。然ば幾重に仕候而も、騒申時は御國威を以御願無之而者不被爲叶、假令御國威を以御願有之候而も、御取揚者無之事与仕候時は、騒立可申候。其騒立様は、彼越・能等之百姓不殘境御關所等々相向、品に寄打破り、江戸表脇坂殿に相向可申与申合居候由、粗評判仕候。雜説たり共、如此儀は甚だ心懸りに被存候事に御座候間、先境は足輕に而も増詰被仰付候半敷与存候へ共、一萬之人數、百人や百五十人之足輕何之益にも立申間敷。自然如此時は、享保十九年御代官所惡黨者有之節、御人數申來候節之御手配之振を以、御先手物頭弓・筒二組足輕召連、旅立之様に而出立、彼地を相固め、心得方之儀は、尤御關所之御作法も可有之候得共、一人

も通申間敷候。併若与風人數多押破り候はん躰にも候はゞ、弓・鐵炮にて程能打懸、品により暫御關所閉申儀も可有之候。此儀も苦ケ間敷と及差圖に而可有御座候。尤脇坂殿は直に向ひ候而、直願直訴仕候与申儀に可有御座候へ共、江戸表は不伺而者一人も通申儀は相成不申与申入、夫より御使番二人之内一人直に江戸表は相向ひ、委曲及言上、此日數之間にも十日・廿日は相延可申候間、自然右様之貌に相成候時は、如斯心得罷在可申哉与存候。此表より時々御使番等に而爲承候に而可有御座候。其日數之間は、泊近郷之御藏より兵糧申付、飢に及び不申様に相心得可申候。其内自然と人數屈し、御國恩之儀存付、廻心仕候者共、追々爲退散可申候。若人數多く相成、危き躰にも至り候者、夫々申渡、御馬廻頭組共を引連罷越候様、并御醫者も差遣申に而可有御座候。

一、豫而拙者共は、隣境異變之節拜見仕候様に与之一箱被渡下、奉請取罷在候。尤此内申談拜見仕に而可有之候へ共、此度之儀は誠に前段之處は者至り不申儀与存候。乍併若萬々一か様に相成候時は、拙者共申譯も無之儀故、申合候儘相窺候間、猶此節心得方等之儀御下知も被下候様に与奉存候付申進候間、早速被入御覽候而、其表よりも急便を以御申越可被成候。依之今日出町飛脚指出、道中早飛脚步に申渡候。手先々々より申聞候趣も不一樣候故、拙者共に而者難澁至極に罷在申仕合御座候、以上。

正月廿四日

左 京 様

又兵衛等四人 判

〔於江府御親翰帳之内書拔〕

二月四日

一、左之御親翰以十郎左衛門被渡下。

御着札、奥村左京殿

紙面令披見、委細令承知候。か様之節境目相固め申儀、左も可有之事に候。しかしはやぎり申時は却而民心を挑き、後害可有之、元來法度之事にも候處、先以黨を組、殊に關所杯を押し破り可罷通所存之儀は、不法之至りに候。すべて國民之存亡は主將之采幣に有之事に候得共、上之下知を能々畏候て、次に宗意之儀可存儀に候所、兼て急度申渡候に相背き、關所杯押し破り、江戸表に罷越との儀は、先以不届至極沙汰之限りに候條、右等之趣得与相辨へ、夫々歸郷仕候様に、罷越候先手等より深く利害を説きかせ、何分歸郷いたし候様取計候儀肝要之事に而可有之候。不得止事時は無是非儀に候へ共、矢玉を以程能く打拂与有之儀は、誠に大事之處与存候。少与徒黨に而放し候と申事は不應様に茂存候。旁容易に矢玉を用ひ申儀に而者有之間敷候。何卒穩便に相さとし申様有之度ものに候。假令一旦打はらひ申候とても、

又集り申は眼前之事に候付而、手あらく取扱、民心之愚癡を猶以かため申様に相成候而者、無其詮事に候間、なりだけ國民之儀は撫育を第一与いたし、ケ様之節猶更國恩を思ひ付、是迄よりも親しませ申様に有之度事に候。又取扱により民心疎くなる事も可有之哉。是はいやなる事に候。只々幾重にも利害を説きかせ、民心を治め申儀專要に被相心得可然候。乍去段々利害を申入候とも、不致承引場に至り、不法之族も致出來儀、誠不得止事、鑓・刀を以治め申程之所に至り申時は、何れにもか様之砌先境目を嚴重にいたし置候儀は勿論に候。尤臨機應變之儀は難申極候條、尙各無油斷可被相心得候。先手前存寄之趣あらまし相調差遣候、以上。

二月四日

年 寄 中

二月四日。金澤城土橋御門の工事關係者に賞賜す。

〔政隣記〕

二月四日

一、土橋御門今度御普請就出來、今日右御用懸之人々を拜領物被仰付、於御臺所御酒・御吸物被下之。但物頭並御作事御用淺加作左衛門は生絹三疋、御作事奉行は同二疋、同御横

文化二年十一月十日
條参照

目には染物二端宛被下之。

二月十二日。越中の西本願寺派門徒に、その願書を藩侯に執達したるを以て敢て騷擾する勿らしむ。

〔郡方御觸〕

西方之一向宗安心之儀、當時於公儀御裁判中之處、是迄之宗意及改變候様致傳聞候躰に而、勝興寺與力寺を初追々願之趣書附指出、西末寺に茂御郡方之者等多人數罷出、願之趣申立候旨に候。元來宗意之儀者御國政に不拘儀に候得者、彼是公邊に被仰立候筋に而者無之、於御上御難題成儀に候得共、願書御取立之上者御達方可有之候。乍去公儀御裁判之程者難計に候。若此上御裁斷有之候は、其御趣意能致熟談、猶會得難調願之趣茂有之候は、其筋々の穩便に相願可申候。左候は、其筋々より猶又御達も可有之候。御裁斷之様子及傳聞、其御趣意茂不致會得、猥に騷々敷儀決有之間敷候。御裁判之上たり共、願之趣者品により年月を経候共可被爲在御達方候。惣而公儀御裁判之品に候處、御國方に御難題之儀願出候而已ならず、黨類相催御領内爲及騷亂候儀者、無勿躰次第沙汰之限に候。此上右様成儀有之候は、棟取之者等御糺明之上、急度可被仰付候。

右之趣被得其意、寺庵を初末々迄一統能致會得候様可被申渡候。此段可申渡旨、江戸表より

申來候事。

西方一向宗安心之儀に付、御郡方門徒共願之趣有之、格別之御詮議を以御取揚、夫々可被遂御詮議旨被仰渡、則江戸表に御達有之、以來心得方等之儀、別紙之通御用番年寄中より被申聞候條、被得其意、此以後聊も御趣意之儀心得違無之様、末々迄綿密に可被申渡候、以上。

二月

御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

別紙御用番御覺書、御算用場添書を以被申談候。先以於江戸表夫々御達方有之御様子、何茂難有奉存儀、以來被仰渡之通急度可奉畏候。此段不相洩様綿密に可申渡候、以上。

寅二月十二日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門

江上清左衛門

吉田兵馬

能州四郡御扶持人・十村中

二月十四日。學校に於いて助教・讀師等缺勤の場合の手續を改む。

〔政隣記〕

二月十四日、左之覺書學校御主附横山山城殿御渡之旨等、如例定番頭御用番佐藤勘兵衛より廻狀有之。

付札、定番頭

於學校助教・讀師等被仰付置候無息之人々、氣分等相滯學校に罷出不申節、是迄は學校頭に相届、身當り頭には相達不申様子に候得共、以來は父兄等身當り頭にも相届、且病氣等之人々行歩願等之儀も、尤頭・支配人の相願可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々に被申渡、組等之内裁許有之面々は、其支配にも相達候様可被申談候事。

寅 二月

二月十四日。諸士の道中往來に關する心得を示す。

〔政隣記〕

道中繼人馬之儀に付、道中御奉行井上美濃守殿より段々被仰渡之趣有之に付、御家中之人々以來下道中等往來之節、一日人足十三人・馬十三疋より多繼立難相成候。依之江戸表等に都而罷越候人々、宿繼人馬高於會所引しらべ申筈に候間、發足之日限兩三日先相極、先觸寫

に頭・支配人印形之以添紙面、前廉會所に出指、會所より差圖次第可致發足候。且又宿人馬請取高、是迄區々相成來候舛相聞候條、猶更御定之通不分明之儀無之様可相心得候。

一、一人に而宿繼人馬十三人・十三疋より過し申面々者、其段道中御奉行に御届有之候條、早速可及斷候。

一、右之通に順能致發足候而も、道中川支等に而逗留有之候得者、夫より先不順混雜にも可相成候間、人々相心得、追先觸に日附割附いたし、何々に而逗留与申儀書顯、逗留宿問屋に相渡、尤追先觸寫江戸會所無間違差出候様可相心得候。

一、御參勤御往來御供人、并御供代之人々、荷物多町飛脚所に可指出處、是又人馬數前段之通故、兩三日にも分け可爲致發足候。依而附出方不同出來之儀難計候間、荷物送手形并請符に日附割附いたし候而可相渡候。

右之趣被得其意、組・支配に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月十四日

横山山城

二月廿六日。魯西亞船の來着するものあらば諭して退去せしむべき幕命

を傳ふ。

〔筒井舊記〕

先達而おろしや船長崎に致渡來、通商等之儀相願候得共、難相用筋に付其旨申諭、先年與へ置候位牌茂取揚之、以來渡間敷旨申渡候。再渡は致間敷候得共、此後萬一漂流に事寄乘渡、何れ之浦方に船を繋ぎ申間敷物にも無之候間、異船と見請候は、早々手當いたし、人數等指配り、先見分之者指出、得与様子相糺、彌おろしや船に無相違相聞え候は、能々申諭、可成丈け穩に歸帆いたし候様可取計候。尤實に難風に逢、致漂流候様子に而、食物水薪等指支、直に歸帆難相成次第に候は、其品々相與へ可為致歸帆候。且何程相願候共、決而上陸は不為致、歸帆迄は番船附置、見物等も相禁、其段品々可有注進候。尤再應申諭候而茂相拒、不致歸帆及異議候は、時宜に應じ不及伺追拂、其旨可申聞候。右躰之始末に至り候而は、諸事寛政三亥年異國船之儀に付相觸候趣に准じ取計可申候。右之趣萬石以上之面々、并其以下に而も、海邊之領分或は知行所有之面々、不洩様可被相觸候。

正月

青山下野守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀は井上美濃守方に可被申聞

候、以上。

正月廿六日

大目附

松平加賀守殿 留守居中

おろしや船之儀に付、從公儀相渡候御書付二通、御用番年寄中被相渡候條可被得其意候、以上。

二月廿六日

御算用場

高田彌左衛門殿

菅野兵左衛門殿

別紙之通おろしや船之儀に付、從公儀相渡候御書付寫等一結三通就到來、指遣候條、面々組下ぬ夫々不相洩様一統申渡、右躰之船見掛候は、本文之通急速可及注進候、以上。

寅二月廿八日

高田彌左衛門

菅野兵左衛門 不在合

能州四郡御扶持人・十村中

二月。前田齊廣、物價高直なるを以て歸國御供人に旅費を給す。

〔政隣記〕

付札、組頭

當御在府中米價は下直に候得共、諸品は高貴に付一統難澁之躰に候。當時御勝手御逼迫之儀に候得共、格別之趣を以、今般御供人の一人扶持に金二步宛被下、外に二步宛御貸渡被成候條、精誠致勘辨、旅用不指支様相心得、御供可仕候事。
右之通被得其意、組・支配之人々被申聞、組等之内裁許有之人々は、其支配にも相達候様可被申談候事。

二月

三月二日。能登に於ける幕府領百姓と加賀藩領百姓との縁組手續を通牒す。

〔筒井舊記〕

御預所村々々御私領村々々縁組之儀に付、先達而兩御役所御連名之御觸御紙面相廻り、夫々御承知与奉存候。就夫右縁組願之儀は、本人願書付に村役人加奥書、裁許宛所に相調候而爲指出、裁許奥書兩御役所宛に仕指上申儀。尤御預所村方右縁組申合候者より茂、夫々御預所御役所願出候得ば、夫々御詮議之上御聞届被下候旨被仰渡候間、左様御心得、縁組申合候者より御預所御役所願出候様爲談合候は、辨方可宜儀与奉存候。此狀先々御順達、落着

文化二年四月廿八日參照

より喜三兵衛方御返可被成候、以上。

三月二日

鶴川村 喜三兵衛
武部村 四郎太夫

奥・口仲間宛所

三月四日。廣式に使役する御次女中の志願者を募る。

〔政隣記〕

十七・八歳より三十歳迄手跡相調候者 御次女中

右二之御丸御廣式御用候條、御家中平士・奥力・御徒並之内、并又家中給人、又者御坊主娘・姉・妹等之内相望候者御座候者、頭・支配人より私共申聞候様早速可被仰渡候。御宛行等之儀者前々之通、私共直々承合候様被仰渡可被下候、以上。

三月四日

中村八郎兵衛
本保六郎左衛門
井上太郎兵衛
渡瀬七郎太夫
永井貢一郎

長 甲斐 守様

別紙之通二御丸御廣式御次女中御用之旨、中村八郎兵衛等紙面出候に付、寫相越之候條、被得其意、組・支配に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相違候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月十六日

長 甲斐 守

三月十三日。前田齊廣就封の暇を受く。

〔金龍公記史料〕

三月十三日將軍遣青山下野守來賜休暇。世子遣安藤對馬守。夫人遣小笠原大隅守。來胎物如舊例。十五日登營。謁將軍謝之。賜鷹馬。奥村左京・本多勘解由見將軍。

三月十六日。前田齊廣江戸を發して就封の途に上る。

〔政隣記〕

正月廿四日左之通被仰出候由、同日江戸發之飛脚二月二日金澤着申來。

御例之通御歸國御暇被仰出候得者、三月十六日江戸御發駕、同廿八日御歸城与被仰出候事。

〔御年譜〕

三月十六日御發駕。但筑摩川洪水に付、廿一日榊驛御逗留。廿八日御歸城。

三月廿八日。前田齊廣金澤城に着す。

〔政隣記〕

三月廿八日、昨夜九時御供揃に而同刻前高岡御發駕、益御機嫌能今日七時過御歸城。但爲御待請今朝五半時より罷出候處、八半時頃森下御小休御立之御附人來候に付、三之御丸に踰躍之處、御例之通御意有之。其外御年寄衆者大樋御附人に而、橋爪御門外迄被罷出候儀等、都而御作法前々之通。且右三之御丸に罷出候節、如前々草履捕一人召連、手傘に而出、御通行之節傘後ろ之方へ指置之、踰躍。御歸城之刻は雨晴有之。附、今日路次滑至極に付歩行區々、御着城御遅有之候由云々。

一、御歸城に付江戸表に爲御禮被指出候御使者不破英之助、御目見并於御用番席拜領物如御例に而直々發足。

〔三守御譜〕

三月廿八日御歸城。御供奥村左京・本多勘解由。

三月。金澤の山伏源法院、弘法大師と稱して詐偽を行ふ。

〔寢覺の螢〕

手叩きの清
水のことは
天明三年に
出づ

一、文化三年三月河北郡田上村寡婦の家へ、弘法大師來り給ひ袋米を授給ひしが、此米何ほど取ても盡る事なし。又其米を服すれば、いかなる難病も治せざる事なしとて、群集手たゝきの如し。取持の面々上下を着し、施物を帳記す。茶屋々々は處々に懸つらね、參詣絡繹としてけしからぬ賑ひなり。扱弘法大師重て來り給ひ、是迄の散錢施物を皆わたせよと言言る。取持の者共渡さじと拒て言分となり、折節改方役人來り合せ、忽ち弘法大師を搦捕て詮議ありければ、金澤母衣町の源法院といふ山伏にて有し。これにて人々漸く夢さめ、參詣ひそかに成りし。

四月五日。前田齊廣、諸士一般に今年年の借知を廢せんことを告げ、次いで老臣の諫止により一たび命を撤す。

〔御家老方御密用之覺〕

一、御家中一統難澁之躰被聞召、依之格別之思召を以、御家中一統御借知、今・來年全可被返下旨、年寄中御親翰を以被仰出、年寄中等も一統之通可被返下旨、左之通御親翰御書立を以被仰出。

當時逼迫至極之儀に候へ共、別段存寄を以、各并家老共借知、今・來年全可相返候事。

四月五日

右之趣若年寄の茂演達可有之候事。

兵部儀在江戸、又五郎儀保養中に而出席無之に付、主付の申遣候様月番演述に付、織江より内狀を以申遣。

右被仰出に付各示談之上、御家中一統難澁之躰被聞召、別段之思召を以結構成被仰出、誠存懸も無御座難有奉存候。乍去私共には御勝手振之御様子も粗承知仕罷在候儀、御當節之御事、乍迷惑御辭退仕、是迄之通指上申度旨月番迄及御請候事。

但、又五郎儀も各与同存之旨被申越候に付、其段主附より申達、若年寄へは月番より演述有之事。

同 七日

右之通及御請候處、何茂職分之儀御辭退申上候儀尤に被思召候へ共、今般不被得止事格別之思召付を以被仰出候。御趣意之趣は月番の御意被遊候通候。依之各にも被仰出候通相心得可申旨等、横濱善左衛門等を以段々被仰出候得共、尙又各詮議之上、當時之御勝手振中々右之通被仰付候御時節にも無之候付、再往被仰出候上之儀に候へ共、何分奉辭候旨重而申上候事。

同 九日

本年四月廿七日の條參照

今般格別之思召を以、御家中一統御借知可被返下旨被仰出之趣に付、猶更御用番方御勝手方に而段々詮議之筋有之、當時御逼迫至極之御勝手振に候處、右之通被仰付候上は、彌御難澁至極之御儀、如何共存辨候儀無御座、逆難被仰付趣等種々遂詮議、則其段申上候處、格別之思召を以被仰出不一方儀に候へ共、段々詮議之筋申上候に付、此度一統御借知被返下候儀、先御指止可被遊候。依之年寄中等も同事に候間、其通心得候様被仰出。依而各詮議之趣被聞召届、先以難有奉存候段及御請候事。

右之趣兵部・又五郎も主付より委細申遣事。

〔政隣記〕

付札、御横目

石川御門續御櫓下石垣御普請中道幅無之に付、佳節・朔望等出仕之面々、河北御門一方より往來申渡置候得共、年限も相懸候御普請に付、格別遂詮議、召連候從者末々作法能込合不申様、其主人々々より嚴重に申付、佳節・朔望等石川御門よりも一統出仕往來有之候様可申渡候。併右御普請中は假園外に而可致下馬下乗候。此段夫々不相洩様可被申談事。

四月七日

別紙之通夫々可申談旨、御城代又兵衛殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且又御組等之内裁許有之面々は、其支配も不相洩様御申談可被成候、以上。

四月八日

御横目

御歩頭衆中

四月十一日。道中繼人馬に關する前令を改む。

〔政隣記〕

道中繼人馬之儀に付、當二月相觸候内、川支等に而逗留有之候得者、夫より先不順混雜にも可相成候間、人々相心得、追先觸に日附割附いたし、何々に而逗留と申儀書顯、逗留宿間屋に相渡、尤追先觸寫江戶會所無間違指出候様可相心得旨相觸候得共、追先觸に日附割附いたし候に不及、且江戶會所無間違指出候にも不及候事。

右之趣被得其意、組・支配可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配も相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

四月十一日

村井又兵衛

四月十三日。前田治脩金澤千日町口に行歩を行ふ。

〔政隣記〕

四月十三日、相公様八時御供揃に而、御鷹野之振を以千日町口の御行歩。

四月廿四日。再び廣式に使役する御次女中の志願者を募る。

〔政隣記〕

十九歳より二十五六歳迄

但物縫相心得候者 御次女中

右二之御丸御廣式御用候條、御家中平侍・與力・御徒並之内、并又家中給人、又は御坊主娘・姉妹等之内、相望候者御座候者、頭・支配人より私共の申聞候様、早速可被仰渡候。御宛行等之儀者前々之通、私共の直々承合候様被仰渡可被下候、以上。

四月二十四日

中村八郎兵衛

本保六郎左衛門

井上太郎兵衛

渡瀬七郎太夫

永井貢一郎

村井又兵衛殿

四月廿七日。前田齊廣の命により諸士に今年に限り借知を徵せざるべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

四月廿七日晴陰、昨日御用番又兵衛殿依御廻文、今日五時過より人持・頭分登城、御横目所及び案内相扣有之候處、四半時頃槍垣之御間二之間の御年寄中等御列座、一組一役宛御横目指引に而御呼立、左之通御用番又兵衛殿御演述。

老臣は先に
借知返附を
辭退せしな
りてこの例
に漏れしな

本年四月五
日及び六月
二十日参照

御家中之人々勝手難澁至極之段被聞召、御心痛之至被思召候。依之當時御逼迫至極之儀に候得共、別段之思召を以御借知・御借米當年一作全可被返下候條、此段可申渡旨被仰出。右之趣被得其意、組・支配之面々にも可被申渡候。組等之内裁許有之人々は、其支配にも相違候様可被申聞候事。

右之通可被得其意候事。

〔御觸留〕

定番頭

今般御借知一作被返下候得共、逼塞・遠慮等之人々者不被返下候條、此段諸頭は可被申談候

事。

〔御觸留〕

御家中之人々より御借知米、今年一作全被返下候趣別紙之通に付、與力之者其寄親より申渡、御禮も寄親迄罷出、且自分御禮來月朔日二日之内相勤候節、與力之儀も一所に申述候様可申談旨、御横目御申渡に付、此段申進候、以上。

四月廿七日

村井又兵衛

奥村左京殿

四月。學校に於ける讀書生に諭示する條々を定む。

〔學校方覺書〕

學校頭之

於學校習學之人々へ、教諭之法を相建申度旨、讀師之面々心付之趣、先達而各迄紙面指出候付、添紙面を以被指出置、御聽にも相達候條、別紙之通習學人へ申談候様可被申聞候事。

論讀書生條々

三日 十三日 廿三日

右毎月於學校、辰之上刻より午の下刻迄、四書五經溫習候事。

一、學校罷出候而無用之咄合等不仕、尤稽古相濟候者直に退出可仕事。

一、辭儀挨拶之儀者、節義之第一に候間、疎畧之振舞無之、進退宜敷相心得可申事。

一、溜列居之儀、猥りに着座不仕、帳順を以、主付名前懸札之下に作法能着座可仕事。

一、稽古相初り候而は、別而猥りに立さわぎ申聞敷事。

一、稽古之席に而は右之方に着座仕、句讀相授り候者左之方に着座候而、尙更誦讀仕候而相濟候者退出可仕事。

一、不審之儀師長にならひ受候節は、進退宜敷教を受可申事。

一、都而每部讀了之後、前書失忘無之哉試可申候。若失忘多く候者、立歸り溫習いたし可申候。後書へ移候儀任指圖可申事。

一、他人之長短過惡を論じ、或は出座之前後争ひ申聞敷事。

一、誦讀之法徐緩にして、聲音響亮に、伊吾無之様心懸可申事。

一、素讀は學問之楷梯に候間、素讀一通り相濟候者、義理之會得を心懸、會讀等之席へ罷出可申事。

右件々相守可申候事。

寅 四月

五月二日。今年諸士の借知を免除せられたるを以て町會所よりその費途に關して通牒す。

〔政隣記〕

今般御家中一統御借知・御借米一作被返下候に付、町會所勝手仕送之人々者、仕送方々打込成立專要に可相心得儀に候得共、人々手前質物等有之、年々利足打重り、入替等差支候節者、質物請料願等有之、畢竟成立之爲にも不相成候に付、此度被返下候御借知米之分を以、質物請出之方々不殘相渡可申候。左候得者以後質物之儀彼是願之筋一圓無之筈に候間、此段夫々御申渡可有之候。且又質物無之人々者、仕送方々先達而指出置候圖り帳之内、無據借銀返濟方々可相渡候條、是等之趣御申渡可有之候。尤御同役御申談有之候様致度候、以上。

五月二日

町會所

津田 權 平殿

〔政隣記〕

町會所仕送之人々、當一作被返下候御借知・御借米之分、仕送方々打込可申儀に候得共、人々質物等有之、年々利足相重り入替等指支候節は、質物請料願有之。畢竟成立之爲にも不相成候に付、此度被返下候御借知米之分、質物請出之方々可相渡候。且又質物無之人々は、仕

送方々先達而指出置候圖り帳之内之、無據借銀返濟方々可相渡旨申談置通に候。依而右質物之内成限流込、其餘御借知米代を以請出、殘銀有之分は借銀方々可相渡儀に付、別紙草案之通常月廿六日を限しらべ書御取立、御指出可有之候。尤質物請料之外、借銀方渡之儀は、委曲承届候上可及指圖候間、其御心得御申渡候様に与存候。此段御同役御傳達有之候様致度候、以上。

六月廿二日

町會所

菊池 九右衛門殿

五月十二日。諸士に今年の借知返附の手續を告ぐ。

〔政隣記〕

今般被仰出を以、御借知今年一作全被返下候に付、人々より指上置候ヶ所々々に而、御米を以相渡候。依而來月中當場印之切手を以可相渡候條、別紙草案帳面之通、交名・知行高等相調、當月中當場に可被指出候。且又去年九月以後當時迄、新知・御加増知・跡目等被仰付候人々者、未所附相渡不申段、但書に可被相調候。所附相渡次第、早速御借知村附帳可被指出候。其上に而右指上候ヶ所々々に而、前文之振を以切手相渡可申候事。
一、指扣等被仰付置候人々は、不被返下候條、案文之通可被相調候事。

一、御切米・御扶持方被下候人々は、當春三の二御借米指上置候條、別紙草案帳面之通相調、早速可被指出候。且又當春渡御切米等請取候以後病死之人々々も相渡候條、何月何日病死之段可被相調候事。

一、當年被召抱候人々、并足輕・小頭等より御歩等に立身被仰付候人々は、當年御借米指上不申候條、右人々は名前相省可被申候事。

一、儒醫・隱居等、他國居住之人々々も、前條之振を以相渡候條、右振合に可被書出候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々々不相洩様被申談、尤同役中急速傳達有之候上可被相返候、以上。

五月十二日

御算用場

五月廿一日。昨今兩日前田利命の一周忌法會を行ふ。

〔金龍公記史料〕

五月廿日・廿一日修香隆院一周忌法會。奉行前田伊勢守。六月七日行赦。

五月。學校に於ける學頭・學監の職を廢す。

〔學校方覺書〕

學校頭

學頭 一人

學監 一人

右兩役可被仰付旨等被仰出候趣、享和三年四月申渡置候通に候へ共、今般思召有之、右兩役御指止可被成旨、重而被仰出候條、可有其心得候事。

丙寅 五月

六月四日。組外組森榮左衛門亂行を以て流刑を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月十三日

一、組外領百五十石森榮左衛門年五儀、一類中申談、昨夜縮所入置候事。

但、子細は召仕候妾下宿之節不埒之趣有之由に而、妾之宅罷越髮を切、其上右宅を燒可申とて、竹筒に鹽硝を入候而持參、其外にも色々不行狀之趣共有之由風説。依之与云々。

〔政隣記〕

一、左之通御用番山城殿就被仰渡候、頭宅に而可申渡筈之處、前月十三日記之通不通病氣之躰に付、一類より縮所入置候故、今日昏過村田久左衛門・野村源兵衛、御大小將横目笠間源太左衛門・寺西平左衛門、榮左衛門宅罷越申渡。但御歩横目も罷越候得共、榮左衛門

八月六日の
條參照

儀縮所に入有之に付、取陸御用無之候に付相返候由之事。
付札、村田久左衛門・野村源兵衛

森 榮左衛門

右榮左衛門儀不埒之趣有之、先年御咎被仰付置、近年御免被成候處、無間も亂行不届至極に付、能州嶋之内の流刑被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候。

但、配所被遣候迄は、急度一類共御預被成候條、急度縮仕置候様可被申渡候。尤一類交名可被申聞候事。

丙寅六月四日

右之通久左衛門等申渡候處、段々存念之趣、先達而一類共儀何等之趣も一圓不申聞、理不盡に押込、今以何等之趣に付押込候与申儀も不申聞旨等、憤之趣共申出。依之御請判形難仕趣申聞候に付、久左衛門等より段々申入候得共一圓承引不致。漸左候は、憤之趣共追而紙面に調可指出候。先今日之御請は可仕旨及再三判形仕候由。夜九半時比各退出之事。但、右之趣共逐一御達申候處、紙面爲指出候に不及旨、御用番御指圖有之候由也。

六月六日。收納米を取扱ふ代官に目拂米を與ふる手續を改む。

〔筒井舊記〕

米相場の次
脱文歟

諸代官納米之節目拂米、去暮御仕法相改入札拂申渡候上、米切手相渡申趣に取極候。右之通に相成候而者、甚入組御用多に相成候に付、當年より諸郡御扶持人の被申渡、右目拂米直段精誠遂吟味御拂に申付、代銀取立置、米相場當場の上納有之、請取切手御米所の指出候へば、日印いたし相渡候筈に候。尤諸代官目拂米高、於御米所に相知申候間、諸郡番代等寫取、御扶持人の相達候得者、夫を以御拂相極可申候。此段夫々御扶持人の可被申渡候、以上。

六月六日

御 算 用 場

改作御奉行中

御別紙御改作所より御渡被成、御郡々御扶持人彼是御用多に可有之候得共、御本文之通入組申趣に候間、御別紙之通相心得可申旨、此段私より申談候様譯而被仰渡候間、左様御承知被成、落着より私方の御返可被成候、以上。

六月六日

田井村 次郎吉

諸郡御扶持人中様

此外御郡御扶持人より一統の廻状有之、毎歳八月限り目拂米代銀取立、番代迄爲登可申旨申談有之候事。

六月十六日。大聖寺侯前田利之金澤城に登る。

加賀藩史料 第十一編 文化三年

〔政隣記〕

六月十六日晴、晝より陰。主水様去三日江戸御發駕、昨夜津幡驛御止宿、明夜小松御泊、明後十八日大聖寺御在着之筈。今日五半時頃金澤御旅宿の御着に付、御作法書に有之候通り、御近習頭御使番改田主馬を以左之通被仰進。

去三日江戸表御發駕被成、長途無御障只今此表御到着之段被聞召、珍重思召候。御休息被成候様に与思召候。借者今日御對顔可被成候間、御登城可被成候。何も其節可被仰入候。爲其以御使者被仰進候。

右前々、御暇被仰出候御悦も被仰進候得共、此度者初而之御暇に付、御發駕前御驢も被進、右御悦も兼而被仰付候趣を以、於江戸御發駕前取計相濟候に付、御口上之内に右御悦者不被仰進候事。

相公様よりも右同斷、御近習頭御使者被進、御口上右同斷。但從御城直々金谷御屋形の御出被成候様思召候旨等之御口上也。

一、九時過御登城、八時頃御退出。都而御作法書之通。御料理御相伴前田伊勢守勤之。御居間書院御馳走方水越八郎左衛門、御歩頭小林猪太郎御使番勤之。且御盃事被遊、御引菜御持參之事。

右相濟、直々金谷御殿の御出、左に記候御作法書之通、且相公様与御盃事被遊、八半時過御退出之事。

糟漬鯛一桶 御目錄

相公様より味噌漬鱈 御目錄

右御作法書に有之通御下城等以後、御旅宿の御近習頭を以、御登城等之御挨拶被仰進候節、御旅宿爲御見廻被進之。

六月二十日。家老等、老臣にも本年の借知を免除せらるべきことを進言し、次いで容れられず。

〔御家老方御密用之覺〕

六月二十日勘解由・織江兩人御前に罷出、左之通申上候處、委細被聞召候、心付尤に被思召候。乍然無據御趣意候趣、先達而被仰出置候通に候。猶更重而可被仰出旨等御意之事。

年寄中暨私共より、當年別段に御借知被仰付候旨等、段々無御據御趣意を以、去年十二月二十八日被仰出、何茂奉畏罷在候。然處當年御家中難澁之躰被聞召、御心痛被遊候付、近年被仰出之趣も御座候得共、御格別之思召を以一統御借知御用捨、當年一作全被返下候。年寄中等之儀は重職之儀、奉御請候儀迷惑恐入候儀は、再往被仰出候上之儀に候得共、段々奉申上

去年十二月廿八日の被
出は去るべ
し
の誤なるべ

候處、御許容之旨被仰出候。乍然年寄中之内にも格別難澁之人々も有之躰、其上私共与違上
 げ方も過分之儀に御座候へば、自然勤仕取續にも指支候所迄至り候而は、誠不容易儀に奉存
 候。人々勝手振之儀巨細には御存知不被爲在、至極難澁之場迄至候而は、畢竟御心外に被思
 召候儀も出來可仕哉与、此處私共甚泥罷在候儀に御座候。尤深き思召之上被仰出御儀、御賢
 慮可有御座御儀に奉存候へ共、今般一統結構に被仰出候御時節に御座候へば、先當年之所御
 猶豫被仰付間敷哉、私共心付之趣不奉申上候儀も仕兼候に付、乍恐奉申上候。只今に至加様
 に申上候儀、事相おくれ候申上方、殊に私共身分にも拘候儀、彼是甚申上兼罷在候得共、同
 役共申合候趣に付、乍恐奉申上候。

一、同二十一日改田主馬を以、御家老中御前被召、何茂罷出候處、昨日勘解由・織江より
 申上候趣に付、左之御親翰被渡下、段々御意之趣有之、夫々及御請候事。

年寄共等より當年増借知申付候儀に付、昨日勘解由・織江申聞候趣、猶遂熟慮候。其方中心
 付候儀も尤に候へ共、元來右借知之儀者、乍心外別段之趣にて申付候事、子細は去春申聞置
 候通に候。然處當年一作借知全相返候。依之年寄共等も可相返之旨申出候處及辭退候。しか
 し年寄共等は別段之借知も申付候事に候へば、彌以勝手向差支可申与令推察、當年之儀格別
 之趣にて一統へ借知相返候事故、強而申出候へども達而再往及辭退候も、人々勝手向運方度

量も可有之處右之族者、此後いかにも職分不相立与申程之勝手向取扱有之間敷儀与存候。乍
 去年寄共等心得違にて、萬一此後身分不相應之勝手向逼迫に至り、難捨首尾も候は、其節
 は何とか申付方も可有之哉与存候。右等之趣に候條、其方中心付に候へども、此度之儀乍心
 外多分難承届可有之哉。各存付之趣身分に不拘申聞之儀は一段之事に候。尤此後も聊無泥何
 成共心付等之儀は可被申聞候。

六月二十一日

右御親翰、勘解由儀御前被罷出候節持參奉返上候事。

六月。陪臣・醫者等の學校に出席出願の手續を改む。

〔政隣記〕

陪臣之人々、是迄文學校の初而出座、講日聽聞に不限、禮法・算學・和學・令之稽古罷出候分、
 都而御儒者の相達來候得共、以來其講書聽聞等者御儒者の相達、其外者其品々之師範人の相
 達可申事。

一、陪臣醫者且御醫者中弟子、并陪臣醫者弟子醫學出座仕度者は、醫學指引之御醫者の被
 相達可申候。

一、醫者之外陪臣之人々醫學出座仕度者は、是又醫學指引之御儒者の相達可申候。

一、町儒醫之分出座之儀、是迄者町奉行迄相願來候得共、是又以來者御儒者、指引之御醫者、其品々之師範人の相達可申事。

右陪臣之人々等初而出座願方、御儒者并師範人承請候上、學校主付頭の相達可申事。右之通私共詮議仕候に付御達申上候。御聞届之上夫々被仰渡候様仕度奉存候、以上。

五月

井上井之助

中泉七太夫

堀三郎左衛門

木村茂兵衛

奥村左京様

横山山城様

附札、定番頭

陪臣人々等文學校の初而出座願方之儀に付、學校頭紙面指出候に付、寫相越之候條、被得其意、夫々可被申談候事。

寅六月

七月五日。御馬廻組金子十郎左衛門その妻の妹と出奔す。

今月は七月

〔政隣記〕

一、長瀬五郎左衛門組御馬廻、領知二百五十石金子十郎左衛門、居宅馬場一番丁金子武左衛門跡養子、實は御異風不破久太夫二男也。附、久太夫前月中旬病死、十郎左衛門忌中也。今月五日夜組外小杉半七郎姉同道出奔之躰、行衛不知、昨八日夫々書付を以及御斷。附、半七郎者小杉喜左衛門跡に而、領地百七十石也。喜左衛門嫡女者十郎左衛門妻に而、是又半七郎姉。此度同道之女は喜左衛門二番目娘に而、則妻之妹也。于時十郎左衛門儀、半七郎勝手方取誘致在之に付、當半納・本納分共不殘賣拂、勿論自分收納米者地米に至迄不殘賣拂之、當五日晝迄に兩家之拂代銀不殘取納、同夜出奔。持參金都合二百兩計に而可有之与之沙汰也。

附、十郎左衛門今年二十九歳、同道之女廿三歳也。

七月九日。火災の際に於ける心得を恪守すべきことを命ず。

〔異本三守御譜〕

七月左之通觸。

付札、定番頭

火事之節無用之人々、火事場へ不罷越筈御定も在之候處、近年御役人之外早乗仕候様族も多、火元の茂無用之者入込、御役人之障に相成候様子相聞え候事。

一、辻々大勢相集、火消人數等致見物、往來之障にも相成候様子相聞候事。
 右等之趣前々より相觸、享和二年猶更被仰出候趣有之、急度相觸置候處、近頃は又々猥に相成候躰。夜中火事之節、提灯無之馬上にて駆廻り候人々も有之躰に候。火事之節親類等之宅へ見廻候儀は御定も有之候儀に候間、都而心得違無之様嚴重可相心得候。尤右躰之者於在之は、御横目より相咎、夫々名前も承届候筈に候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は其支配へも相達、尤家來末々迄不相洩申渡候様可被申談候事。右之趣一統可被申談候事。

右七月九日御用番左京殿御渡、武田喜左衛門廻狀。

七月九日。江戸に於いて物價高直なるを以て詰人に金子貸與を許す。

〔政隣記〕

一、去九日出江戸御用狀來着、左之趣申來。

付札、河内山久太夫。

近年此表金相場高直之處、當春火災後彌增高貴に相成、且諸物共追々引揚、詰人及難澁候に付、御救方之儀夫々願之趣有之、委曲金澤表へ申遣置候處、難澁之趣無據儀には候得共、御勝手向御逼迫之上、近年不時御入用打續、且當年御格別之思召を以御借知米一作被返下候得

ば、定式之御入用方さへ御手當無覺束候故、詰人願之趣取計方無之旨申來、則其段申渡候通に候。然處當年之儀は火災に付、金相場を初格別之引揚、近年無之高貴に相成、一統甚難澁、取續も指支候趣段々被申聞、諸向よりも追々同様申聞、誠に無據相聞候得共、最早御國へ往返之日間も無之候。依之格別詮議之上、此表切之取計を以、一人扶持に金二步宛御貸渡之儀承届候條、右を以遂勘辨取續可申候。
 右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。且又諸頭中へも演述、組等之人々へ申聞候様可被申談候事。

寅 七 月

七月十一日。馬廻組金森大作城中にて誤つて他人の刀を帶し去る。

〔政隣記〕

一、當十一日御馬廻組頭御用番支配野村仁之助、御廊下通に刀差置候處見當り不申に付、右組頭より御門入方之儀入紙面、橋爪・三之御丸御番人中へ相達。于時同日八半時比、同日跡目被下候御馬廻組金森大作罷出、先刻刀取違罷歸候由に而、其刀指罷出候に付、先刻より御横目所へ預り置候主無之刀見分申談候處、大作刀に相違無之旨申聞候に付相渡候處、則帶し出候刀と取替罷歸。右に付仁之助呼に遣し、右刀爲見候處、仁之助刀に無相違由申聞に付相

渡候得共、及暮候故又御横目所に預り置、翌日仁之助罷出右刀受取之、御門出方之儀御城代より夫々被仰渡。且昨十一日は御城代御退出後に候故、當番組頭取咄之、右等之趣時々當番組頭御横目より達御聽。但十一日晝番組頭辻平丞・御横目笠間源太左衛門、十二日朝番組頭堀平馬・御横目山本又九郎。

七月十三日。前田重教の夫人及び女頼姫の忌日を改む。

〔政隣記〕

壽光院様御祥月十月廿九日之處、十月十七日に御改。

松壽院様御祥月正月十日之處、御内輪に而正月五日に御振替。

右御忌日思召有之、右之通御振替に候。依之毎月右御忌日、御家中諸殺生指扣可申旨被仰出候。尤十日并大の月廿九日は相扣候に不及候。

右之通被得其意、組・支配之人々を可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配を相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月十三日

奥村左京

七月廿二日。收納米の調製及び枘目を嚴にすべきことを告ぐ。

〔加州郡方舊記〕

一、三州御收納米并給人米納方之儀、前々より申渡候通り、第一米干立并仕立方手拔有之候而者、御廻米に相成候而茂過分欠減相立、甚御損失之儀に候間、彌以已來納之節重念に相撰、御定之通割とぼに而、米持參候百姓に爲斗相納可申候。當年より大坂を初、船手等悉く嚴重御仕法被仰付候。然上者納方一方に相成、穿鑿不行届而者、惣様之御仕法崩に相成候間、御定之通御藏前懸札之趣違失無之様可相心得候。

一、代官納方之節、米撰方第一之所、中には手代に打まかせ置、油斷之躰も相聞え候條、以來重々意を附可相勤候。且又是迄出船之節、升取不正之儀も有之に付槽升を相用候。其節代官共彼是申聞候向々有之候得共、入念に相納候藏々指而相違之儀も無之に付、當春より大坂・御當地共、彌以來出船之節槽升相用候間、其段可相心得候。

一、下代等讓代之節、過分銀子跡役より取請候由、今以風評有之候。給米等も少分之所、畢竟こぼれ米等目當にいたし候故与相聞、左候而者斗米之穿鑿不行届儀、暨百姓難儀之筋沙汰之限りに候。依之侍代官へも嚴重申渡候間、御扶持人・十村等へも右様之儀無之、不斷手代行狀等も心を付、往々古來に立直候様可相心得候。

右之趣被得其意、御扶持人・十村・新田裁許・山廻りを初、其外納候節百姓等に相當り候儀は、

小作之者にも夫々可被申渡候、以上。

戊 七 月

御 算 用 場

改作御奉行中

御收納米納方之儀に付、別紙御算用場より相渡候に付相達候條、得其意、請書可指出候、以上。

七月廿二日

改 作 奉 行

諸郡御扶持人中・十村・新田裁許・山廻中

七月廿二日。能登一宮に附與すべき山林に關して議す。

〔職事日記〕

能州一宮御林之儀に付、其御場より寺社奉行に被及御懸合候趣、一宮社僧・神主共不致會得、先年より申分に相成居申儀、於公事場可相糺旨、先達而年寄衆より被申渡候に付、各々も段々申達、先年より之書き物扣等取寄、暨一宮に被下置候御書并御制札之趣、神主等申立候趣を以拙者共遂會議、ヶ條書に認寺社奉行に相達、右奉行にも公事場會議之筋同意に候はゞ、神主等と相渡致會得候様、彼奉行に而申渡、其上にも不會得においては、公事場を召出可相糺旨申達、再往理解之ヶ條書指遣、則寺社奉行より社僧・神主に申渡候處、右ヶ條書之趣夫々致會得、此上如何様共申渡候筋可畏旨答書指出。併是迄成來之趣に而は、二町四方之外に

文化四年三月十八日の條参照

神林有之趣に相心得神務無手支所、向後二町四方に限候而者、寺社家共甚及難澁候間、此儀何分憐愍之取捌相願候旨別段願書付指出候故、寺社奉行よりも先爲内談指越候間、格別之御沙汰有之候様致度旨申越候。則公事場より相渡候ヶ條書、并寺社家之者共答書等別紙一二付有之書き物之通に而、夫々會得之上は、二町四方と相限境塚等可申付儀不指支事に候得共、元來論所に相成候儀は、往古二町四方と相定り候節以後、證據に可成繪圖等相渡候儀も無之、夫以後御林山奉行等之由斷故にも候哉、社僧・神主共神林と相心得候族に相成候儀、金山方奉行等之手拔故と存候得者、今般二町四方と相限境塚等申付、寺社家及爲迷惑候儀筋立候儀共難申候。併拙者共會議に而は、元來御林間數之儀、往古見通り迄之間數に而、當時夫々分間有之候者、御林之間數延と可有之と存候條、寺社家共別段願之儀少は取上、二町四方之外に寺社家と付候山等有之候様に取捌候者、今般公事場より申渡候趣致會得候上、別段之願方改而承届候筋に相成、外々へ指障に相成候儀も有間敷哉と存候。依而右等之趣及御示談候條、各御了簡之程御申越候様に与存候。則公事場より寺社奉行に相達候ヶ條書、右奉行より公事場に指出候書き物、其外一の宮に被下置候御書寫并御制札之寫等相達候條、夫々御見しらべ有之、拙者共會議之外に、何とか各に而御心付之儀有之候者可有御申越候。右別段願之儀に付、二町四方之外に餘分相渡候儀に相成候はゞ、左右に有之地面を分相渡候而

可宜に付、繪圖も相達候間、各に而も拙者共僉議之通与御心得候はゞ、右繪圖に大抵何れよりいづれ之間を何百歩程可相渡与、繪圖に付札に而被爲記、尤右可相渡歩數相しらべさせられ候はゞ、誠に内々を以見計之歩數相しらべ候様に御申渡、右之様子寺社家へ相知不申様に御申付候様に与存候。早速右之趣否可有御申越、其上に而年寄衆に相達、年寄衆被聞届候上、双方に落着之書きたて相渡、追而堀切等出來之上繪圖等可相渡儀与存候、以上。

寅七月廿二日

四 人 印

遠 田 誠 摩殿

水野次郎太夫殿

杉野善三郎殿

七月廿四日。拘禁中の北村屋淺右衛門病むを以てその女の代牢を許す。

〔職事日記〕

七月廿一日御達申代牢願之書記、左之通執筆堀口忠藏を以相達る也。

安永六年

新町絹屋武兵衛儀禁牢之所、さき儀代牢願之通被仰渡。

寛政十一年

観音院門前能とや與兵衛方借家人唐津屋吉十郎母禁牢之所、娘末儀代牢願之通被仰渡。

寛政五年

犀川川除町岩内屋六兵衛儀禁牢に付、娘代牢相願候へ共、追付出牢之事故不承届。

寛政六年

羽咋郡米出村百姓與右衛門儀禁牢之所、娘儀代牢相願候へ共、與右衛門再往之吟味も相濟不申者故、詮議中之趣を以書付等相返。

一、河北郡大樋村領神谷屋善兵衛儀禁牢之所、娘いそ代牢相願、善兵衛儀下濟出牢之者故、いそ儀代牢におよばず出牢。尤一卷落着迄善兵衛儀指預置候様被仰渡。

右は被相渡覺書に而、此分しらべ出候様一昨廿一日執筆芝山彌一郎申聞候也。右を昨日御返申、左之通相達也。

安永六年新町絹や武兵衛娘さき儀代牢之儀は、元來さき之不埒に寄父武兵衛禁牢申付候事故、さき儀代牢願之通被仰渡候様御達申、其通被仰渡候。

一、寛政十一年観音院門前、能とや與兵衛方借家人唐津屋吉十郎母は、其身外に合女に遣候不届に仍而、八ヶ月禁牢之上御宥免之旨被仰出、其通申渡置候處、娘すへ儀代牢相願候故、いかゞ可申渡哉与御達申候處、代牢御聞届之旨被仰渡候。右母牢屋に而大病与申に而も無御

其身本の儘

座に付、願方迄を御達申候所、右之通に御座候。

一、右之外別紙に有之候岩田屋六兵衛・神谷屋善兵衛儀は追付出牢、又は下濟出牢之者に而、今般之者に相當り不申、米出村百姓與右衛門儀は相煩候儀も無御座候故、僉議中之趣を以書付相返候儀に相成申候。今般北村屋淺右衛門儀は、吟味落着之上は御領國追放刑に可伺者に御座候得共、當時痛等に而大病に相成罷在候而、吟味も相成不申所、娘代牢相願候故御聞届可被成哉、又は願方奇特之趣を以不及代牢、本復迄牢より出預置候様可被仰渡哉与御達申儀に御座候。尤前に男子親之代牢相願候者、奇特之趣を以不及代牢出牢申付、預置候様被仰渡候者共は度々御座候得共、女子に今般同様之者只今見當り不申候。先達而之別紙御達申候事。

〔職事日記〕

七月廿四日代牢申渡方左之通り。

伏見寺門前北村や
淺右衛門姫 せ ん

其方儀父之代牢相願、父淺右衛門儀實大病に付、委曲年寄衆へ相達候處、御上御聽にも被達候而、其方代牢御聞届被成、其方入牢申付、淺右衛門は病氣本復迄牢より出、寺社奉行に預置候様被仰渡候故、今日より其方入牢申付、今日御日柄に付揚屋へ入、明日より入牢申付、

淺右衛門儀本復迄牢より出候間、左様に可心得、追而淺右衛門儀本復之上は入替候間、左様に可心得候。

伏見寺門前北村屋 淺右衛門

其方儀禁牢申付置候處、娘せん儀代牢相願、其方大病相滯候事故、委曲年寄衆へ相達候處、娘代牢申付、其方は本復迄預置候様被仰渡候故、せん儀入牢申付、其方は牢より出、寺社奉行に預置候間、左様可心得候。尤其方病氣宜成候はゞ、早速門前役人可相斷、其節入替候間左様可心得候。

七月廿六日。前田齊廣、政務の伺書に對し急に決裁せざることあるべきを告ぐ。

〔諸事覺書〕

七月廿六日左之通被仰出候に付月番より被申談候。品之寬急に寄申儀には候得共、不差急品者御留置、猶更被遂御熟慮被仰出儀も可有之候。是迄は伺候品々随分はやく被仰出候得共、御歸國以後御改被遊候儀も一二品有之候。右之通に付伺之品急に不被仰出儀も可有之候。是までの御様子と致相違候付、不審に奉存儀

も可有之与思召候付、此段被仰付置候。尤差急候品者無泥御催促可申上候。御家老・若年寄
の茂可申談旨、勘解由を以被仰出候事。

八月四日。村々にて祭禮に際し踊・相撲等を催すを禁す。

〔筒井舊記〕

頃日祭禮に事寄、踊り子并角力抔相催候様子承及候條、如何之趣に候哉、其方中等閑成心得
方に候條、右等之趣有之候はゞ、早速爲指止、尤棟取人等名前相糺可申聞候、以上。

寅八月四日

菅野兵左衛門

奥郡御扶持人・十村中

八月六日。組外組森榮左衛門能登島に流さる。

〔政隣記〕

一、組外村田久左衛門・野村源兵衛組森榮左衛門儀、當月六日能州嶋之内半浦村に被遣候旨
等、左之通今月二日御用番又兵衛殿夫々の被仰渡候に付、則今日森宅に、朝五半時比組外御
番頭御用番三宅權左衛門・堀左兵衛、御横目永原七郎左衛門・山本又九郎、并御歩横目頭村
田・野村煩役引に付兩人罷越、被仰渡之趣權左衛門等申渡候處御請相濟、道中指添之御歩田
伏才三郎・平田孫助に相渡、受取之、追付發出。且榮左衛門調筆之書面一卷指出、身當頭村

本年六月四
日の條參照
今日は八月
六日

田に相達候様に致度段申聞候事。

付札、御歩頭

森榮左衛門儀能州嶋之内半浦村に流刑被仰付、縮小屋に被入置候に付、當月六日令發足候
間、榮左衛門に指添罷越候御歩田伏才三郎・平田孫助彼宅に罷越候様可被申渡候。其刻村田
久左衛門等内并御横目一人・御歩横目兩人罷越筈に候條、此人々參出次第、榮左衛門受取指
添罷越候様可被申渡候事。

一、榮左衛門儀駕籠に爲乗、鎖おろし可申候。網懸に者及不申候事。

一、道中足輕四人・小者二人指添申筈に候事。

一、御歩并足輕等於所口齋藤中務等に申達、指圖次第船場迄召連罷越、致出船候を見届可罷
歸事。

一、若道中一日懸に難成候者、見計爲致一宿可申候。勿論夜中彌入念に勤番、縮宜可仕候事。

一、路次賄料會所より請取、足輕に申付賄方爲致可申事。

一、榮左衛門刀・脇刺者、兩人之御歩請取之、道中は小者に爲持罷越、彼表に而中務等に相
渡可申事。

一、路次縮方之儀、其外諸事跡々之格をも承合、前々之通相心得候様可被申聞候事。

右之通田伏才三郎・平田孫助に可被申渡候事。

〔政隣記〕

一、前六日に有之田伏才三郎・平田孫助儀、森榮左衛門受取五半時過發出、津幡驛に而爲致晝食、暮比今濱着止宿。翌七日朝六時發出、高島に而爲致晝食、夕八時比所口に參着、同所奉行齋藤中務方及案内候處、中務并小代官渡邊直左衛門・早川武兵衛・渡邊八貫・渡邊與八郎罷越候に付、様子申達、榮左衛門渡之、大小中務に相渡候。無程右小代官二人・同所足輕四人指添出船仕、尤才三郎等船場迄罷越、出舟之様子見届罷歸。諸事又兵衛殿被仰渡之趣に相勤、同九日歸着之段才三郎等連名之書付、御用番菊池氏に付、菊池氏奥書を加へ、昨日御用番又兵衛殿に被相達段、廻狀到來之事。

八月九日。前田齊廣、諸士娛樂の爲自由に能囃子を行ふことを許す。

〔御家老方御密用之覺〕

文化三年八月九日甲斐守被申候。能囃子之儀先達而被仰出置候通之處、左候而は慰にも相成間敷候間、已來は役者相交、自身にも能囃子仕候儀勝手次第に候。しかし其時節により心得可有之と被思召候旨被仰出候。此段當月々番又兵衛より可申談筈に候得共、不快に而出席無之候に付被演述候旨、圖書に申聞候事。

先達に享和三年五月十日

八月九日。前田齊廣、御歩の名跡人伺出に關する前令を改む。

〔御家老方御密用之覺〕

文化三年八月九日、享和二年・三年之御親翰留帳、御前に相出可奉入御覽之旨、昨日勘解由を以被仰出候付、主付圖書儀御前に持參入御覽候處、享和三年七月山森貞助名跡伺書に被成下候御下筆之處、此御加筆御文段之内、其子無能無藝之者は不被召抱筈と申所、其儀に付御意被成候は、此文段のみ堅く相心得候は、御不仁之筋にも可相成候間、此所無泥詮議之趣可相伺候。御書改被遊候程之儀に而は無之候と、此段被仰出候旨御意に付、奉畏候、何も可申談旨及御請候事。

八月十一日。本郷邸内大銀所に於いて銀子紛失す。

〔政隣記〕

一、八月十一日江戸御上邸大がね所に而銀二貫目紛失之事。但、當詰大がね奉行御大小將三輪采男・齋藤金十郎。

八月十一日。森幾太郎小立野嫁坂の火災に赴く途上足輕を殺傷す。

〔政隣記〕

加賀藩史料 第十一編 文化三年

享和三年七月十八日の條参照

文化四年五月廿八日の條参照

八月十一日曉七時小立野ヨメ坂高片原町家三軒焼失、内二軒大家也。六時前鎮火。但兩火事鎮候後降出。

〔政隣記〕

一、今曉火事鎮候後、年寄衆御用番支配頭分佐藤治兵衛三男幾太郎十八儀、小立野鷹匠町御大小將和田知左衛門邊に而、御横目足輕割場附日假横加藤要助を及殺害、同役假定役聞番牧昌石左衛門組黒萬藏に手疵爲負候處、萬藏儀同邊御大小將水野庄五郎門内の走込、最早歩行等難叶旨申聞相倒候處、追付御大小將横目永原七郎右衛門・山本又九郎・寺西平左衛門罷越、萬藏手疵見分之上、伺被仰出之趣有之候間、不及乞檢使旨等庄五郎の被申談候に付、右萬藏引取之儀等御横目中伺指圖候處、無程引取候旨庄五郎より頭村奎左衛門の以書附斷に付、奎左衛門奥書を以御用番又兵衛殿の相達之。但萬藏宅の引取之上療養方之儀、御横目中指圖を以町外科山本玄清療治す。疵後の疵に而、耳後より首筋の懸深さ三寸堅八寸計に候得共、咽喉の不懸に付可致平癒と云々。

一、要助檢使乞書付者、佐藤治兵衛より御月番の指出候處、役先之儀に付御横目中より御達申趣有之に付、檢使不被仰渡、殺害之場所の御横目永原等罷越見分、其場の幾太郎呼立様子尋等有之上、死骸取片付之儀夫々申渡有之。

一、佐藤より様子書付を以又兵衛殿の御達申候處、同十三日御呼出、幾太郎手前とくと相糺、委曲書付可指出旨被仰渡候に付、同日出之。

一、佐藤書付之趣者、一類伊藤五郎方の火事爲見廻罷越候於途中、足輕躰之者三人過言之上手向候に付及殺害候段御達申候處、猶更相糺委く書出候様被仰渡に付、重而十三日書出候。書付に者先達而於途中と調出候得共、於火事所と相調、其外取紛書落之趣、且萬藏に疵付候儀者、一圓幾太郎覺無之旨等書出候由之事。

一、萬藏申口之趣者、火事場の馬乗袴着用兩刀帶候者罷越候に付、相咎候處、名前不申聞に付、強而承懸り候内、持有之手鎌下の落し候得者、其儘拾ひ取込出候に付、萬藏・要助・假御横目足輕割場附森隅喜太夫追懸候處、鷹匠町和田知左衛門邊に而追付組伏、右鎌取返名前尋候處、本名不申聞偽名申聞候に付、組柄尋候得者定番徒と申聞、心得違に候間是切に而赦し候様誤り候段申聞候に付、喜太夫者火事所の罷越、要助・萬藏者知左衛門門前之方行過相分れ候處、幾太郎刀を拔要助を切殺、萬藏のも手疵爲負、最早難働に付庄五郎方の駈込候由申由之事。

〔御年譜〕

一、御手前三男幾太郎手前被仰出之趣、別紙を以申渡候通に候。元來火事場者無用之者不相

誤りに陳謝の意

越儀御定に有之、且毎度被仰出も有之候所、申談不行届故与被思召候。依之指扣被仰付候。此段可申渡旨被仰出候。

一、御手前三男幾太郎方、去年八月十一日曉、小立野嫁坂火事之節、御用御横目足輕共及申分、石黒萬藏の手疵爲負、加藤要助を致殺害候旨、其節之様子相尋候所、委曲口上書取立被指出候。右要助及申分候上、致殺害候首尾、左様にも可有之事に候。依之右に付而は此上不被及御貪着候條、此段可申渡旨被仰出候條、可被申渡候。

卯 三月

右役御免許、頭分佐藤治兵衛の、三月十一日御用番年寄中被申渡。

八月十三日。犀川・淺野川出水す。

〔政隣記〕

八月十三日雨天在霽間。昨夜より犀川・淺野川共出水、常水より八尺計増水。依而御使番・御横目等御役人出、淺野川鈴見村の之往來橋流落、并御歩町の之假橋も流落、小橋往來留候處、晝より段々減水。右出水に而流落候橋板等取揚爲可申水中の入候者之内、小者・浪人兩人流れ來り候。大木に身を打れ候躰に而、流行衛不知候事。

八月十三日。馬廻組和田長助能登島流刑を宣告せらる。

〔御預人之記〕

和田長助、二百石御馬廻六十七歳。養方弟武兵衛を以て奉願嫡子に相立置候處、長助實子六組御徒和田磯五郎の家督相續爲致度存念等に付、武兵衛儀文化二年九月四日公事場の懸込、養父長助存念之趣相調、一卷上る也。長助同年十二月廿一日山崎伊織長恒但定火消役御預。同三年八月十三日能州島之内遠島被仰渡、未配所に赴かざる内、同年十月朔日伊織儀及病氣大切に付、公事場の御引揚入牢、同年赴配所。

〔政隣記〕

八月十三日、和田長助等今日左之通被仰付落着。

山崎伊織の御預人 和田長助

右長助儀不行狀に付、先年閉門被仰付候處、御免後收納米二重に相拂、切手頭奥書致謀書、申譯無之に付虛病を構、數年引籠罷在、且又實子磯五郎を名跡に相願度所存に而、養父之實子嫡子に相立置候武兵衛を身退候様に仕成候族等、重々不屈至極に付能州嶋之内の流刑被仰付。

右之趣山崎伊織宅の公事場奉行中川清六郎・本多左近助・原九左衛門、公事場附御横目高島五郎兵衛、御大小將横目笠間源太左衛門・寺西平左衛門・池田三九郎・土方勘右衛門公事場附御横目宮井傳兵衛煩に

付御大小將より富永右近右衛門頭中村九兵衛可罷越處假御横目也。御歩横目兩人、公事場附與力三人、同御算用者留書一人、同足輕一人罷越、御用番清六郎申渡之。御請判形取立、右與力取勝之。右畢而配所被遣候迄、是迄之通伊織御預之事。

和田長助嫡子 和田武兵衛

右武兵衛儀、父長助實子磯五郎を名跡に相願度躰にて、武兵衛病身之儀等申立、問圍にも可押込躰に相察候者、一類共及示談候歟、如何様にも仕長助爲も不惡様覺悟可有之處、士道をも取失、公事場被駈込、身分を抛長助之不届相願候段、不孝之至人倫に相欠候族不届至極に付、急度可被仰付候得共、其儀者御宥免、越中五ヶ山之内流刑被仰付、縮所被入置候旨被仰出。

和田磯五郎

右磯五郎儀、父長助磯五郎を名跡相願方所存に而、武兵衛身退候様取計候儀等悉皆不存旨申、先年女之儀に付不埒も有之、且長助武兵衛間柄不和之儀幾重にも取扱可申處、其儀無之、彼是不届之至に付、能州嶋之内流刑被仰付。

和田磯五郎嫡子 茂三郎

右同人 二男 兵三郎

右兩人不縮に無之様、先達而被仰渡置候處、磯五郎儀能州嶋之内流刑就被仰付候、父依罪せがれ共同刑被仰付候得共、何も幼少に付、十五歳迄一類御預被成候條、右及年齢候者及斷候様、一類可申渡候旨、公事場奉行中連印之紙面を以、頭水越八郎左衛門申來、八郎左衛門より一類申渡之。

定番御馬廻組 佐藤清藏

右清藏儀、和田長助父子間柄取扱方之儀、長助申分不筋と相心得候者、幾重にも理解可申入處、武兵衛儀御奉公難成と申程之病身にも無之者、身退候儀を申談、殊武兵衛者義理有之者之儀心付も無之、長助申分に隨ひ義を失候族、不埒之至に付閉門被仰付。

右於公事場夫々申渡之上、武兵衛配所被遣候迄、是迄之通半揚屋被入置候事。

附、茂三郎年三歳、兵三郎當歳。

〔政隣記〕

十一月二日、前記八月十三日被仰出候通、和田長助等今日左之通配所被送遣之、三人共二人扶持宛被下置。

能州嶋之内向田村

和田長助

但、送御歩狩谷惣藏・渡邊余所助等罷越、六日夕歸。

越中五ヶ山之内大崩嶋村に

和田 武兵衛

但、送御歩北村勇作・關助左衛門等罷越、七日夕歸。

能州嶋之内圍村に

和田 磯五郎

但、送足輕等附。御歩以下者如此御格と云々。

八月十三日。前田齊廣、その夫人を離縁したることを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目

御前様御病氣に而、去秋以來市ヶ谷御廣式に御逗留之處、急に御全快之躰無之候に付、尾張様より被仰進候趣有之、御双方御熟談を以御離縁に相成、公邊御届も相濟候。尾張様御通路之儀者是迄之通に候。此段一統可被申談候事。

八月十三日

右於御横目所披見申談有之候事。

〔齊廣様御傳略等之内書抜〕

八月十三日琴姫様御不縁に依て、同日御双方御和順を以て御離縁之儀、將軍家御達有之なり。右琴姫様後近衛基前公へ御再嫁有之と承るなり。

〔金龍公記史料〕

八月十三日報夫人大歸于幕府。去年閏八月以疾在尾州家。五年三月再嫁近衛内府基前公。改名維君。

八月。諸寺院檀那にして故なく住僧に反抗するを禁ず。

〔政隣記〕

諸寺院後住願之儀、前々之振を以於頭寺に承札候上、書付を以私共願出候得者、得承しらべ、其筋相立申分者承届入寺申渡候。然處後住僧撰之節、其寺院々々之旦那より、歸依或は不歸依と申立、且家一決不致、其内に者不筋之願方致し、理不盡に申張候族も有之、彼是後住撰方甚指支候。別而近年者右躰之趣度々有之、其内にも町・在之者抔者、菩提寺者自分々々之勝手次第に罷成候物之様心得違候躰に而、人々存寄申立、書付等頭寺或は其組合寺に指出候族多く御座候。一通り者納得之否可申出儀にも候得共、不歸依等之趣意相立不申、我意を申張候儀者決而有之間敷儀に御座候。且入寺之上にも左而已事不分儀を申立、住持心得不宜不歸依抔申立候者も有之、甚心得違之至奉存候。以來右躰心得違之族無之様、夫々急度被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

五月六日

前田 式部

竹田掃部

中川清六郎

長 甲斐守様

付札、定番頭

別紙寫之通被得其意、組・支配之人々可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配も相達候様可被申聞候事。
右之通一統可被申談候事。

八 月

九月八日。金澤神護寺に於いて徳川家治の廿一回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

九月八日於神護寺、凌明院様二十一回御忌御法會御執行。甲斐守殿等詰、中將様四半時御供揃に而、御裝束被爲召、御法事御奉行より御案内被申上次第御參詣之筈に候處、御延引被仰出。

九月九日。本郷邸内なる梅之御居宅を梅之御殿の舊稱に復せしむ。

〔政隣記〕

九月九日重陽爲御祝詞登城、於柳之御間御年寄衆謁、四時頃退出。且於御帳前、左之通披見申談有之候事。

付札、御横目

梅之御居宅之事、最前之通梅之御殿と相唱候様被仰出候條、此段寄々一統可被申談候事。

九 月

九月十九日。金澤卯辰圓光寺相對勸化を許されたるも若し強請せば之を却くべきことを郡中に告ぐ。

〔筒井舊記〕

今日高田彌左衛門様より被仰渡候者、當地卯辰圓光寺儀、御領國相對勸化相願、御聞届之旨に而、右寺役僧御屋敷に罷出、御取扱宜敷相願申段御取次を以申上候に付、取扱与申者不相成段又御取次を以被仰渡候。其後茂御屋敷に罷越候得共、折節御留守之砌に而罷歸候由。就夫此節右圓光寺役僧等、御郡に勸化に罷出候様子御聞請被遊候間、必村方役人始堅取持杯不致様可申渡置、誠に相對を以一錢・二錢宛遣候儀者御貪着不被成旨被仰渡候。乍然右勸化之儀、御郡奉行の内分も申入置候杯与威しを懸申様之儀有之候は、相對に而一錢・二錢遣候儀も堅爲致申間敷旨、内分を以可申遣置様に被仰渡候間、左様御心得可被下候。此廻狀先々御

順達、落着より御返可被下候、以上。

九月十九日

番代 清 藏

仲間 宛 所

十月十三日。三十人組喜兵衛曩に人を殺害したる罪を許さる。

〔政隣記〕

十月十三日左之通落着被仰付。

覺

三十人組 喜兵衛

右喜兵衛儀、前田土佐守家來歩組大矢軍太与及口論候處、軍太儀喜兵衛宅に不法に切込、難得止事軍太に切付候處、右疵所に而無程相果候旨。前之通り口論等に而人殺しいたし候者は死刑被仰付候得共、元來軍太儀不法至極理不盡之致形に付右之首尾に候。依而相手軍太相果候得共、格別之趣を以御宥免、御奉公爲相勤可申旨被仰出。

右之通十月三日於公事場申渡有之。尤同日より出牢、如最前御奉公勤仕被仰付。

一、前田土佐守殿家來歩組福嶋儀八并三十人組増右衛門儀、右一件に付不埒至極之趣有之候得共、喜兵衛儀御宥免被仰付候に付、兩人も頭并主人に御預之處、同十三日御宥免。

右趣意は、七月廿三日三十人組喜兵衛居住町寺町法照寺門前組合之内絹屋某後家きよ病死に付、組合之者寄集り候處、後見平栗屋某不參に付呼寄、喜兵衛遲參之趣相答候處、組合之内箱番大屋軍太承之申様、喜兵衛儀近く此組合に罷越者に候處、箱番之此方を闇き遮而之申條難心得旨等申募、喜兵衛之陰囊を掴み候に付、双方組合候内、喜兵衛着服大に裂け見苦く相成、一先我家に退候處、妻申様、追付軍太可參候間暫可隱旨申に付、法照寺に罷越居候處、果而軍太參り、喜兵衛に可逢与申候得共不在合。然處喜兵衛幼娘爲病に而臥有之候を、軍太儀横腹を踏付罷歸。依而病氣指重大切に付、法照寺より喜兵衛を呼越、喜兵衛歸致看病有之處に、軍太儀赤裸に成重而罷越、蚊屋之外より切付候に付、喜兵衛蚊屋より出候處に、灰を握り居候而壽懸候に付、難得止事を切付候處、軍太被切倒れながら助け候様に申、無程相果候。其節追而可有御詮議与留めは態与不刺由云々。但、右病娘も無程致病死候事。

十月十八日。諸方土藏奉行等保管の銀子を紛失せしめたるを以て閉門を命ぜらる。

〔政隣記〕

十月十八日於公事場左之通被仰出之趣申渡有之。

定番御馬廻 疋田 半 平

右兩人諸方御土藏奉行被仰付置候處、去々年十二月廿日、御土藏戸前之封等に相替儀無之候得共、御かね箱積方も違、二箱軽く候旨銀見共申聞、半平儀封切遂見分候處、御かね無之、二十貫目致紛失候段、御流例平日勤方油斷之族も有之、不調法之至に候。殊に半平儀者銀見勘右衛門弟之銀子之由に者候得共、役先之者より致借用罷在、其段御番頭迄達方も不宜、別而不埒に候。依之急度可被仰付候得共、勘右衛門儀御かね盗出候段一旦申顯、其後申替吟味未決之内致牢死、甚疑敷相聞候付、兩人共役儀被指除閉門被仰付。

十一月九日。江戸に於いて諸士の琉球人見物の爲外出するを許す。

〔政隣記〕

今般琉球人爲見物、御家中之人々可罷出候。左候得ば小屋々々人少にも可罷在候間、火之元之儀格別入念に相心得、龜抹無之様家來末々迄嚴重可申渡旨、前田兵部殿御申聞被成候條、御承知被成、御組・御支配、且又御組等之内裁許有之人々は其支配も不相洩様御申談可被成候、以上。

十一月九日

佐藤八郎左衛門

諸頭連名様

〔政隣記〕

覺

- 一、琉球人見物に罷越候人々、御作事方御門明け六時より勝手次第罷出、夜に入罷歸候而も不及證文候事。
- 一、見物人名書、前日九時迄之内御横目所御指出可被成候。且又御組・御支配之分も、御聞届之上是又御指出可被成候。
- 一、又者之分、主人承届別紙案文印章之切手致持參、御門方割場方より役人指出置候間相渡、罷歸候節も相斷入可申事。
- 但、夜に入罷歸候而も不及證文、且又右切手に而罷出候間、常之小札持參に不及候事。
- 一、琉球人來着之節は、曉七時より罷出、歸國之節は曉八時より罷出候儀、勝手次第に候事。

十一月十日。領内の船舶税を改めたることを告ぐ。

〔眞館留帳抜書〕

加越能三州共船役改、左之通。

一、外海舟擢一枚役、是迄之通七匁。

一、獵舟擡一枚役、同五匁。
 但、内潟てんと舟、并射水郡に而沖網場より諸魚積送り候小舟共。
 一、磯獵舟并内潟板舟・耕作通船・川獵等品々小舟一艘役、三匁。
 一、他領等より借船相用候而も右應候役立之事。

以上

右に付札

本文射水郡に而沖網場より諸魚積送り候舟、是迄別に役取立來候得共、二重役に相成分は以來取立申間敷候事。

諸郡散小物成銀取立方等、致混雜候儀も有之、役立等之趣當時詮議中に候處、右之内先般役之分迄相改、別紙之通り取立候様散役裁許の申渡候。依之各手合に而、先達而舟極印被入候分も、右に准じ當年より役銀可被取立候。此外諸品役立等之儀、來春に懸り遂詮議可申談候條、此段も申達置候、以上。

十一月十日

御算用場

高田彌左衛門殿

中村逸角殿

右寫之通り申來候條、得其意、役銀取立方之儀以來本文之通可相心得候、以上。

高田彌左衛門

能州四郡十村中

追而先々相廻落着より可相返候、以上。

十一月十二日。前田齊廣、その乗馬檢閲に關する老臣の進言を嫌らずとす。

〔於江府御親翰帳之内書抜〕

十一月十二日

左之御親翰以表三郎被渡下。

勘解由より別紙差越、令披見候處、紙面之趣此方不肖故歎一圓合點不參候故、則別紙相達候條、御手前可被致披見候。先以家中之者共乗馬申付候とて、事々敷外聞もいかゞ抔申儀可有之様も無之事に候。たとへば備立とか申様なる軍法に拘り申儀を時ならず申付候はゞ、成程にも外聞もいかゞと申事も可有之哉。しかし是とても平生相たしなみ申筋に候得者、折にふれ申付間敷事に而茂無之處、況一通頭共之乗馬申付候とて、か様に事々敷申越候儀いかゞ之了簡に候哉。都而いぶかしく存る事に候間、則別紙相達候條可被致披見候、以上。

十一月十二日

長 甲斐守殿

猶々申遣候。右之紙面は吉左衛門を以差越し、口上に而も申聞候は、此度之儀は何分差止候様に致度与申越候儀等、一圓難辨候。猶委細被承度候は、吉左衛門被申含可遣候間、相尋可被申候、以上。

本多勘解由 上

昨日詰人頭分乘馬御覽可被遊旨被仰出置候得共、雨天に付御延引之段昨日奉承知候。尤何与歟御様子も御座候而不被爲得止事御覽之儀に御座候へば、御格別之御儀に御座候へ共、當夏以來異國船漂着之砌、御手當内しらへも被仰出置候御時節之儀、別而人々耳目も新たに相成居申儀。且は不斗御外聞も事々敷相成候而は、此表之事御座候間、都而如何敷様に奉存、私式甚恐多奉申上兼候へ共、何分にも被爲成候御儀に御座候は、此度之儀は先御延引被遊、來春御歸國之上御覽被遊候は、御宜様に奉存候。右之趣存付申候故、不奉願恐奉言上候、以上。

卯十一月十二日

本多勘解由 判

十一月。曩に足輕及び坊主の綿衣着用を令したるを緩和す。

〔典制彙纂〕

十一月。足輕・坊主僭上に相成候。御公界向御用相勤候節御仕着小袖等被下候分、當分綿衣着用可仕旨申渡候得共、指支之品有之分絹羽織着用承届候。小袖御仕着被下候分、并御貸衣類之儀も、前々絹羽織等相渡候分、以前之通被仰付旨。

十二月十六日。前田治脩在國の期限延長を請ふ爲に使者を命ず。

〔政隣記〕

十二月十六日、相公様御入湯御願之御期月來年二月に付、今二十ヶ月御入湯被遊度御願延之御使、御大小將高山善四郎は今日被仰付、來正月八日御當地發足之筈に被仰渡。但善四郎儀御使御用相濟、直に江戸表に相詰、古詰之者之可致交代旨も被仰渡。

十二月廿一日。金澤城石川・河北兩門に於ける與力番人の作法に關して質す。

〔政隣記〕

兩御門與力御番人、年寄中等往來之節當時會釋方緩怠之躰被聞召候。御火災已前者、板之上に罷出つくばひ慰懃會釋仕候由。如何之譯に而當時之身躰に罷成候哉、此段相糺可申上旨被

仰出候事。

寅十二月

右今月廿一日於御次關屋中務を以被仰出。依之寺社奉行御用番前田式部宅に河北・石川兩御門御番人與力、一組より兩人宛召出、被仰出之趣申渡之。左之紙面取立之。

身躰は進退

私共御年寄衆等御往來之節、御番所は御會釋之節、身躰當時緩怠罷成候躰被聞召、御火災以前与當時之様子、被仰出之趣を以御糺被成、奉得其意候。元來御番所建方、往古者三之御丸御番所之通縁御座候而、縁は罷出着座仕候由。其後御番所板、足輕番所下座板と同様之趣に相成候に付、當時之身躰に押移り申候様承傳申候。御火災以前者つくばひ候与申儀、舊記傳承之趣存居申者無御座候。乍然當時之身躰不宜儀も御座候哉、緩怠之躰被聞召奉迷惑候。右等之趣に御座候間、宜御達被下候様仕度奉存候、以上。

寅十二月廿二日

河北御門等御番人與力連名 判

但一組合宛

前田 式 部 様

中川 清 六 郎 様

竹 田 掃 部 様

十二月廿二日。賭博及び類似の行爲を禁止するの令を新たにす。

〔政隣記〕

かけの諸勝負者御制禁に候處、近年町・在之者共右様之勝負事に携り、不埒成爲躰に候。此等之儀に付、今度町奉行等は申渡候趣有之候。御家中召仕候輕き者共之内にも、不愼之者は右様之出會に相交、小身之人々杯は畢竟子弟成立にも相障候躰。將又正月者勝手向等に而小兒杯之遊事与名付、博奕に似寄候慰事有之、不苦儀之様存候族も候躰相聞え候。たとへ遊び事に候共かけもの仕、勝負を以慰といたし候儀者御停止之事に候條、其主人々々より堅制禁可仕候事。

かけの諸勝負等之儀に付、寛政元年以來別紙寫之通一統被仰渡置候通り、猶更違失無之様急度可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々は可被申聞候。組等之内裁許有之面々者、其支配も相達候様被申渡、尤同役中可有傳達候事。右之趣可被得其意候、以上。

十二月廿二日

村井又兵衛

十二月廿六日。貰ひ子を殺害したる女を磔刑に處す。

〔政隣記〕

十二月廿六日上口於泉野町外礮被仰付、爲檢使御先手物頭音地清左衛門・高島安左衛門、公事場附御横目不破東作、同所附與力兩人等罷越。拷札之寫左之通り。

かせぎ人熊走屋吉次妻

はりつけ

よけ

此者舊惡も有之、其上やしなひ子を口入いたすべき旨申、所々より小兒四人度々に請取、付錢を取、子は殺し、家下等に埋置畢。大罪露顯之上如此申付者也。

十一月

右之者、組外牛圓新左衛門せがれ御算用者牛圓佐介致離縁候妻腹の男子も、右四人之内也。依而佐介儀於公事場指扣被仰付。

但、佐介并父新左衛門儀も指扣被仰付有之候處、佐介儀者改而如本文。

是歳。十村等、百姓の稼・奉公に従ふもの以外に送狀を與へざるべきを協議す。

〔上田舊記〕

一、人別縮方之儀、寛政六年以來被仰渡置候得共、御郡方數年等閑に相成居候に付、行届不

白山下御料
は同十八ヶ
村、御預所
は能登に於
ける幕府領

申に付、今般相改申度旨御算用場より、御席村井又兵衛様へ御達有、相改候品々左に記。

一、他國者先年親元相立、御國之内縁組等申合、當時出生も持候者有之、不埒至極之儀に候へ共、數年罷在出生迄も有之者、本國に今更相返候儀も難忍、仍而只今迄之分は其儘指置可申、尤寺送り人送り取請、他國之人別を爲切可申候。以來は他國者縁組申合候儀は相成不申、若他國者居候へば御關外に送り出、爲便置候者并村役人急度可被仰付旨。

一、白山下御料・御預所者、并富山・大聖寺御領之者も、是迄御國之内へ罷越居候者は指置、前條同様人送り等受取可申、尤以來は養子等縁組申合候儀不相成旨。

一、御郡之者、御家足輕・小者に相成候者之儀、不埒至極成儀に候得共、是迄之分は人別方等閑故、右様足輕等に相成候譯に而、此分帳面に仕立可書出、尤人別を切可申、尤歟役米取立申間敷旨御算用場より觸付。

一、百姓子弟等御家中へ奉公に罷出、譜代に相成候者も有之様子。此分も前條同様、是迄之分は縮方不行届故之儀に候間、帳面に仕立可書出、尤以來右様譜代に罷成申度節、其者より村役人へ相斷候上願出候はゞ、無據分は先々主人へ御郡奉行より及懸合、無相違候はゞ人別を切、歟米取立不申様可申渡。且御坊方・町宿之者に、御郡之者縁組申合候節も、前條同様相心得、以後不埒之至於有之者、本人始急度可被仰付旨御算用場より觸付。

一、御郡之者御家中役小者に罷出候儀は、都而一季奉公人同様、稼に罷出候譯に而無之而は指支候。作方用事に付村方へ呼戻候儀、或者公事出入に付御郡奉行へ呼出候節、罷出可申旨送狀に相調、十村奥書を以相渡、主人方には右送狀を證據に召抱可申、請合狀之内にも村送り狀有之段爲書入、請人一人は居村之者、一人は町方之者可相立旨、御算用場より御郡所へ觸付。

右人別調理方、文化元年以來段々被仰渡、巨細に帳面に仕立書上置、右帳面之上を以御郡所より御算用場へ達に相成候處、御場より前條之通り文化二年被仰渡候事。

一、人別縮方之儀段々被仰渡、村方人別并御家中・寺社方・町方等他手合の奉公稼等に罷出申者、帳面に記、御郡所へ達置、御穿鑿も有之候得共、諸郡洩々之儀有之、全御仕法行届兼申躰に而、町方等へ奉公稼方に罷出候者、送狀無之候而も居留り候様に相成候。十村方へ送狀相願申者有之、盲人・賽等之類、病身に而耕作之用に立不申分、御郡所へ改作所へ相願送狀相渡候へ共、病に託し相願候類際限も無之。尤前々被仰渡も有之、百姓・頭振に而も作人一代送り之儀は、容易に御聞届無御座故、十村手前に而も取揚不申、礪波・射水十村共より僉議方相達候通り、稼人等送狀相願候者共卒爾に送狀難相渡、其内には不一樣成儀有之、不心服之趣も出來、おのづから洩々に相成候儀に而、諸郡御扶持人僉議之上、右一代送り之儀

古來より御様子も有之、頭振たりとも容易に送狀指遣候儀難相成。其内盲人等作方不用立者は爲願可申、其餘病身等申立候者紛敷に付爲願申間敷、小高持たりとも實に御郡方渡世仕兼候者は、村役人僉議之上聞届送狀可指出時は、裁許より其郡御扶持人へ示談之上、裁許十村聞届裏書仕相渡候事に仕候者、縮方可相立旨。右稼人・奉公人送狀之儀相願、御郡所等聞届を請可申旨に候得共、追々願出候分不少、彼是混雜、却而御縮方相洩申所へ至り可申に付、右之通御扶持人并裁許より聞届申様仕度、此段町御奉行所等へ御通達有之様仕度。尤稼方・奉公人送狀持參之者は、先々に罷在候内故障等致出來候而も、先々御支配之取捌に被仰付、落着の上品に寄御郡へ御返に候得共引受可申旨、文化三年諸郡御扶持人より加州・能・越御郡御奉行へ小紙を以相達候。仍而稼・奉公人之外、一代送り之儀は願方指留、送狀指出申間敷旨諸郡一統相談也。

是歲。町奉行歌舞伎狂言興行を許すべきを提議し、家老等之に反對す。

〔諸事覺帳〕

町方人氣和し候様有之可然被思召候。依之町奉行心付之程調出候様、先達而表方へ被仰出、則右奉行へ申渡有之候處、奉行手前に而詮議之上、歌舞伎狂言興行いたし可然、右々所之儀は千日町町端に五十間四方計之地面等圍、夫々縮方等之仕法付等指出候付、年寄中僉議候

上、指支も有之間敷、自然申分等出来不宜候はゞ、其節被指止可然候間、御聞届之段可申渡候。夫に付御家老中了簡も無之候はゞ可奉伺旨、前月御用番左京被申聞候付、於御家老方申合候趣左之通に付、其段申達候處、左之通迄之了簡に候はゞ申上兼候間、御家老中より直に可言上候。則其趣は月番より可被申上旨演述候。今二日玄蕃・圖書・織江三人御前に罷出、左之趣了簡之程段々申上候事。

町方人氣和調之儀に付、今般町奉行より書出候紙面之趣、尙更私共存可有之哉之旨、月番より申聞に御座候に付思慮仕候處、町方近年質素に罷在候内、近頃者何となく人氣和調不仕、偏に潛み罷在候様子に候。町人者專諸職交易に携罷在候者ながら、人氣和調不仕候而は、自から世上之不通にも可相成候間、何れ歌舞伎狂言様之儀興行仕候はゞ可然、就夫右仕法も相立、御縮方も嚴重に仕候而、永く相續候様有之度候。左候へば往々人氣も和調可仕旨、右奉行書面之通御聞届被仰付可然哉に奉存候へ共、私式愚意に存付候は、右之通に御座候而可然儀とは不奉存候。町方之儀は右奉行裁判仕、當時符合之詮議に可有御座候へ共、今一篇何とか詮議方も有之間敷哉。此度右之通歌舞伎狂言様之儀興行仕候と而、惣様人氣之和し候与申儀いかゞ可有御座哉、會得仕兼申候。是迄數年御城下において、右様之雜劇興行仕候儀も承及不申候處、今更相始候はゞ、却而下々風俗之害共可相成哉。元來歌舞伎狂言杯は、誠

に鄙俗不正之猥藝に而、下賤幼愚之輩及見聞候はゞ、一端は歡喜可仕哉に候へ共、往々俗情に押移、農工商之正しきを失し、戯子之比類を見習、おのづから放逸懦弱之風俗増長可仕基与奉存候。殊に水茶屋杯も營候躰に候へば、右見物人のみならず誰彼入込、其内には如何程之不埒出来可仕成も難計、必申分有間敷とも不被存ものに御座候。其上右興行之場所一圍之地取は、廣き様に相見候得共、元來道幅も狭く候處、群集仕候而は必往來之指障にも相成、田畑も踏荒、彼是不可然儀に奉存候。自然御聞届之上申分等出来仕、可指止旨被仰出候而は、御聞届之詮議無之、剩下々に而は莫大之費可有御座与奉存候。右之趣に付、決而不可然儀与申上候儀に御座候。乍然紙面之通御聞届之御治定に御座候はゞ、猶更御算用場奉行・御郡奉行手前も篤与御詮議御座候而、被仰付可然哉与奉存候事。

文化四年

正月朔日。前田齊廣金澤城に於いて年頭の禮を行ふ。

〔政隣記〕

元日快晴、今朝六半時揃に而諸大夫衆等・御家老中・若年寄中年頭御禮被爲請、夫より鶴庖丁御覽。畢而於柳之御間、人持・頭分獨禮被爲請、一先被爲入。重而於御同間、御大小將・御射

手・御異風・新番・御醫師・御儒者一統座付之御禮被爲請、且御表小將等於船之間、一統座付之御禮被請、惣様九時過相濟候事。

但、近例之通諸大夫衆も長袴に而御禮被申上候事。

正月二日。松囃子の儀を城中に行ふ。

〔政隣記〕

二日晚御例之通就御松囃子、七時過より追々登城之處、暮過列立、暮六時頃柳之御間々御出、左之通御囃子等始る。御年寄衆等御盃被下之、御看御直に被下之、返盃被仰付。御家老衆・若年寄中同斷、返盃者不被仰付。夫より役懸り定火消人持・定番頭以下物頭並御城に役所置有之也。迄御流御土器被下之、御看役年寄中。五時過迄に夫々頂戴。畢而猩々じよ御囃子波吉宮門但例之竹田權兵衛相勤候得共、今年出府無之、諸橋舞納候所宮門權進痛有之不相勤に付、宮門勤之、高砂も同斷也。若年寄中御時服之御目錄持出渡之。波吉宮門御目錄頂戴被仰付難有仕合奉存候段取合言上。右之外委曲は別冊諸御作法書之内に有之。

附、御盃等頂戴之人々御禮無之。併初而頂戴之人々者居殘、御月番席々出御禮申述退出。

四海波 御土器御取揚之節諷之 宮 門

高 砂 門 次三郎 太郎齋門 松高き 陸之丞

東 陸之丞 平七 多嘉藏 長生の家 波吉 甚二郎

祝ふなる 波吉 五郎兵衛 松が根の 宮 門

長き命 陸之丞 此御代に 甚二郎

庭の砂 五郎兵衛 桑の弓 宮 門

老をだに 陸之丞 初春の 甚二郎

松も木高き 五郎兵衛 雲かと見えて 宮 門

名取の老女 陸之丞 よしや吉野 甚二郎

或は詩歌 五郎兵衛 かゝる奇特に 竹中 甚助

友なひ語らふ 角間屋 文次 秘曲傳へし 柳川 全作

實や大原や 宮 門 君が代は 陸之丞

せうの岩屋 甚二郎 盛なる藤 五郎兵衛

かやうに名高き 宮 門 庭には金銀 陸之丞